

鹿児島県史料集
(55)

通
昭
録
(四)

鹿児島県立図書館

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料集第五十五集としてここに「通昭録（四）」を刊行いたします。

「通昭録」は、江戸時代後期 得能通昭（享保十四年生 寛政元年没）が郡奉行や勸農使として務める傍ら収集したものを江戸在勤中にまとめたものです。

内容は、鹿児島藩主の編年記・薩摩藩及び公儀の法令・故実・室鳩巢などの漢学の説、番町皿屋敷の由来などの話、和歌・和文・随筆等を含みます。

今回は、八十余巻のうち巻之二十九から巻之三十五までを刊行することといたしました。

本史料集は、鹿児島県立図書館所蔵本を底本とし、都城島津邸本を参考に、鹿児島大学名誉教授の中山右尚氏によって、編集・校閲・校訂が進められ、刊行の運びとなりました。長期間にわたる中山氏の御苦勞に對し、心からお礼を申し上げます。

また、この史料集が本来の目的であります郷土資料の保存と地方史の研究や県民の文化向上に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成二十八年三月

鹿児島県立図書館長

原 口 泉

目次

解題		i
例言		iii
通昭錄卷之二十九		1
石馬集卷之一		1
通昭錄卷之三十		18
石馬集卷之二		18
通昭錄卷之三十一		33
石馬集卷之三		33
通昭錄卷之三十二		50
石馬集卷之四		50
通昭錄卷之三十三		66
石馬集卷之五		66
通昭錄卷之三十四		88
石馬集卷之六		88
通昭錄卷之三十五		109
石馬集卷之七		109

解題

本集「通昭録（四）」は、鹿児島県立図書館蔵「通昭録」巻二九から三五を収める。その内容は、得能通昭が書き集めた『石馬集』という歌文集の全七巻である。

なお、底本の鹿児島県立図書館蔵本の判読のためには、東大史料編纂所蔵本（マイクロ版）及び都城島津邸蔵本を対校本として用いた。伝本については『通昭録（三）』の丹羽謙治氏に詳しい考察があり参照した。担当した『石馬集』に於いては、三本に著しい異同はないが、県図本に誤写はあるものの東大本と親近性が高く、都城本は、仮名遣いや用字などが他の二本と相異することが散見され、書写者の素養という個性の反映が認められる。

【書誌】写本、大本、七巻四冊、（本集分のみ）。墨付二四〇丁。用紙は全巻共に楮紙、版心に「鹿児島県」とある罫紙を用いている。

【内容】

「序文」に年記はない。序文では、

古の代では、和歌は勅撰集などが編まれ後世に伝えられてきた。雲の上の高貴な方々ではその伝統が続いて後世に遺す企てはあるとしても、地方の一般の人士は、たまたま作った歌文があつても、そのまま捨て置いて後世に伝わることもない。私はそのことを残念に思い、長年、耳目に触れた歌文を書き集めてきたが、それが年を経て数巻にもなった。そこで、「杜子美」（杜甫）の詩が描く、唐の太宗の故宮である玉華宮に遺されていた「石馬」にちなんで「石馬集」と命名した。

と通昭は述べている。

同じく和歌集（連歌を含む）には、『石馬集』より少し遡って編まれた「通昭録」巻十一、十二所収の『瑾瑜集』全二巻（宝暦元年（一七五一）十一月序）がある（本鹿児島県史料集(53)所収）。

こちらは、『史記』の「屈原賈列伝」によつて「瑾を懷き瑜を握る」の言に「より「鐘山の美玉に譬えて」の命名であつた。「美玉とは、日新公の「いろは歌」をはじめ近世初期の「国の守」（藩主）の和歌の意である。加えて、姫君や薩摩に流された近衛信尹などの歌や連歌が収められている。

対して『石馬集』は、巻の四で「二十一代集」巻頭歌なども採録しているから、古くは万葉・古今の和歌からはじめて、主には、中世末・近世初期から中期までの、天皇、皇族、公卿、大名、武家、僧侶、諸人、いわゆる堂上・地下の人士の和歌・和文などを採録している。所収の年代の下限は、「石馬集巻七（6ウ）」に「肥後熊本百首和歌 安永三年頃」（二七七四）とある。また、同じ巻七（16才）の二階堂省行の「歳旦」の歌に「乙未」とあるので、この干支を翌安永四年とすると、本集の成立は、安永四年以降の成立と推測できよう。採録の内容は、和歌の他、若干の漢詩・連歌・俳諧と歌文で綴る紀行文、細川玄旨（幽斎）らの歌論（巻七）などである。

所収の数は、和歌は、重複や東大本・都城本からの補入分も合算し、若干の「俳諧歌」（狂歌）を含めると、一八八三首、漢詩は、偈や辞世」の詩を含め一九首、連歌は、一九韻、俳諧は発句、付句とも一二句である。

歌文で綴る紀行には、

○「樺山久初道記」（巻二）

○ 寺山用央「海路詠草」(巻五)

○ 「おせん女道の記」(「おそん」とも) (巻五)

○ 「兼利自記」(巻六)

の四篇がある。

私家集としては、「赤崎貞幹集」(一二三首、四季などの部立あり)がある。貞幹は藩儒の赤崎海門、和歌は京の柴山持豊卿に学ぶ。文化二年没(『称名墓志』)。

また、次のような宮中歌会や古今伝授、法皇による加点的記事や詠歌も見られる。

○ 宝暦四年正月二十四日、公宴御会始(巻一)

○ 宝暦九年正月二十四日、御会始(巻二)

○ 明和四丁亥二月十四日

今上古今御伝授同并四日竟宴御会など(巻五)

○ 延宝七年(一六七九)六月、陽和院殿(光久公の後の夫人)の「詠

歌」を法皇が覧覧の上、加點して批評を授けた。(巻三)

と、このように多彩である。

しかし、部立があるなど、全体が系統立った構成で編纂されているわけではなく、年代順の構成になっているわけでもない。

やはり、通昭自らが序文で記すように「耳に触れ目に触るゝにつけ書き聚めしまゝ」の状態だったのだらう。また、これらの歌文はどんな資料から採録したか、すなわち典拠については未考である。以後の研究に俟ちたい。

所収の歌人は、凡そ四七〇余人。その人名は、『通昭録(一)』所収の「惣目録(一〇〇―一三頁)」でも通覧できる。

【薩摩藩の歌文集】

『通昭録』巻三五までには、先掲の『瑾瑜集』(第二集所収)と本『石馬集』とを収めていた。この二集が宝暦から安永のころ、十八世紀後半の成立と考えると、二集は、薩摩藩の歌文集として著名な川畑篤実撰『松操和歌集』(文政十一年(一八二八)八月序)に先立つものとして注目できよう。『瑾瑜集』は、歌数などにおいて規模は小さく、『石馬集』は、歌文集としての系統性や完成度において『松操和歌集』には及ばないが、中世末・近世初期から中期の和歌及び薩摩歌壇の資料としては、貴重でありその価値は高い。また、この三集の歌人たちを含む薩摩の人士の掃苔録である『称名墓志』(記録奉行本田親孚撰、文化一一序)は、所収の人物の詩歌を紹介しているが、その典拠としては、しばしば『西海拾玉』なる書を掲げている。だが、残念ながら、この書の存否は不明である。

かつて、昭和九年に波多江種一氏は、『西海拾玉』の存否が不明なことを惜しみつつ、自著『薩摩歌壇の研究』1 称名墓志より見たる薩摩歌壇の研究(同八月、私家版)第一章「西海拾玉」論考において、その成立は、明和以降と推測し、その全体像を推測されている。その像は、規模や構成のありようからすると、本『石馬集』と同類の歌集を想起させる。種一氏は、通昭編の『石馬集』の存在に気付いてはおられなかったようである。

『石馬集』の成立期が安永以降、『西海拾玉』が明和以降とすれば、明和・安永(一七六四―七九)は、連接する時代だから、『西海拾玉』がわずかに早いくらいで、ほぼ同時期に成ったとしてもおかしくはない。この上は、『西海拾玉』の出現を俟つて、どんな歌文集であったのか比較対照をしたいのだが、今のところは、種一氏の論考に立つて『石馬集』と『称名墓志』との精緻な比較を課題とすべきであらう。

その際、種一氏が疑念を抱かれている『称名墓志』備考一卷に付加した親孚門人伊地知季安が手がけた「補遺」の部では、『西海拾玉』からの引用が皆無であることの理由についても考究すべきであろう。

また、薩摩の和歌・歌壇の先行研究には、もう一点の書がある。

『温故知新斎主人 坂田長愛著『寛藩紀伝体和歌史』(昭和八年九月成、未刊、自筆清書本が鹿児島県立図書館に所蔵されている)がそれである。第三章「堂上風隆盛時代」は、島津光久公・奥方陽和院の記述から始まる。延宝七年、陽和院の詠歌が時の法皇(同書によれば、後西院天皇)の勸覧に浴したという逸話の記述は、『石馬集』の先掲の記事と合致している。坂田氏は、出典を記さない書きぶりなので、これが『石馬集』よるとは断言できないが、その可能性は否定できない。坂田氏の典拠の調査とともに、『石馬集』『称名墓志』との関係も見逃せない課題である。

【参考文献】

福井迪子、橋口晋作、田中道雄編『松操和歌集 本文と研究』鹿児島県立短期大学地域研究所叢書 第二輯(昭和五五年三月)
國學院大学日本文化研究所編『和学者総覧』(平成二年三月 汲古書院)
『公卿諸家系図』(昭和六三年十月 続群書類従完成会)
長澤規矩也監修・長澤孝三編『改訂増補漢文学者総覧』(平成二三年十月 汲古書院)
林 匡「薩摩藩記録奉行得能氏について」『鹿児島史学』二〇〇四年 五〇号)
田中明「詩歌によむ修学院離宮の構成と野山 修学院八景詩歌、

十境詩の解説を通して」『日本建築学会計画系論文集第七三巻第六二八号』(二〇〇八年六月)

本稿成すにあたっては、亀井森氏、長福香菜氏に種々ご協力をいただき、丹羽謙治氏のご教示も忝くした。

『石馬集』本文作成には次の諸氏に補助を願った。

井柄光博、生田美津希、上ノ原怜那、大石若奈、大脇輝希、平川慎之介、波平真由子

また、都城島津邸、鹿児島大学附属図書館、鹿児島大学教育学部文系研究事務室にもお世話になった。

ここに厚く感謝申し上げる次第である。

特に、亀井森氏には担当者中山が長期に入院したため、二校以後の校正一切を、ご多用中にもかかわらずご担当いただいた。ここに記して深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

例 言

一、底本は、鹿児島県立図書館本(略称「県図」)とし、判読の参考に、東京大学史料編纂所A本(『通昭録(三)』丹羽謙治氏解題による)(略称「東大」、都城島津邸A本(同上)(略称「都」)の二本を対校本として用いた。

一、丁替りは、半丁毎に、(1才)、(1ウ)のように表示した。

一、県図本の誤写は、東大、都の二本によって正し、県図本の語句は()内に示した。また、県図本に欠字がある場合は、東大、

都によって補い、（ ）内に欠と記した。

一、異同の語句は、該当部に＊1、＊2のように示して、半丁毎に注記した。

一、本文の傍注などは、できるだけその部分に付記したが、＊印を付けて注記した場合もある。

一、頭注の「歌題」などは、【 】内に示した。

一、本文作成に当っては、

○漢字は、原則として常用漢字を用いることとした。

○仮名遣いの乱れは、それ自体も国語史等の資料たりうるのでそのままに翻字した。

○長文には私に読点（ ）を施した。

一、本文および解題の作成は、中山右尚が行った。

石馬集編

通照録卷之二十九

石馬集序（席）

夫和哥は遠き神代に始まり、難波津の砂尽る時なく、富緒川の流絶る更なし、春鶯の花中に嘯り秋蟬の樹上に吟する、いつれか倭歌の體なら（り）さるはなし、遠き世のむかしは世々に仰事ありて文にも誌し後の世に伝へ給ひしか、末の世に至ては及びなき雲の上は知らず、あまさかる鄙人は適よみけることくさも、かひやりすてゝそのまゝあとはかなく成り行くそ、いと口おしきわさなれ、僕深く感ずる事ありて、耳にふれ目に觸るゝにつけ書き聚めしまゝ、年を経て巻を（1才）

成しぬ、名つけて石馬集といへる、竊に杜子美か玉華宮の詩に採る（り）事あるにや

越智通照（1ウ）

石馬集卷之一

宝暦四年正月廿四日公宴御会始

梅花告春

御製

咲初る片枝の梅ははる来ぬといふ計にも薰るのとけさ

撰政道香

言の葉の道もさかふる春を先つみかきの梅の匂ふはつはな

職仁親王

民草も豊になひく春告てかほる御垣の風の梅か香

伏見兵部卿貞建（2才）

時を経て咲やこの花難波津の道のめくみの春そつてくる

音仁親王

言の葉の道の（欠）恵みもさく梅の花よりつくる春をあふきて

柳原権大納言光綱

君か代に（は）あふを嬉しとほゝゑみて梅も御垣の春をつてくる

冷泉宗家

ふ（ほ^{*1}）みこのむ名にも立枝の梅の花道ある春を見せてさかし

冷泉為村

さくや此はなを千里の初花に春風しるく（ゝ）（2ウ）

*1 東大・都「は」の右に「ふカ」とする。

匂ふ梅壺

宝暦四年正月廿四日 公宴御当座御会

初春 御製

立ならふこのめもよほす園のうちにふくものとけき春のはつかせ

河上霞

有栖川宮職仁親王

氷とく柳の木かけゆく川やかすむ流もみとりなるらん

上冷泉為村卿

曉花

春寒き片枝の雪のしらむ夜も梅か香かすむありあけのそら

岡早蕨

高松実逸卿

雪は今消て岡への松かけにやゝもへ出（3才）

るはるのさわらひ

見花

日野資枝卿

むかふより色香にあかてさかりなる花の木かけにくらすこのころ

野遊

庭田重熙卿

今日も又花うくひすにさそわれてかたも定めす野辺にくらしつ

款冬盛

五辻盛仲卿

春ふかき川瀬の水に影見えてあかぬさかりの峰のやまふき

新樹

風早公雄卿

朝風にわか葉の露も打ちりてなひくみとりの木影すゝしき（3ウ）

夜郭公

京極宮家仁親王

雨はるゝ雲間の月にほとゝぎす忍ひかねてやもらすはつ声

庭夏草

武者小路実岳卿

来ぬ秋は花に咲へき種もあれとこのころしける庭の夏草

立秋

葉室頼要卿

いつしかと身にしみ初て秋来ぬと音には立る萩の上かせ

萩映水

飛鳥井雅香卿

ちらぬ間も色に流れて（都）（るゝ）さく萩のにしきをひたす野路

の玉川

薄風

上冷泉為泰卿（4才）

白妙の袖かと見へて花すゝき秋の野風に誰まねくらん

遠鹿

近衛内前卿

山ふかくおのかつまとふ鹿の音をかすかにおくる穂のさよ風

海辺月

下冷泉宗家卿

影清き月は波間にいつの海や沖之小島も見へてくらぬ

田上霧

烏丸光胤卿

秋ふかみはらふ稲葉の風見えてむらゝなひく小田の夕きり

菊露

姉小路公文卿

幾千代も契り老せぬ秋かけて置そふきく（4ウ）

の花のしら露

時雨晴

広橋兼胤卿

ふるもとく晴るゝもやすく村時雨松ふく風に声を残して

泊千鳥

飛鳥井雅重卿

なくさめて千鳥もなくや泊舟夢はむすはぬ波の浮ねか

深雪

伏見宮貞建親王

外よりもつもるも深き風はふる木の下かけのにわのしらゆき

忍恋

九条尚実公

しのふそよ雪の下草人しれすもゆるおもひも色や見ゆると（5才）

聞恋

中山栄親卿

等閑にかたり(る) つとふる人の上をきゝそめ
しよりこふるわりなさ(き)

稀逢恋

藤谷為香卿

しられしと忍ぶ人にもまれ／＼の枕をかわす中そわりなき

被忘恋

柳原光綱卿

うしや人いひし契を忘るやとおとろかしてもあらぬ(欠) いらへを

恨恋

常陸大守音仁親王

けにときく心は見せよ我うらみもらすことのはいらへなくして

嶺松

久世栄通卿(5ウ)

影高くかすむ高根に春の色のみとりまかふる松のひとむら

庭鶴

園基衡卿

玉しきの砌になれて我きみかよろつよちきるつるのもろこへ

旅行友

高野隆古卿

けふ幾日うたをかたりて旅衣うらなくなるゝ友そしたしき

窓中燈

摂政道香卿

春雨の音しつほかな(ほ) るまとの内はひかりもしめる夜半のとも
し火

祝言

三条西実称卿

身にも今ふるき恵みをうけて猶君いく(6才)

千世とあふく此時

講(沙カ) 日野資枝卿

題者 上冷泉前中納言

奉行

園基衡卿

落葉

日高為

めてよ猶水なき空に吹たえてにしき波より風のもみちは

歳暮

伊達光宗越前守

たらちねのおひゆくすへのおもわれて猶おしまるゝ年のくれかな

惜花

光宗(6ウ)

限り有てちらはちりなんちらぬまに花をは風のさそわすもかな

平田氏かもとにてよめる

心有りてかく

樺山久初 主計

心有りてかく静にも住なすや所はやまの奥ならねとも

小森某新蔵吾妻にてはかなく成しを舍弟の中馬諸香の方へよみて遣
しける

田浦検校

猶やうき袖の涙の玉くしけ二世なれにし人の別は

生れしを見しも程なき人の世のなにはかりのみしかかりけん
うき秋の木の葉かれにしはゝそ木のあるにもあらぬ(7才)

身とやわふらん

かへし

中馬諸香源兵衛

二代までなれしとしたふことの葉にいとゝなみたのつゆそおきそふ
はゝ木ゝのなけきをそへて堪かたきそのはらからの別とをしれ

玉の緒のみしかきのみか声をたにきかて別れし事はかなしき
植置し庭の梅かへ咲匂ふ花もあるしを待やわふ（欠）らん

日向国宮崎御代官池田喜八郎某景清五百年忌に墓に詣てゝよめる

世々までもわすれやはする水鑑かけきよかれとおもふ計に（7ウ）

水鑑景清居士はかけきよの法名なれはかくよみける也此時いつくともなき老人杖（枝）にすかり来り、ほとりに遊び居たりし童ともにむかひ短冊一枚をわたし、喜八郎殿のかへり給ふに（かた）まいらせてくれよといひ捨て塚の後にかくれたり、杖（枝）計残りける短冊の歌に

心たにすまは景清水鑑くもらてする代々そうれしき

島原の三国といへる遊女年二十三にてよめる、貞女両夫に見へすといふ事さへあるに、誰ともなく人まつ暮おもひつゝけ（*字欠）けると序書きして（8才）

誰そやたそ誰か今宵の妻ならぬ*東大・都「さだめなき世に」
さだめなき身は（欠）

西行法師の絵（紹）を書き近き内其命日も来れは閏月なから花をも手向給へと美代清相におくるとて

とくとくと苔の清水の音絶へす流れての世に君や汲むらん
木村静隠

西行本歌に

とくとくとおつる岩間の岩清水汲ほすほともなき住居哉
尾畔花 *東大・都「種子嶋 時 権助」

世のつねの色香とや見るさくら花植けん君かむかしおもへは（8ウ）

とくおそく梢をわけて麓よりおのへにつゝく花のしらくも

壽老人の絵を頼置けるに書ておくられければかくなんよみて

静隠におくり侍る 美代清相

たのめつゝ命なかくも老ぬれは（て）人のちきりそ名こそ忘れぬ^{*1}
かへし 木村（代）静隠（陰）

契りしは名こそ忘れね老ぬれは人の心にうとまれやす

明石紅葉 美代清相六郎兵衛

高き名の瀧田の外にあかしかた神代もきかぬ浦のみちは（9才）

*1 都「ね」

須磨桜 清相

植しより幾世あかしの浦に経て花もむかしの若木こふらん

寒夜埋火して人のしはしと留しをよめる

清相

埋火のもとさへ寒き冬の夜にさそみすの鳥我をまつらん

西行法師か、仏には桜の花を奉れ、我なき跡を人とむらわは、
とよめるかへし

木村静隠

奉る此一枝のさくらはないひしことはのまゝにまかせて

泰（春）清廟の御逝去に

日高為春曾右衛門（9ウ）

水増り見帰ら（り）なん三ツ瀬川三国の民のなけくなみたに

窓の竹

美代清相

植置きてなれ見るからはすなをなるこゝろをまとの竹にならわ（り）
ん

寺山用央

太次右衛門（太郎右衛門）

志し神やうけなん手向にと植し桜の花咲にけり

喜界島にて雨乞によめる

樺山好文

初五郎兵衛

ますらおか早苗とるほと雨を見む世にすみよしの神のしるしに

野村六左（右）衛門なる人の内室一宮明神の（10才）

*1 都「華」

託宣の歌とて人の語りし

光ある心のまゝに叶ふへし千わやの神のあらぬかきりは

二階堂省行におくる

風早宰相実積

雁そ鳴そのたよりかとおきいつるまとはさむきありあけの月

大坂の老人のよめる

打つける又来る秋の今宵まで月にはおしきのちなりけり

落梅

樺山忠陽

相馬

ひとかたに惜まむ（る）ものを梅のはな色に匂ひのそひてちらすは

山家霰

忠陽（10ウ）

玉あられふるにはけしき音もなし軒端くちたる草の庵は

寄鏡恋

忠陽

日にそひて物おもふ身のおとろへてむかふかゝみにみへてかなしき
二月の末つかた、国のかみ東の旅におもむ（欠）かせ給へる御
供にいとやんことなき少人をめしくし、かほかたちいつくしく
世にならひなきにほやかなる（る）重複ありさま、若き人
はいふもさらなり、かしら（ら）ナシに雪をいたゞき、つ
えにすかる老人すら、なへて心をうつし別れを惜めるを、予も
余所なから見るさへ、け（11才）

にことわりおほえて心の内に思ひつゝ（欠）け侍る

忠陽

いかなれは春はこなたに吹かせの華をあつまにさそひ行らむ

寄神祝 元禄五年五月二十九日

忠陽

あまみてる神もうくらしみしめ縄なかき世かけていのることのは

聞郭公

忠陽

誰か里にさたかなるらんほとときすしとふ枕に遠さかる声

夕梅 宝永二

忠陽

くれぬまに猶色めてむ梅の華やみはあやなき匂ひありとも（11ウ）

不逢恋

忠陽

あふことをさすかゆるさぬ人そうきしと（*都「た」）ふになひく
色はみゆれと

松有春色

忠陽

春に今色そふ松の一しほになを十かへりの華も待みむ

白地恋 元禄十二

忠陽

おもわずにたゝ行すりの袖の香をやかて心にしめぬものとは

寄橘恋 同十三

忠陽

このよこの逢瀬絶行中川にせめてはかけよ夢のうきはし

靄 同十四

忠陽（12才）

えならすに花なき草も置渡す靄を光の野辺のあけほの

恨恋

忠陽

言に出て今はうらみむ心にもつゝみあまれる人のつらさを

言初後増恋

忠陽

うき出ていひよるかひも中川や渡りて袖のぬれそふもうき

政徳院殿十三回追善懷旧三首

北郷久嘉 作衛門

おりく／＼に袖はしほるゝ月花をとに見し世（迄）は今もわすれず

小森一山（12ウ）

武蔵野の草葉の露と消し世をしのふなみたもはてしやはある

享保十三年文月三日の朝、牧胤昌の庭へ植置れし槿見にとて、

小森一山同政定を伴ひ侍りて人々よめる

小森一山

見る人の心も涼し朝顔の花うるほへる雨曇りして

小森政定

いましはし日影もくもれ槿の（13才）

花もてはやす今朝のまか（り）きに

樺山久初 主計

咲きまじる花のよそひもことなるやあるしからなるやとのあさかほ

返し

牧胤昌 仲左衛門

ふりはへてとふ嬉しさを朝顔の我が袖かきに余りてやさく

松色浮水

胤昌

ふかみとりさか行軒の松のかけ幾千代のそむ庭のいけ水

一山（二字欠）

ふりせしな此池水にみとりそふ軒端の松のよろつよのかけ

胤昌（13ウ）

きりく／＼すひとよ／＼にさゝの屋の枕に高きこへもよわりて

寄露恋

一山

恨わひかくてきゝなは露の身の思ひは後の世にそみたるゝ

胤昌

今もよにあらはと和歌（泉）の浦の波かけてむかしの友をしそ思ふ

牧胤昌 仲左衛門

しらせはやうきをかさねて我袖に涙の露のかゝるうらみを

款冬 元禄十三

日高為春

かきりありて(欠)散ともしは(ら)し咲にほふ日かすかさねよ八重の山ふき

松間藤

為春

咲初て猶いろ(ち)ふかし松のはの(14才)

木の間にひく藤の花ふさ

京師留守居たりし時、島原の太夫村雨か道中を見てよめる

弟子丸

いつくまでふりて行らむ村雨にぬれて(欠)も見たや老の身なれと

あくた川おのじとの詠歌とて、江戸にて聞侍る 享保十三

みし人のなきはかすそふはかなさに今さらゆめと世をそおとろく

飛鳥井栄雅

村雨はすきつるねやの板間より雫とともに月そもりくる(14ウ)

*1 都「おのし」。

駿州鞠子小野寺薬師仏法楽和歌六首

山霞

丹波笹山城主(六字欠) 松平紀伊守信岑^{*1}

けさのかけ山は碧^カにいひしらす霞むにしるき春ののとけさ(き)

野鶯

小普請元御小姓組御番(当) 稲^{*2}(津) 求馬直唯

梅もやゝ時めく野へにいとはやくとふはいつくの谷のうくひす

河柳

寄合分^カ駿河御城番 諏訪兵部頼載^{*3}

春風はいともしつけき河水にえたまつうこく青柳のかけ

遠花

元御書院番隠居 雨宮隼人正峰

とめゆけは猶程遠し句ひくる風をしるへの花のこの(れ)もと(15才)

*1 「常^カ」

*2 東大「富」、都「留」

*3 東大・都ルビ「カツ」

紫藤

浄土宗蓮光寺堅卓^{*1}

むらさきの花の(欠)色こき藤か枝は春の名残に見るもえならて

歳暮

中院通躬

誰とてもかゝらん年の暮なれや身のほと／＼の春のいそきは

松雪(書)

細川幽斎

今ははや心のまゝにつもるら(欠)しあらしの後の松のしらゆき

寄道祝(欠)

枕山久初 主計

たたせしな国てふ国のはてまでもこゝろをこめてしき島の道

寒庭露

長崎通好喜右衛門(15ウ)

*1 東大ルビ「レン」

露を見て独なくさむ心よりそのまゝ庭の草もはらわす

小森一山

人問わぬ庭のおすゝきはらわねはおきそふ露もおのれこほるゝ

尾畔桜

日高為一次左衛門

たゝ／＼に松を残して山はみなうつみはてたる峰の白ゆき

埋火

美代清相

新枕かまさりする心地して立ことかたきうつみ火のもと

初雪

牧胤昌

夜のほとは猶さみしくて（さとして）関の戸を（16才）

明ておとろくけさのはつゆき

寺山用央

さみ／＼し夜半の嵐の音聞ておもひし事よ今朝のはつゆき

小夜中山

美代清相

又越てむかしの人の跡や見ん是もいのちよ小夜の中山

寄弓述懷

寺山用央

一かたに取もさためぬ梓弓何にひかるゝ心なるらん

早苗

美代清相

打むれてうとふ（う）田歌の声々につれへとる手のいそく若苗（16ウ）

後朝恋

牧胤昌

逢見てもまた言の葉はつきなくに夜はほの／＼と（欠）あけてゆく
そら

冬月

有栖川

さむけしな高根の月の雪にはれあられにくもる宵々のかけ

湖月

赤崎貞翰*（東大・都「源助」）

鳩の海やひらの山風音ふけてさゝ波近くすめる月かけ

薩摩中将吉貴朝臣五十賀（二五賀）

屏風和歌

霞める野に若菜摘所

近衛左大臣殿 家久*（二字欠）（17才）

百年の半の霞わけ初めて若菜も千代も袖に摘つゝ

軒の桜に朝日のさす所

朝日影梢を照す家さくら匂ゑるうへに長閑さそそふ

岸の松に藤の咲かゝりたる所

さかへてはかゝれ藤波花かつら岸なる松もよろつ世までも

村雨に時鳥の鳴所

平松時春卿

郭公初音待ゑし今よりはあかすかたらへ村雨のその

沼水に菖蒲草引所（17ウ）

沼水に千年根させる菖蒲草引人さへ（欠）や（よわひ延へぬ

木陰に人の納涼したる所（*都「ところ」）

あすもこむ思ふに叶ふすゝしさ（き）は岩松かせ（*都「かせ」右
傍に「本ノマゝ」と注記）水のなかれて

庭に萩の咲たる所

石井行康卿

咲見てる（も）籬は（の）にしき朝な／＼（朝々）露も色そふ庭

の秋はき

川水に月の移たる所

秋に澄てよにたくひなれ(き) 夜とともにちきる川瀬の水と月とは

紅葉の薄の*(東大・都「薄の」の右傍に「本のマ、」と注

記染みたる所(18才)

露霜の*(都「色も」の右傍に「本ノマ、」と注記) 色も見えて紅

葉はの色にはへある千(手カ) 入一しほ

山に時雨の降たる所

時慶朝臣

冬きぬと空にもしるし雲かゝる外山(都による、 県図・東大判読難)

はけさや時雨降らむ

池水に水鳥の遊所

所から千代もすむへき池水になれもなれてそ遊ふおしかも

竹に雪のふりかゝれる所

草も木も皆白たへの色ながら緑まかわぬ雪のむらきへ

右四季十二首の倭歌 吉貴公五十の御賀(18ウ)

の時継豊公より近衛左府公へ仰越され四卿(郎) 詠歌自筆屏風

一双にしまいらせられ(二字欠) ける

延享三年宗信公初て御下国の時、大坂(阪)にて二題を賜ふ時

よめる、

郭公周

中馬諸香

このころは聞につらしとほととぎすいつくの里のたれかうらむる

寄月恋

おもひ余りわするゝやとて見れは又月に立そふ人のおもかけ(おもひかけ)

伊勢貞昌、塩釜といふ桜をお(を) くらなければよめる

阿蘇玄興

みちのくははるかなれとも一ゑたの華にむかへは(19才)

ちかのしほがま

黄門任官の時

水戸光圀*(都「国」卿

位山*(東大、右傍に「イくらき坂」都同じく「くらき坂イ」と注

記) のほるもくる(や) し老が身はふもとの里そ住よかりけり

八十余歳にて飛鳥山の花見にまいりてよめる 岩元興哲

老か身は又見る事も定めなしおもへは花に名残こそあれ

除夜に江府の勤めいとま(三字欠) なきによみ侍る

種子島權助へ(三字欠)

くれてゆく年の名残もなすわざのつらきにつけておしむ間もなし

木村静隠(19ウ)

人を待人を迎しむかしにて我身の雪のふりまさりけり

明道先生大公無我の心をよめる

室直清

ならわしのこの手かしわのふたおもて身はくすのはのうらみ有とも

ある偈*^{或云古月}（割書の注）学文の為に都に登る時に其母のよめる

待つそとよ衣の色はとに（も）かくに心のにしき着てかへるさを
武州品川にて傾城を見てよめる
あわれなり同じ浮世に同じ身の（20才）

樺山久初（助）

しな／＼かわる人のいとなみ

伊勢貞矩の懷（嬢^カ）離別の後よめる

此まゝにあわれ*（東大・都「あわ」て^カ）と注記）きえなは死
手の山子をおもふゆへに道やま*（東大・都「道やま」よ^カ）と
注記）とわん

飯野木崎原の内大刀洗川にてよめる

牧胤昌

今も名に流れてたゝす武士の敵をうちとる太刀あらい川

老暁

いにしへはおとろかさされし鳥かねもまちてこ（欠）そきけ老のあか
つき

独寝の別

ひとりねは手枕までのちきりにて（20ウ）

とこかへりこそ別れなりけり

右二首大龍寺門前に住ける老女のよめる歌也。黄門君の聴に達
し一世養（巻）を賜ひしとそ（云）

或説に根占の百姓の娘のよみける、都に聞え（へ）て禁裏にて

おもひきやつくしの海のはてまでも和歌の浦波かゝるへしとは

東武御旗本青山氏の母人死するとて

経帷子御無用

生れにし時も衣は着さりけりもとのすかたになりて帰らん

引導御無用（21才）

ひとすしに教なくともまよわしなもとくる道に帰る身なれば

沐浴御無用

もとよりも心の奥の清けれはいかなる水に身をはすゝかん

納涼

美代清相

待とりて袖に涼しく也にけり日も夕くれの山の下かけ

夕くれの山名所也しを知らずしてあてられしうたの躰よろしき
（く）よし、*（都「由」小森一山の（ノ）褒美有し（アリ）

*（以上、細字にて割書）

金吾久甫君の百ヶ日によめる

美代清相

夢ならて又あふことは片男波のあわれに消し和歌の浦人（21ウ）

四十賀

水戸光圀

文の道迷わぬ年に逢坂の清水に向ふ影もはつかし

先祖忠元古戦（ン）場を通りてよめる

新納久品 内蔵

今は我が涙そさそふそのむかし旗手なひけし野辺の春風

嶺上松

大原貞以 十兵衛

朝ほらけ峰のよこ雲とたへしてやゝあらはるゝまつのみらたち

美代清相

雲埋む峰より上にあらわれてひとり老木の松そ木高き（22才）

寺山用央

明る夜の峰にわかるゝ雲間より見えて木高き松の一もと

大原貞正 林左衛門

立おほふ峰の浮雲ふき分けて嵐の見する松の一むら

中馬諸香

千代しめて鶴も住らし白くものかさなる山の峰のまつかへ

中馬諸直

* 県図注「源右衛門／諸香の子」 * 東大注「源右衛門／同源兵衛」 * 都注

「源右衛門／後源兵衛／諸香の子」

花の春紅葉の秋も深みとり松か高根にいろもかわらす

蛙 田中盛庸市助／後新八（22ウ）

水あせて草のみしける古郷のふる井のかわつ声そ淋しき

韓文公の詩の心をよめる

中院通村

白雲の家路はいつこふるゆきにすゝまぬ駒のあしからの関

松島にて女によみて遣しける

美代清相

浜の名のまつとし聞は帰こん波の千里はさもあらはあれ

義岡久中相／馬の夫人のよめる

軒近くたゝひと（欠）声を鳴すてゝいつち行らん山ほとゝきす（23才）

鹿の音を聞んとて或夜よし野にいたりしに鳴さりければよめる

境田通節

小倉山*（東大・都は右傍に「秋ふかみイ」と注記）（県図「秋ふ

かみ小倉山」と続ける）この頃たえすなくしかの鳴かぬは妻に逢ふ夜成らん

小倉知直か妹十四歳にてよめる

宵の間は時雨に閉し槇の戸を明けておとろく月のひかりは

甲申の仲秋月見かてら名越恒をとむ（ひ）らひてよめる

二階堂省行與右衛門

望月の今宵はよしやくもるとも又こん秋のひかりこそ見め

是過し年大役あり世をせはく（23ウ）

すみ給ひしをかくはよみける

かへし

名越恒篤 左源太（左源五ツ）

向ひ*（都「向かひ」）寄し人の情をミ（三）つ月に心のくまもはれてうれしき

みつかから文を学ふ（二字欠）心をよめる

山田君豹喜三右衛門*（漢学者総覧「喜右衛門」）

玉鉾のみちやいつことしら雲の八重たつおくをたとりつゝゆく

身まかりぬる前の夜ある人をとむらふてよめる

日高為春

立わかれ又逢ふ事もなつころもうすききりの人こゝろかな

寛延二年の春大隅国古江の里に（24才）

旅泊せしに雨のふりければよめる

古月和尚

春雨のふる江の里は波もなしおさまれる世のしるしとそ聞

幾千代かふる江の里の草の庵に夢おとろかす波風もなし

いとけなき子の死したるによめる

小森

かく計あたに消なん物そとはおもひもかけすなてしこの露

親を置いて誰をたよりにおさな子の帰らぬ（ん）旅にまよひ出けん

ひとりこそ死出の山路をこゆら（ま）めと（24ウ）

おもひやりては打なかれつゝ

我こそはうくへき花も焼香をも今日子の為とたむけかなしむ

さきの世の何のむくいにかく計なけきおほかる身と生れけん

関ヶ原合戦既に危く見えしかは大谷吉隆によみて遣す

平塚因幡守

名の為に捨るいのちは惜しからし終にとまらぬうき世とおもへは

かへし

契りあらは六ツのちまたにまてしはしおくれ先立つ事はありません

赤崎生身のいたつきを問ひ来るとて（も）（25才）

自よめる歌を持来りければよめる

山田君豹

問ひ寄し情のみかは言の葉の花にわするゝ老のいたつき

二條城行幸の時御会竹契遐年

御製

唐土の島も住むへし呉竹（師^カ）のすくなる世こそ限知られぬ

左大臣源秀忠

呉竹のよろす世までと契る哉あふくにあかぬ君か行幸を

右大臣源家光

行幸する我大君は千世ふへき（25ウ）

千尋の竹をためしとそおもふ

八條宮智仁

幾千とせ契おくらし呉竹のよゝにこえたる行幸待ゑて

権中納言頼房

幾千世をかさねても猶呉竹のかわらぬ影を誰か頼まん

中山王の使者を見てよめる

河口静斎（*東大・都 三三八）

年を経て旅路おもへは故郷に春とともにや待わひぬへき

大内政弘

便りなき外山にすみ（二字欠）て下枝の（26才）

おる事かたき峰のしいしは

右將軍家に達して四品に叙しける子息忠興家督の時よめる

細川幽斎

庭に生るちり／＼草の末葉まで（＊右傍に東大「ひかりをこめてカ、都「ひかりをとめてカ」と注記「影をとゝめてやとる月かけ沢野辺に青める草の茂るにそつなかぬ駒もはなれさりけり

近衛殿桜を見に参りて

吉田 幸右衛門

あおき見るみたちの花の千代かけて猶さかゆかん事そたのもし

内より御返し（26ウ）

あおき見る心ことはのことならは（す）花のさかゆく千世もきて見よ

家光公

手に分て見れはこそあれ武蔵のゝ芝生かくれ＊（都）右傍に「本ノマゝ」と注記）花のいろ／＼

琉球の使者にともなひ東都に上りける九月十三日筑前国藍の島

にてよみ侍る

種子島 権助

けふいくか心つくしの浦つたひいつか難波の御津にいたらん
梶まぐらいふせきのみか泊船とまもるあられ雨よあらしに
夜をこめていそく旅ねの衣手に（27オ）

つもるもうすき雪のあけほの

旅人のかよひ路計ふみ分て皆白妙の雪の山こえ

関ヶ原にてよめる

くちもせぬ名をはとゝめて関ヶ原乱にし世のいにしへの人

吉野橋の芦

木村静隠

植置し君は難波の夢なれや芦間に風の音はかりして

穎娃川尻に＊（県図「尻に」重複）住める甚三（五）郎といへる農民身まかりて後其子に逢てよめるといふ

逢見てし人はなき世のかたみとて（27ウ）

此子を見るそいとゝかなしき

大隅国廻にてよめる

細川幽細

はる／＼と国をめくりの里にきて西に入江の月を見るかな

慶長十六年惺窩先生に奉る

林道春

いく千世といわふ心をするかなるふしのくすりをもとめまくほし

尾畔紅葉

花ならば雲のよそめもあるものをまかふいろなき峰の紅葉は

関ヶ原退去の時よめる

前田利清 五左衛門（28オ）

誰となくかりにあふみのかたみ山まちかくなりて忍ふ気色を

中馬諸香久して会に出さりければよみて遣しける

美代清相

いかなれは鳴音をおしむほとゝきすかたらひなれしむかしわすれて

寺山用央

おのれまつ声ふり立に雨もよに雲おほふそら（ふ）の山ほとゝきす

かへし

中馬諸香

おちかへり血になくものをほとゝきす声おしむとはなと恨むらん

八木元の三年回到其娘によみて（28ウ）

遣しける

郡山公弼三右衛門*（東大「妹をさつ」カ、都「郡山公胤妹

金右衛門」カ）

余所にしも同じ袂をしほるそよ見ぬおもかけをしのふなみたに

中秋大口にてよめる

用央

あわれしる人しなれば山里に今宵の月も名のみなりけり

あつまをたとるとて新古二道あるに古道を通してよめる

諏訪兼利

くたる世の人の心に遠くとも猶いにしへの道やたとらん

雪のあした人の問ひ来しによみ侍る

兼利

ふめはおし踏すはいかてむくはまし（29才）

踏分けてこし人のなさけを

八十八御賀 御製

八そ（十）し八ツ下よりよめは八十八中よりよみし事も有しか

浄光明寺にて

近衛前久公

島か富士こゝか清見か寺ならは見ゆる須崎は三保の松はら

林氏小野別業にて杜若の咲ける*（を」欠カマ）よめる

移し置し人は夢路の旅なれは誰見んとての花のひとつさ

風早宰相実積卿点宝曆三年よめる六首

二（三）階堂省行

立春風（29ウ）

天の戸の時明れは春と吹かへ*（東大・都「え」ミセケチ「へ」て

長閑になりぬ今朝の初風

河夕立

貴舟川水上はやくきほひ来て（ル）玉ちる波もにこるゆふ（う）立

初秋霧

すゑ*（東大・都「之」にミセケチして「ゑ」終に袖にもかけん

露をまつ草葉にみせて秋は来にけり

海辺雪

かきくらしふるは跡なき波の上に雪をのせく（へ）*（東大・都「た

ゆとふ雪や」ミセケチ「雪をのせえくる」る海士の釣舟

寄松恋

しらせはやあはすはいかにやま松の（30才）

根さしもふかき下のおもひを

夕旅

旅衣すそ野はくれて夕月夜*（東大・都「の」ミセケチ「夜」）おほ
つかなくも道たとるなり

中院通村

程々にうきはならひの（欠）世をしらて我身ひとつとなけくおろか
さ

長崎に住める買人の娘よめる二首

あら磯の岩にくたけてちる月をまとかになして帰る波かな

飛ふほたるひるはしのふのすり衣夜はおもひのいろにみたるゝ

或曰、禁中に聞へて名を摺衣の内侍と賜ふ（30ウ）

薩摩へ行くとて鳴海潟にてよめる

鉄舟

行すゑはいかになるみの塩干潟跡にこゝろを沖つ白波

朝聞道夕死可也の意をよめる

中院通村

白露のおきてあしたに道を聞かは消ゆともよしや秋の夕くれ

病中或人桜の枝を贈りければ（也）

日野資慶

霜に咲此一枝の梅の香に頼なき身の春にあひぬる

龍伯君新納忠元を召し廊下にて（31才）

手を取らせ給ひ此時如何にと有しによめる

及ひなき深谷かくれの夏草は高根の松になにか及はむ

夕立

後水尾院

時の間に池をひたせし庭の面かわくもやすき夕立のあめ

禁庭月

実隆

曇りなほ世の恨そと雲の上に君をいさめて月やすむらん

辞世

文禄四年二月七日卒於京

蒲生氏郷

かきりあればふかねと花はちる物を心みしかき春の山かせ（31ウ）

*（東大・都「堀田加賀守」）

行末はくらくもあらし時を（欠）得て浮世の夢をあげほのゝそら

さり（る）ともと思ひし事も夢なれや同（都*右傍に「本ノマゝ」

と注）言葉も形見ならまし

三好長治

みよしのゝ極の花とちるものを長き春とや人のいふらん

弟子丸定之 越中守

七十を送（道）るは宵のいなつまか消れはのこるひかりもそなき

柏原幽静

浮舟の世渡る船に真帆かけてもとのみなとに帰るうれしさ（32才）

諏訪兼利

みなもとを問ふ人もなし我むねのたきりておつる瀧のくれない

自血を吐てよめるといふ

森迫三十郎年十七、三本菖蒲の立物に短冊をつけて打死しける

いのちより名こ（欠）おしけれ武士の道をは（欠）誰かくやおもわん

三好長慶に弑せられ給ふ時よめる 將軍義昭

よしや今頼はとても言の葉をかゆるかすゑにおもひ（へ）あわせよ

鎌田加賀守政真政興常に權を愛す（32ウ）

あるあしたよめる

姿を余所にはつとも植置し我には見せよ花のあさかほ

いつくとしらす姫出て

色替て咲まされともはかなさは只秋ことのつゆのあさかほ

其後行方をしらすといふ

桜島

近衛前久公

秋ことのひかりを花と月やすむ島はさくらの名に立れとも

七夕高麗麟蹄縣にてよめる

枯佐六七公道

一年のはしめ終りや七夕の（33オ）

かたらひあかす今宵なるらん

稻留新助の御使者として帰朝しけるによみて遣しける

ふる里に錦の袖は萩かはな（れ）おりゆく人のあとやしたわん

抽物カとして今立帰るふる（目）さとに唐にしきには何をきるらん

八月十五日夜高麗の都にて

あたらしく見るは都や秋の月

九月十三日抱川にて（ニテ）

おなしくは千夜をひとよに重つゝ名残の月をなかめてしかな
九月廿三夜（33ウ）

待とりてまゆをひらへや夜半の月

文祿二年正月元日金化にて

門松にそのまゝみるや去年の雪

鹿児島鹿兒島の東よし野山近きわたりにに夏箕の瀧といふ所見（欠）に

まいりて

細川幽斎

こゝも又よしのに近きなつみ川流て瀧の名にやおつ（く）らん

辞世

風早宰相実積

たらちねの心に叶ふつかへをもならてそ過る暁そうし

辞世

伊達正宗（34オ）

照一眼向珪王曰我是奥州守

曇なき心の月をさきたてゝ浮世の闇をてらしてそゆく

木村探元まことに木の葉のちるを画しに賛して

日野廣資

聞添し時雨は過ぬ木の葉のみ月すむまてに音を残して

玉龍山潭州

月日見ぬ闇の夜にゆく心こそ南無阿弥陀仏のほとけ也けり

夜擣衣

二階堂省行

打しきる衣夜寒の月ふけて空にみたるゝ遠近の声（34ウ）

和

山田君豹

萬井霜飛砧杵唱、天高穗有滿江城、辺庭愁傷金荊州、腸断如何此夜
声

秋ふかみ夜寒むの月の影高くうつや砧の音（音声）聞ゆなり

弥寝大和守尊重禁裏勤番の時、歌鞠の芸に精しき叡聞に達し、

羈旅花といふ題を賜ふ

旅なから旅にもあらぬ心かな花になくさむ志賀の山越

叡感の（欠）余り御諱の字を賜て尊重と号し大和守に任す

太閤秀吉緋縮緬の衣裳を着て（35才）

如何にと問ひ給ふ時よめる

細川幽斎

ほの／＼とあかひ小袖を召す（欠）君のしわかくれゆく老のわかさ
よ

即小袖を給ひければ

下さるゝ小袖のゆきの長くしてかたしけなさは身にあまりけり

左大臣家熙卿

草のはのそのほと／＼におけ露のおもきはおつる人の世の中

樺山君に召されて紅葉見けるに歌よめと仰ありければ

田中盛庸（35ウ）

染はてぬ色にましりてこき（さ）は猶こさまさりける庭のもみちは

庭の気色をよめる

千代ふへき宿とはしるし花紅葉春秋しめてかこふまかきに（36才）

通昭録卷之（36ウ）

通昭録卷之三十

石馬集卷之二

重野井左中将公院三位宰相昇進のときよめる

かゝる日(月)も有ける物をくらいやまのほり(る)かねしと何おもひけむ

慶賀してよめる

中院通茂

峰高く猶わけのほるくらいやまふりにし世々のあとをたつねて

堀田加賀守 二十二歳にして男成(儀カ)をゆるされ初て御目

見の時

家光公

あれくしと(く)其名は残るいにしへの(37才)

しかの都の花のおもかけ

菊如雪

中院通村

長月の空にふるてふ雪の色に籬の菊のさき(ま)て匂へる

国分の本城を落るとて柱に書付ける 本田次郎左衛門尉

契り置くまきのはしらもわするなよ又かえりこん水くきのあと

討手の将となりて此歌を見^カ矢に付けて射かけゝる

樺山玄佐

なかれ出てかへる瀬もなき水くきを跡はかなくもたのみおくかな

宝永四年の夏、藤島公敬さま(37ウ)

かへけ(欠)るときゝて

樺山忠陽

おしやなと世にもかしこふつかふへき身を黒染の袖となしけむ

宝永十五年閏正月八日浄光明寺にて公敬(都、右傍に「本ノママ」と注記)高雄の紅葉と高砂の松の葉を見せ侍りければ

樺山忠陽

染めそめすことなる色もともに名は高雄の紅葉高砂のまつ

浄光明寺にて

樺山忠陽

夏山のみとりの木の間海見え(県図・東大「へ」)て与所め涼しく
うかふ浦船

宝暦九年正月廿四日御会始

萬物感陽和(38才)

新題冷泉家出題

人やしる生としいけるものはみな春に和らく道のことわり

御製

近衛関白内前公

海山の翅鱗(*都「にをしなへて」をしなへてなをものときき君

か代の春

有栖川宮職仁親王

天地の何へたてめや霞たちこのめも春の及ふめくみは

柳原正三位光綱卿

春をしる野山の草木鳥のねにことは花ももよふされつゝ(38ウ)

下冷泉正二位宗家卿

梅かほる野沢のまこも草々ももゆる春とや駒あさるらん

上冷泉民部卿為村卿

はるは来ぬ馴れてみる（もノミ）もの聞ものとともにやわらくこゝろことの葉

大佛 妙法院宮堯恭

日影まつやはらく雲（雪）をはるの色ものにあまねき初とそみる

聖護院宮増賞

世（*都「を」ミセケチ「は」）はなへて春にやすらく時つかせいたりいたらん物としもなき（六字欠）

同月廿九日御当座（39才）

霞

打かすむ日影のとかにくるはるをそらにまつ（欠）しる朝霞かな

春草短

内前公

春さむき野辺の千種もやゝもえ（欠）てひとつみとりに青む長閑さ

待郭公

宗家卿

初声もおしまてもらせ時鳥いそく心のまつを問ひ来て

尋虫声

光綱卿

とひよれは人まつ虫の名にも似す遠さかりゆく声そつれなき

名所月

為村卿（39ウ）

位山たとらてこしも幾塩（垣）坂のつきをしるへに（き）そふひかりかな

増恋

有栖川一品宮

さこそとしられん中に月日（か）へてうきおもひのみいやまさりつゝ

寄国祝

同

君と臣の道もたかわて神代より世々に栄ふる国は此国

以上（*都「已上」）

月前擣衣

小森一山

照月のさむきひかりを霜とみて打や礎の音も身にしむ誰かまつ月に起る（る）て浅茅生の（40才）

露のやとりに衣うつ音（*東大・都「らし」にミセケチして「音」かゝる夜の月には誰もねぬ（*東大・都「し」ミセケチ「ぬ」物を夢さそふとや衣打らん

羈中山

明ぬれと雲分のほる箱根山道たとくしすゑやいかなる

都出ていく重の山の雲にかしほれきぬらん旅の衣手

岩ねふみ（欠）かさなる（欠）山のいつこにか暮なは柴のかりねをもせん

玄仙老へ返し

一山

わか為に手折る心のふかさ（き）をもいま咲菊の色香にそ*と（東大・都「と」なし）しる（40ウ）

（*以下の半丁分「さきの世の…むまれけん」まで都になし）いとけなき子の死しけるによめる

小森

【重出】かく計あたに消えなんものそとおもひも（欠）かけすな
てし子の露

親をおきて誰をたよりにおきな子の帰らぬ旅にまよひいてけん
ひとりこそ死出の山路をこゆらめとおもひやりてはうちなかれつゝ
我こそはかくへき花も焼香をもけふ子の為と手向けかなしむ
さきの世の何のむくいにかく計なけきおほかる身とむまれけん

久倫君の（＊東大「席上席上」都「席上席上」^{ホフマ}）席上月下舟中
を題（41才）

して人々歌よみけるによめる

小倉知雄（＊東大・都「孫九郎と付記」）

とまり船旅ねのうさやはらすらん此月しろく風清き夜は

志賀の浦や棚無船に棹さして鳩の海てる月のさやけさ（き）

鳩の海ややせを渡る船人も今宵の月に家路わ（に）すれて

僧出て帰るさわする海士小船こよひ陰なき月の光（東大・都「ひか
り」）に

老後時鳥

澤庵和尚

老らくの耳にはうとき（す）ほとゝきすおもひ出るや初音なるらん
（41ウ）

小森一山

花にさへうとまれぬるか老はうし遠山さくら見る（目み）かすみて

堀田通郎

誰もきけるゝ日ことに玉の緒のあわれみしかくなる鐘の声

岡元宗阿

立よれば花の木陰もかりのやと心とむなとふくあらしかな

雪中鶯

中院通茂

梅はまたつもるまゝなる雪の枝を春に色とるうくひすの（欠）こゑ

鷹狩日暮

中院通躬（42才）

狩くらし一夜は爰にとまり山さゆるあらしも袖にいとわて

禅門川へ塩のさし入たるに月のうつれるを見てよめる

牧胤昌（＊東大・都「伊和田源左衛門」と注記）

やとりては月も心や澄すらん清瀧川の水の流れに

大口にて新納忠元の墓（暮）へ詣てゝ

美代清相

埋もれぬ名を残しおく武士のあわれむかしを忍ふ跡かな

田舎にて深山桜をよめる

寺山用央

山桜おのか盛りを人とわてあはれいく世の春か経ぬらん（42才）

上野 <sup>一説谷山
別業と云</sup> の桜を一ふさ美代氏におくりて

寺山用央 ^{太次右衛門}

一ふさの色にてもしれ山はみ（高）な木ことに花はかくそ咲にし

初春鶯をよめる 寺山用央

明て今朝みやもきかせも世ははるにかすむとやさしの鶯のこゑ

光なき谷のうくひす春そとはなにをしるへに初音なくらん

初春霞

用央

朝日かけほのかにみねの薄霞はや立そめつ春や立らん

歳暮

用央（43才）

いたつらにことしも暮ぬ跡にしておもへはおしき月日なりけり

子息の鼻の子をかひ置しによな／＼親鳥の来りて鳴を聞て

諏訪兼利直右衛門

哀なりいけるはなへて子をおもふやみのうつゝのふくろうの声

雪ふりしあしたよめる

木村静隠

人をまち人を問ひしも無かるにて我身も雪もふりつもりけり

病中よめる

中馬諸香源兵衛

かゝけゑぬ我ともし火のかすかなる（43ウ）

影になきよるむしのあわれさ

小森一山

何をその身にしむ秋の色と見てまたたつ山に鹿の鳴らん

曉述懷

一山

世の中のうきも我身もうきゆへといまこそ老のね覺にぞしる

歳暮

用央

けふ暮ぬ哀ことしも一ことのおもひ出もなく身のみ残りて

唐渚新館十二景

城市人煙

兵庫久

市人も豊なる世そしられける（44才）

かまとにきわひ立る煙*（都「烟」）に

野月牧笛

小森一山

笛の音もすめる野月の夜よしとてその里の子やふきなら（か）すらん

一宮孤松

日高

この宮の軒端に高き松ひとり古き神代の事をしるらん

霧島晴煙（*都「烟」）

中馬諸香

久かたの天の八重雲はるゝ日にけふりたなひく高千穂の峰

武（民）江板橋

打渡す遠方人に事とわんかけて幾世の松のいたはし（44ウ）

高隈晴雪

高隈や峰の浮雲はるゝ日のひかりにみかく雪のさやけさ

桜島朝日

朝日影うすくれないにほふなりたかねの花や桜島やま

南泉神宮

（*都より）行末もなをや守らんこの国に仰き初める神の玉垣

築地神明

（*都より）うこきなき万代守れ宮柱ふとしきたてゝて祝ふ神垣

（45才）

荒田水村

(＊都より) 浦ちかみ塩みち登る程なれや川浪浅く里の川つら

(＊都より)

福山行船

追て吹山の嵐にまかせてははこふみ^カつきの舟や行かふ

吉野返照

(都にも無し)

楠正成の墓に詣て

したひ来て跡問ふ世々の武士の涙や塚の手向なるらん

軍ヶ浦にて

音に聞軍ヶ浦に来て見れはうつ浪もあり引波もあり

軍ヶ浦にて

寺山用央(45ウ)

朝嵐むかふ北には吹きまけてかへるいくさかからのともふね

寺山用央

故郷にけふ九日の菊のさけくみはやすにも我や待らん

軍か浦にて

用央

四の海おさまれる世ニテや名に高きいくさか浦も風浪はなし

九月十五日関ヶ原

二之宮政勝

(＊東大・都「四郎衛門
後藤太左衛門」)

けふといへば雲のはたてにおもひけ(＊都「出」)る血に流れたる

関の藤川

仲秋 喜界(久)島にてよめる

用央

見れは見し俳なれや今宵月(46才)

千里の外もひかりかわらて

歳旦 右同

用央

四ツの海八島の外の波風もしつかなる世のはるは来にけり

歳暮 同右

用央

猶^ナそうきとふつ島ねの磯の波かゝるところに年をく(欠)らして

後(御) 水尾院

芦原よしけらはしけれそのまゝにとても道ある国ならばこそ

石川(井)

立寄て影^モもうつさし流れてはみやこ(＊東大「ウキヨ」と傍書)に

出る加茂川の水(46ウ)

*1 東大「或曰寺山氏は名中之□□」、都「寺山氏詠□□之秀免」と頭書

*2 東大「イカケヲタニミ」、都「イかけをたにみ」と傍書

八十余歳にてよめる

新納拙斎

いかに春つれなき老とおもふらんことしも花の跡に残りて

飛鳥井雅章

よせかへる波もこゝろの友千鳥つはさやすめす浦つとふらん

喜界島より帰るにつかひ置し女によりて残しける

美代清相

馴々てみしや三とせの夢はとにあかぬ別れのうつゝなからに(た)

越前国朝倉義景切腹の時、家臣鳥居兵庫頭介借して己も殉死す

るとて、我子与七郎か刀根山の峠（峰）にて（47才）

うたれしを聞てよめる

さき立し小萩かもとの秋風や残る小枝の露さそふらん

朝倉滅亡の時十七八ノ女を捕へけるに、井の中に身をなけてう

せけるか、一首を残しける

世にへなはよしなき雲もおほひなんいさ入てまし山の端の月

日高為春、中院通躬卿門人となり帰国時

旅衣日も夕くれになりぬれは雲井はるかに雁もゆくなり

小森一山（47ウ）

時鳥汝がなく（し）声を花にせは五月の空や盛りなる（り）らん

母の病中人参を拝領有けるによめる

日高為一

かしこしといふもさらなりたらちねの魂きはる身にめくみある世は

清水宗川

摺る墨におつるなみだをおもひしれ（*県「しられ」）うすくかき

やる今朝の玉章

一山

何をその秋の（*県図「秋のの」）衣の身に染てまきたつ山に鹿の
鳴くらん

中院通村勅使として関東へ下り（48才）

し時、時世のかわりしことを感慨に堪えず、清見か関にてよめ
る

清見潟関もる波に道たえてあらんかたよりかよふ旅人

此歌將軍家に聞へ東へ籠居仰付けられしとき

入かたに身をはさそわてよな／＼の袖の露とふむさしのゝ月

又將軍家に聞へ御勘気ゆるされしと也

日高為春

しはしとて晴るる待まの雨やとり妹かかとして人やあやめん

催月懷曆

小森一山（48ウ）

久保一夢のとむらいにまいりてよめる

もろともに仕へて月もみし人のかけはいつくの空にすむらん

榎本某の失火に類火にあへる我家の焼け絶（*都「終」）らさ

るにたわむれによめる

小森一山

となりなる多の木のもとに火の出て小森一山もみちしにけり

勅使として東に下るとて小夜中山にて 冷泉為久

都出て遠く思ひし東路をなかは過ぬる小夜の中山（49才）

（余白49ウ）

樺山久初道記

享保七の年武蔵国へおも（欠）むくとして霜月中の三日（か）、

加治木迄ゆく船の中にて

なみ風も心のまゝにしかなる旅のかと出の船路うれしき(さ)

暮かゝるほといとゝ海の面長閑なりければ

島の名もさくらも峰に匂ふかと春のけしきに月もかすみて

は 次の日加治木を立て大口まで行に此道はは(け)しめて通けれ

住なれし浦半は雲のよそにして(50才)

しらぬ野山をけふはわけゆく

肥後国より霧島嶽を拝して

はる／＼とさかひへたてゝこゝまでもあふくに高し高知穂の山

道すからの山々紅葉のまれなりければ

此ころのあらしやいたくさそふらん山のもみちの枝にすくなき

夜をこめやとりを出し明ほのに供しける人々を見て

吹風もさそさむからしか(あ)ち人のすけの小笠に霜しろく見ゆ

筑前国大宰府の天神に参て(50ウ)

爰に来てあふく心も猶澄ぬ木たちふりたる神のみやしる

飛梅を見て

神もさそわきて愛らし爰までもしたひきにけんむめのひと木は

豊前の小倉より舟に乗りて

草枕むすひかへつゝこよひよりなみのうきねに袖しほらまし

赤間関を舟出せしに追風なりければ

此まゝになみの千里もふきおくれけふの船路にきほおひかせ

室の湊(港)に舟をとめしに浄雲寺といへるに江口の君しるし

(欠)あるを(51才)

見にまかりて

播磨かた室のみなとに船(*都「舟」)留てむかしのあ(お)とを
けふはとふかな

難波の浦につきてこしかた行すゑ思ひつゝかくな

野山こえ波のうきねに日をへてもまたすゑ遠きあつま路のたひ

住吉に詣てゝ

甲斐にあひて幾世経ぬらん神の宮居もすみよしの松のまきはも

奈良の春日にまいりて

春日山なへて草木のすゑ葉(は)までもらさぬ神のめくみあまねし

(51ウ)

八重桜、猿沢の池、飛火の其外、名ある所々ともこゝろを留て

見ま(欠)ほしけれといそく道なれば、こゝろにまかせず、歌

もよまざりき

おなし国いそ(葉)のかみといへるさとの在原寺にまふてゝ、

業平の御影を拝して

世々の人したひ見よとやいそのかみふるきむかしのあとのこしけむ

(る)

三輪に詣てゝ

ゑにしありて尋きにけり年へつゝおもふしるしを三輪の神すき

初瀬寺にて（52才）

迷ひある心も爰にすみぬへしさらに世にに（三字欠）ぬ小初瀬のて
ら

暮かゝるほ（欠）と時雨して入相の聞へ（*都「え」）ければ
初瀬山しくれ過行折しもあれ暮ぬとひゝく鐘のさひしき

霜降し朝やとりを出るとて

しもしろきあさこと我も起出ていく日きぬらん旅のころも手

伊勢に社参してぬさ奉りけるに

なへ（く）てよを守る内外の神かきはこふあゆみの袖そたゝせぬ

五十川の水をむすひて（52ウ）

いすゝ川清きなかれをむすひてはたれもこゝろのにこりやはあか
（*東大・都「か」なし）る

小夜の中山を通るに

いのちあれば八年余りの月日へてまた越けりなさよの中山

宇津の山をこへけるに梅を見て

梅ぞ今盛に匂ふうつのやまなたゝる（欠）つたの紅葉散ても

するかの国吉原を通ける日雨降て富士の見へ（*都「え」）さ

りければ

雨雲はよしへたつとも心あてに見つゝも行ぬ雪のふしのね

箱根山を夜深くこへ（*東大・都「え」）けるに雪降（53才）

出て明方のけしきを

ふる雪の光にあくるはこね山花にもかへぬ木々のしろたへ

霜月十七日、江府に着にけるに、品川よりはるかに見やりて

武蔵野や所せくまで家居してひろきめくみになひく民草

享保九年卯月廿三日、江府を立けるに、此日こ（欠）ろ故郷に

おもむかん事を待侘しに今日といへは、何心のとまるとはなけ
れと、かへりみのみせられて

いつしかとかへさ待しか武蔵あふみ（53ウ）

さすかにけふはなこりこそあれ

政徳院の墓所に参りて

立帰る今日はことさらわかれにしむかしの秋の哀をそおもふ

品川の駅を朝とく通るに、ひとのいとなみさまゝ成るを見侍

りて所の名をかくして（欠）

あわれなり同し身をもて同し世にしなゝゝかわる人のいとなみ

鎌倉鶴か岡八幡宮へ参りて

鶴ヶ岡木高き松にふく風をおさまれる世にあひおいの声

富士川より不二を見て（54才）

夏木たちすそ野はしける此日（欠）頃けに時しらぬふしのしらゆき
清見寺（*都「てら」）日も暮かゝるかねの音にいとゝ木深く三穂（*

都「保」のまつはら

三河の八橋のあた（く）り見に参りて、寺へも行しに杜若の盛なるを、是（＊県図・東大）を（こ）もむかしより植つたへなめりと、主の僧の語られしを聞て

杜若華のさかりにたひころもきて見ることはえにしなりけり

ふるき跡名にある所々迄もとひ／＼行くに興多くて旅の物もうきもなし（54ウ）

なかし日は爰やかしこにとひよりて行へき道のすゑもいそかす

道すから伊勢へ詣る人の多きを

神のますひろまへさそなこの道の一すちにさへ袖そつらなる

大津より比叡山のかたを見侍りて

うつすとも筆にはいかて及ふしみやこのふしにつ／＼山々

後の卯月四日都（朝）に着て爰かしこ見めぐりて

おもはず見聞きものことみやことてかくまでよそにかわるへしとは

小倉山を見にまかりて（55オ）

山はみなみとりにしける夏木たち今はをくらの名にしあふころ

名所の山々を見めぐりて

花紅葉そのおり／＼のいかならんみとりに見ゆ（欠）るもあかぬやま／＼

同中の九日難波の浦を船出せし夜

時鳥なく一声にあく（＊東大「へ」^カ）る夜もあしかたなやなみのうきねは

うしまとの湊に舟をとめる夜、雨降出て風もはけしかりければ雨風の音きへそひてねられすよ名もうしまとの浪のまくらに（55ウ）

かは島といへる（いふ）所へ日数を（欠）経て風を待ちしに
来しかたも又行すゑもうきねして旅のつらさをおもひつ／＼む

船出せしに

またれつる追ての風もふきいて、真帆引こゑもきほふ船人

江府を立出しより日毎に故郷のちかつくに付て、供しける人々
うれしき事にいひのゝしる、けふは宿へかへりいるといへる
（か）によるこひの色おもてに見へければ

袖にまつつ／＼みしやいつうれしさの（56オ）

身にあまるとは今日をいふらん

花契万春

清水宗川

よろつ世をのとかに匂ふ春の色や軒端の花にまつちきるらん
春ことの花に契のいろ見えて万世よはふやまとことのほ

右二首、飛鳥井雅章卿、相應首尾の由仰らる

同題

飛鳥井雅章

よろつ世も（の）種は尽せしこのやとの花はことはのはなにちかひて

新緑勝花

清水宗川

行春の花にいみし夏山の（56ウ）

青葉にふるゝ風のひかりを

はなに見ぬひかりこそおへ白露のおくとはなしにぬるゝ青ば（*都
「葉」）は

飛鳥井雅章

若緑うす紅に匂はせて花もおよはぬ風の色かな

和歌につゝ留りの事口伝あり、古今（欠）伝授の外につゝ伝授
とてあり、烏丸光廣卿つゝ留りの歌よみ給ひしを、近衛桜山公
の題して、此のつゝは（欠）竹のつゝかとの給ひたり、嘗て読
へからさる也と、飛鳥井雅章卿の宣ひしを承て

きゝ侘ぬ夕暮ことの鐘の声に（57才）

たのみなき身もおとろ（欠）かれつゝ

御堂上（欠）方にて各したり顔によむは皆過なり、本式なき事
也、つゝとまりにもなくむつかしきてには必よむへからず、事
のかけぬ事也と宣ひしとそ

水鶏

雅章

ちきらねは誰まつとしもなき宿を何と水鶏のおとろかすらむ

梅花久薫

宗川

玉簾万代かけて匂ふら（へ）しおましにちかく咲やこの（れ）はな
にほへなを千歳の春にまかせてはあかぬ心の宿のむめか香（57ウ）

幾千年よに匂ふらんむかしよりかけもよしてふやとの梅かゝ

延寶七年十月十二日飛鳥井雅章薨六十九歳究竟院殿一位前垂
相原道文雅尊儀と号す長く病ふの苦を受、歌もよみ給わさりし
九月十五日明方、夜明たるかとおもわれ枕もと有し（*都「枕
もとにて」）本田左京亮へ戸明けよと有しに、戸障子あけたる
に鷹の鳴行く空を見給ひ

さたかには鷹の翅見えわかつて声しらみゆく（*都「行」）月のあけ
かた

その後はうたよみ給ふ事もなく（58才）

むなしくなり給ひしとそ

紅葉

老はうし心をふかく霜の葉にそめんとすれ（る）はあ（お）とはか
もなし

逍遙院殿

釣の糸の名をかくはしみよる魚の心も人も同じ世の中

人の子の死しけるにおなしたくいとて二ツともなき袖の上のく
たけゝ（ら）ん心をそしる

歳暮

赤崎貞翰

黒かみの色かわるてふから人のよわひに近き身をそ（欠）おとろく
（58ウ）

（*東大・都より 修学院八景）

村路春嵐

翠嵐吹霽景清鮮、擔外酒帘茅店連
村叟醉帰帶残照、三叉草深雨余天
夕嵐吹のこしてや山もとのくもよりさきに帰るさと人

八條宮智仁親王

修学晩鐘

修学招提境転幽、暮鐘殷 □^{*1}万機休
宸遊誰識発清興、数杵声中月半鈞^{*2}

妙法院堯然法親王

此寺は瀧のなかれにひゝき添いりあひのこゑもよそにかはりて

遠岫帰樵（59才）

*1 田中明「詩歌によむ修学院離宮の構成と野山・修学院八景詩歌十境
詩の解説を通して」（日本建築学会計画系論文集73巻628号）

*2 *1は「鉤」とする。

遠岫雲興連翠微、看來樵者送斜暉
檐頭別是重多少、猶帶佳山風景帰

照高院道晃法親王（法）

なかむる（か）に暮るゝと（欠）も惜くはるゝと柴おひつれて帰
る山哉

松崎夕照

松崎勝地玉楼前、佳景看來日已遷
斯境欲知奇絶処、好風只在夕日邊

陰うすく残る夕日のまつか崎あさをおひたる風の色哉茅檐秋月（59
ウ）

飛鳥井雅章

月照茅檐興特悠、愛見涼色坐間浮

山堂不誦九天影、浪説調庭（*1「湖上秋」）

烏丸資慶

山水のよゝすみぬへき心をもかやか軒はの月はしるらん

平田落雁

洛邑長天秋水通、平田千頃一群鴻

有声詩景数行字、修得形歌曲学功

岩倉具起

山里は秋に身にしむはるゝといな葉色つきかり落る頃

隣雲夜雨

高閣依山景不同、卜隣暮雨白雲中（60才）

*1 59才*1に同じ

感時卻恨風流事、春夜打花秋夜風

中院通茂

こよひきく雲の隣の軒の雨に誰名にしおふえをも忍はん

叡峰暮雪

艮獄由来護九重、近濃遠淡為君客（*1「容」）

白川雅喬

晚風吹雪千層頂、始信詞人擬土峰

時雨つる雲（雪）は夕の峰こえて雪にさやけきひえの山風
新緑勝花^{*2} 主一堂宗川

行春の花にやはみし夏山の青葉に（＊3東大「ふりし」）はるゝ風
のひかりを（60ウ）

＊1 59才＊1に同じ

＊2 以下の二首、都になし。

花に見ぬひかりそよそへ白露のおくとはなしに（欠）ぬゝ（欠）るゝ

（欠）青葉は

山家霧

伊達大膳大夫政宗

山間の霧はさなから海に似て波かと聞けは松風の音

山家雪

中々に九折なる道たえ（ゝ）て雪にとりの近き山さと

右二首禁裏へ奉るとて又一首を添て＊（東大「添らる」・都「添ける」）

かき捨るもしほなりとも此度はかへさてとめよ和歌の浦人

頃日新古今勅撰あり集中に入ら（欠）る

追悼伊達政宗

足利義持（61才）

武士の跡にそあらめしき島の道さへくゑ＊（「たへ」の誤写か）ん
事ぞ悲しき

朽果ぬかさし（＊東大「と」）もなれ言のはの添てかきやる法のは
なぶさ（き）

濃州関ヶ原にて戦死の時よみて弟治武右衛門久通送る

川上久惟（＊東大・都「弥四郎ト称ス
筑前守忠興二男」

東路の草葉のうへにおく露の消て帰らん我身なりけり

天平十年愛宕（岩）山百韻

ときは今天か下しる五月哉

水上まさる庭のなつやま

花落ちる池の流を堰とめて

明智光秀

行祐

紹巴（61ウ）

風は霞のふきおくるくれ

春は猶かねの響や寒へぬらん

片しく袖は有明のしも

うら枯に成（盛）ぬる（か）草の枕して

聞馴にたる野辺の松むし

信長を弑する日坂本を立てて

心しらぬ人は何ともいはいへ身をおしまし名をも惜まし

慶安四年家光公薨御の時御追善の為とて領知参州苅屋域二万斛

さし上通（逝）世するとて

松平能登守定政

実より出たる知恵はよかるへし（62才）

知恵より出る実ほめつきやく

よきにのみ願ふこゝろのはかなさよかへすゝも身のほとをしれ
一天の四海浪まで理はつよく非礼には諸事たゝぬものなり

人はたゝ慈悲専におこなへばいやか上までたからこそそれ
世の中の人を鏡とおもひなば我身のこゝろなからんとおもふ

つら／＼と至極のほどをあんするに耳へも入らず目にもかゝらす
むつかしとおもふ心はむつかしやむつかしなから生れこそすれ（62
ウ）

金銀もあるにまかせてつかふへしつかわぬときはむほんほんきやく
定政二十歳の時夢想に思ふより、心からなる天か下に（＊東
大・都「に」なし）三十の時莫改人、可改我、四十の時有一
念、無二念三たひ夢想に句を得しといふ
寛文十二年伊豫国にて身まかりしとなり（＊都「也」）

武蔵野 家康公御頭間宮左衛門^{*1}

海原や山の端して出る日の入りかたもまたむさし野の原

烏丸光廣中院通村甚此歌を称す

ある人母の一年回到招きしによめる（63才）

*1 東大「御鳥預^カ」都「御鷹匠」

八木八郎兵衛卜称ス（七字欠）

一年のくるゝは夢の内なれや露の跡とひさそおもふらん
年ふれはわすれ草もやおよ（欠）くらん去年のいまほとおもわれも
せず

恨しき又なつかしき月日哉わかれし去年の今はとおもへば

武蔵野 太（大）田道灌

露置かぬかたも有けり夕立の空よりひろきむさしのゝ原

子息昌三吾妻に下るによめる 松永貞徳

陸あらは舟にな乗りそ都人（63ウ）

風吹く夜半はいこそねらね

武士（蔵）の矢はせの渡り近くともいそかばまわれ瀬多の長はし

家訓書の後に書す

おろかなる筆のすさみもなお（を）かれと子をおもふ親のかたみと
は（欠）見よ

うつし（ゝ）置く心の底は松のはのちりうせすしていくとせかへん

死に就んとてせし時故主の菩提寺瑞光院に送るける

大石内蔵介良雄（64才）

權華一朝雖開眉、思郷斷腸不待夕

おもひ入る身はむさしのゝ夕露の残る心はあさの下草

夫の墓に詣てゝよめる

間十次（欠）郎光延の妻

此よりは外へは行かしなき魂の露と消にし苔のしたかな

二月廿一日京を出て相坂の関を越るとよめる

吉田忠左衛門兼亮

九重の霞をわけて出る日もくもらぬ御代に相坂（関）の関

小夜の中山にて

夜をこめて越行く旅の空なれや（64ウ）

しのゝめの近し小夜の中山

薩埵山

我にたに三保の松原富士のゆき心やそらにかゝるしら雲

清見潟にて

天の原かすみもはれて清見潟月止めよ浪のせきもり（もの）

奉納和歌

小野寺十内秀和

千早振る神のめくみの雨露に人の代かけて出るくさひら

又

大高源五忠雄

神垣や福芝は人の蓋^{*2}

小野寺幸右衛門秀富（65才）

*1 東大・都ルビ「サイハイタケ」

*2 東大・都ルビ「カサ」

海山かけて秋の物なり

三村次郎右衛門包常

かわらぬや月の桂の男気に

松村喜兵^{*1}（欠）衛

命にもかへぬ一ツをう（か）しなわし（ら）にけかくれても爰をの
かれむ（ん）

郭公四首^{*2}

伊集院下野守久治入道包節

人つてに思ひやるとかほとゝきすねたしや我に声のつれなき

喜大炊久正^{*3}

心あらん人に初音を（お）ほとゝきす聞かせまほしとおもわましは
や

八木新右衛門豊信（65ウ）

*1 都「善（兵衛）」

*2 東大・都「龍伯公詠出于瑾瑜集」

*3 都「喜入大炊助久正」

植置きし砌のまつのほとゝきす千年をかけて初音すゝする^{*1}

樺山兵部太輔入道紹剣

かへりゆく山はあり（る）ともほとゝきすやとの木立に又やきかま
し

本田没落の時かれか籠ける曾於郡の城家の柱に書置して

立ちなれし槇のはしら（欠）もかわるなよめくりあふへき時しあり
やと

樺山安芸守善久の道玄佐是を見て箭につけて射ける

なかれ出てかへる瀬もなき水くきのあとはか（欠）なくもたのみお
くかな（66才）

1 都「本ノマ」^{}と注記。

新納忠元

時鳥のありあけの月のいろいろに面影きゆる花ももみちを

樺山玄佐

人つてのそなたにあるをほとゝきす雲井の月の夜半のひと声

惟新公の朝鮮入を送奉りて

新納忠元

あちきなやもろこしまてもおくれしと（え）おもひし事もむかしな

りけり

綱久公百首の御詠点削を命し給ひしに

諏訪兼利（66ウ）

なかれては民の草木もうるおわむ（ひ）めくむころのふかきことはに

懷旧乃連歌 慶長十二年六月十八日心岳寺

【以下、東大・都より】龍伯公 露はたゝさなから玉のはちすかな

島津又吉常久

池水きよきなつのゆう（欠）かけ

雪にほとりの羽風たゝし音つれて

*1

暮山鹿

二階堂直行^{*2}

かけくるゝ夕日のあとのさひしさをそへて山路に小鹿鳴くなり

行路

村田経

降る雪に袖うちらはらひ乗る駒のあしもやすめす行く旅路かな

海月

堀興貞^{*3}（67才）

*1 東大・都「平田久兵衛宗近」

*2 同前「彦太郎ト称ス宣行子」

*3 東大「甚左衛門後四郎兵衛」都「平太夫」

名をめつる月のひかりも清見かた海ふく風にちりも残らて

樺山久方君のめくみにあひて年頃願ひし事のかなひしに又帷衣を給ひければ

村田経（*東大「平四郎」）

うれしさの身にあまりぬるから衣かさね／＼（めし）のふかきめくみに

夏月 久峰奎（欠）

夏の夜のかけもすゝしくてる月をなかめつくさてあへるしのゝめ身まかりける年の八月十五日夜よめる

山田君豹（67ウ）

いたつきもしはしとゝまれ望月のまた来る秋に逢ふ身ならね（ぬ）は

卯花

逍遙院

咲にけりしつか外面のうつき垣花みんとてもうへはおかしを

竹裏鶯

赤崎貞翰

明やらぬ竹のは山に聞ゆなりねくらなからのうくひすの声

松上藤

同人

春風は吹（鳴）くとしもなき浦松（船）の下枝をこゆる花のふちな

み

折花

逍遙院

一枝もいかゝいひてや手折まし（68才）

後の春まつ花のあるしに

不破の関屋を見にまかて給ひ（欠）し、その不破所しり（る）ける人のあらかしめふきかへ、こゝかしことりつくる（ゝ）ひ

おきけ（な）れは、興さめてよみ給ひける

ふきかへて月こそもらねいたひさしとくすみあらせ不破のせきもり
都に在し時會席（庫）に出よと有りしを辞するとてよめる

諏訪兼利

雲の上にたつといふ名もおそろしや冬のおろちのあなこもる身は
或云、兼利国老たるの時、同僚喜入房州と快からず、国老を辞
す、再三に及んで詠（68ウ）

*1 東大・都「不破」の二字なし。

*2 都右傍に「本ノママ」と注記あり。

す、故に免して隠居せしむ通昭録（欠）

按（揔）に兼利の国老は、寛文七年より同十一年までなり、房
州は貞享三年より宝永三年にいたり其間（旨）十四年をへた
つ、其説の非なる知んぬへし、

肥後国花山城にて戦死辞世

木脇利部右衛門

うつ人もうたるゝ人もも（と）ろともにうき世の夢は今そさめける
赤崎貞幹肥後国に遊学して帰り（る）ける時、先生の娘十三歳
なるか（欠）よめる

別れては山路幾重としら雲のたつ日よりこそ袖はぬれけり（69オ）

通昭録卷之三十一

石馬集卷之三

五倫倭歌

君臣有義

天津空くもり（る）なきまでてる月のうつれる水の底も濁らし

父子有親

雲井より沢辺にかよふ声すなり子をおもふ靄おもわすもかな

夫婦有別

行別れ山田もる男そいとまなきしつはた帯のとけし夜の間（ま）も

長幼有序（1オ）

春ことに梅よりつきて咲くはなの木すゑにあまた折ふしそなき

朋友有信

芦まより友したふ声の哀なるおのれのみやは求食かりかね

法皇御製十一首

寄絵恋

かいもあらしかたちはさこそうつすとも月はひかりをえしもかゝね
は

尋恋

あらし吹く秋より後は床なつの露のよすかもたつねわひつゝ

時雨（1ウ）

さためなきこの身はいつの夕時雨いまふることも袖のほかゝは

見花思友

ともこそは色かの外の色かなれとえか（は^カ）しはなのさかりすく
さて

野月

むさし野や草の葉分にみえ初て露よりしたに出る月かけ

原虫

秋風にみたれてしけき虫の音はみやきはらの露にまされる

恨恋

おのつからみゆらんものを恨とも（2才）

*1 この歌 都になし。

しらすかほなるそれも一ふし

漁船連波

あま人のひとはにまかふ船よりもかるき身をく浪のうへかな

塩かまと云桜を

国の名に聞しは遠きみちのくや軒はの花に近きしほかま

聞持衣

よなくの礎の声よこのころのまかきの花のなにもねられぬ

寄月忍恋

うちとけてみえんはいかゝくまもなき月は心のおくもしるらむ（2
ウ）

陽和院殿御詠

島津の中将光久朝臣にむかへられて、東に下りこゝらの年を送る。あし（欠）たには富士の根の雪をおもひ、夕には武野の月をこひ、花時鳥につけても大和歌にかゝり、さふらふこたちな

とにも筋なきゑびす歌よませ、興を催し侍る事常のことくさとす父の卿はとくうせさせ給ひて、せうとの中納言の、諷諫にて和歌の浦に拾ふうつせ貝にもまされる玉もやあらんと、おさなくより此道に心を寄侍る、さるに時々よみおきぬる愚詠二十首書きあつめ、法皇の勸覧に備ん事を願ひて（3才）

此院にさふらふ妹の山井の局の本へつかわし侍りしに、かたしけなくも御覽まし／＼て、いちはやく御点をくわへられ、あまたの勸言を添させ給ひ、みつから書て奉りしは御所にとゝめさせ給ひて、梅小道の民部太輔に仰て彼朝臣の書て奉りしに、御点まし／＼て下さるよしを、山井の局より傳ふ、此道の冥加住吉玉津島の御守^ミり、氏の社の御恵みも浅からぬ事と、かしこまりよるこぶ、つたなき詞書なれとも、御点の一卷なれば、島津の家録として累代に傳へまほしくおもむきを書添て、箱底（3ウ）

*1 都「御守」

にひめ置侍りぬ

延宝七の年六月朔日

初春（東大・都より）

曇なき御代のすかたか出る日も光さやけき千世の初春

雨中花

春雨にぬるゝもあかす折そてにこほれて匂ふ花の下露

花為春友

友とのみ馴行く花のはる過てちりなん後は如何くらさむ

夜帰雁

こゑをのみ帰る露路に（へ）のこし置て行かたみせぬ夜半の雁かね

朝落花

昨日までかくやはありし今朝みれは梢の花の（欠）雪とのみふる（4才）

*1 東大・都「のふるもいとわす」

卯花連垣

おしなへて雪ふる里とみゆる哉卯の花咲る垣ねつゝきは

郭公早過

待ゑても恨そつきぬ時鳥たゝ一声をたに（二字欠）なきすてゝゆ

（い）く

夏草深

里の名も今あらわれて深草の夏のゝ道は跡たへにけり

七夕雲

まれにあふ今夜斗は七夕の雲の衣も立なへたてそ

草花露

野辺今千種の花のいろゝにむすひはへたる秋のしら露

海辺月

泊舟今宵は夢をなみま（欠）くらうきねともなふ月のさやけさ

月前思往事（4ウ）

*1 都「本ノマゝ」と傍書

*2 都「夕」

みし人のかきりを月におもい出て馴し雲井の秋そこひしき

菊霜

百種の花はうつらふませの内に霜をかさねて匂ふ白きく

庭落葉

風ならてとわれぬ宿の庭の面はふりしくまゝにつもる紅葉は

千鳥

浦かせに夕汐高くみちくれは浪よりさきにたつ千鳥哉

歳暮

おしめ共月日よどまぬ早瀬川なかれて暮る年なみはうし

依恋祈身

なからへてあればそつらきひたすらに恋しなはやと身を祈哉

寄浅茅恋（5才）

*1 東大・都「千鳥立なり」

いつの間に人の契りのあさちふに心の秋の色をみすらむ

山家夕風

世のうさに思ひくらへて夕暮の風も忍ふ松の下庵

寄竹祝

眞竹のいくよろつ世を契るらんひとふしにた千代のこもれは

墨点十二首内長二（5ウ）

*1 東大・都「あさち」はら

*2 東大・都「思ひかへては」とも傍書

中將殿、心ち例ならすなやみ給ふと聞えしあかつき、かたふく
月を見て

人しれず心つくしにおもひやる空なつかしく入方の月
身まかり給ふよし告来れは

かねてしる逢は別れのことわりもおもひあへぬそ涙なりける
程なくなゝ七日に成りて

なくくも馴て身にそふ藤衣ぬきかふるにも袖はぬれけり

世の中の移りかわるを見て

あわれわか心にこめし世のうさはなき人のみやしらはしるらん（6
オ）

おくるるとてもいくほともあらしとおもひなくさめて

なけきわひせめてなくさむ心哉おくるゝとてもなからしよに

つねに身をなくする事をしゆきやうせしをおもひ出て

なからへておりとや人の思ふらむなきかけよりも先たてしみを

来る春はかへりき給ひなんと年の暮を待たたりしにかいなき春^{*1}
をむかへ侍れは

かゝりける春とも知らて朝夕に暮行年をなとかまちけん（6ウ）

*1 都「か」ひ

夕ぐれに西の空を詠やりて

のほりにし煙の末と思ふにもいとそなたの空そ恋しき^{*1}

心とめ給ひし鶯の朝ことに来て啼もあわれに覚え侍る^{*2}

とまる身の哀をしるや朝なく来てはかたらふやとのうくひす^{*3}

卯月晦日おもてへ中移とてゆくあした、常よりも軒近く来りて^{*4}

鳴もこゝろありてや、と過にしかた何くれと心ひとつにおもひ
つゝけて

鶯も残る我さへすみかえてむかしかたらふ友やなからむ（7オ）

*1 都「烟」

*2 都「鳴」

*3 「あ」は

*4 都「こゝろ」

うつりゆくまゝに、こしかたの事も心にうかへと、若竹のさか

えゆかんよゝをおもへは、いみしくて何事もおもひあへす十日

あまり中移の住居して、世のさまくかわり行につけて、あら

ましかはとおもひいてられて

言に出ていはぬおもひのかなしさ（き）を同し心にとふ人もかな

家居も程なく移りかわりなとしてより、居給ひし榎柱のかたみ^{*1}

たになく、馴にしかたの名残とては、砌の松のこ（欠）すゑを

朝夕よそに詠みやるのみにて、あちきなくなしきこゝろ（7

ウ

*1 都「梢」

ひとつになけきわひて

なけても命はかきりあるものと今身の上におもひしらるゝ

ありし世には月に心をとめわきて入方の月をなかめしに、今は
くまなきそらもなみたにかきくれて、月見る夜半もなし

見れはまつおもかけさそふかなしさに月にも今はうとくなりぬる

八月十五夜月をも見しと、つれなしかほつくれと、月花の折過
さすもてあそひ給ひしものとおもひ出る事、むねにみちぬる
心ちするに、月も心（8才）

ありてや曇りぬ

心から今宵もめてぬ我か為の折しりかほに月そくれもる^{*1}

一回を問ふとて、我もつれてなくなりなは、立置ししるしの甲
妻なからましと、身のなからへをなくさめておもへと、はや一
年おくれぬる身の悲しさ、今さらなみたもせきあへす

おくれしといひしなからに一年のなき跡とふもあちきなの身や

如月に火出来て寺ともあまた焼ぬるに、菩提所の寺も類火せし
かとも、此度の法のわさとりおこなわんためとて（8ウ）

1 都「本ノマ」^{}と注記

やう／＼つくりはてぬ（ね）るよしを聞て、三年までの命もし

らねは末の九日にもうてゝ、回向申侍らんと、入相の頃おもひ
立行く道すから、雨と降る涙^{*1}はせんかたなし、もふてつきてな

き名をみるにいとゝかなしき人も心よわしとみるらん我もかく
あらん事かはと、涙をおさへ心をしつめて一すしに回向申、釈

迦佛を押し奉りて

頼めおく我もろともに九ツのしなのはちすのうへにむまれん

師走中の六日にかきくらし、雪ふりけるを見るに雪月花の時と
古人も（9才）

*1 都「泪」以下同様

いひし、わきて雪には心とめ給ふ、今はの時も末の六日よりお
なしく九日まで雪ふりけるよし人のかたれば

花にこひ月にはしのひしら雪のふりぬる人をいつかわすれん

是一巻の書は、前中将光久公の北の御方陽和院殿さらぬ別れの
御なけきのあまりに、折にふれ時に至りておほしめしつゝけさ
せ給ふ御歌を、東の都よりやつかれにくたし給ひぬ御心はへの
かしこさ、一かたなららす覚えて、朝な（9ウ）

夕なに拝吟し奉る、たひ／＼涙の外（なし）はしる人もなくふ
かくひめ置侍れと、つく／＼おもひ侍るに、ヶ様にあはれふか
くやんことなき言葉の露を、末の世までもらして、歌に心よせ

侍らんかた／＼のみちのたつきとならんかしなとおもふも、いとあたらしくてみつかからかふしなきもくつを、巻の奥にかひ添てゆつり聞え侍れは、目にみぬ鬼神をもあはれとおもわせ、男女の中をもやわらけ、たけきものゝふの心をもなくさむる(かは歌なりと、むかし(10才)

の人もいひ置侍れは、後の人の歌をおもふ中立とならん事をねかひて、はゝかりのせきのはゝかりをもわすれ侍る罪をもゆるさせ給へと、和歌の三神に祈り奉るとそ

元禄九丙子大寒日廣照院恵圓尼

慈徳廟大故詠

美代清相

公の例ならすおわしますとなん聞へけるに、いともかしこきは
おふけなく思ふものからよみ侍る(10ウ)

*1 都「を(もふ)」

*2 都「祈奉(る)」

*3 都「おも(ふ)」

いたつきの君やいかにとむさしあふみかけてそおもふこゝろつくしに

八百万神も平にまもらなんにくにの民のいのるまことは

今は世になき公とならせ給ふ事を聞たてまつりて

聞に今堪ぬうつゝのかなしさをやかてさめ行夢になしてよ

残る世はたゞくれまとふやみ路哉ひとり先立つ君におくれて
なそらへて見るも(れ)かなしき朝かほの花一時を君かよわひに
公か代のさきやいかなる契りにて(11才)

ひかりみしかき露の玉の緒

初ての御忌日雨の降り侍りければ

もろ人のなけく涙に空もけふ雨となりてやかきくもるらん

八月十五夜も雨日雲して愁かほなる空のけしきなりければよみ侍る

雨と成るなみたを空のかたみにてもなかの月も雲かくれゆく
なかむとて心のやみははれなくにくもるもよしや望月のそら
あかて見む人をおもへは今夜又雨にしほるゝ月のおもかけ

文月廿日あまりもなかの空までも(11ウ)

*1 都「こゝろ」

雨雲晴すのみかきくらし侍れは

なけくにもあかて目をふる雨雲のはるゝをいつの月になかめん
なけきつゝはれぬ心をこのころの空にことわる月のうきくも

御庭の池に月のやとるを見て

影やとす月やむかしのとはかりにおましの池はおもがわりして
君か見し池の鏡のむなしきに面かけはかりのこる月かな

ゐねかてに月をのみ打詠め空に雁の鳴を聞てよみ侍る

かならずと秋をたのむの雁はきぬ(11才)

またこぬ人をおもふ月夜に

鳴雁のなみたなそえそ月見つゝさらても今はしほる袂に

ものことに見せも聞かせもうき事のかきりを月につくす秋かな

長月十四日の夜御庭にまかりてよみ侍る

ませし世の秋はきのふのむ(欠) かしにて面かけさらぬ玉たれ(な)の月

夫^{*1}なからかわるおましの面かけに立て見居て見月そ悲しき

寛延四年日高氏の藤見に

源兵衛中馬諸香(12ウ)

*1「更カ」

咲藤の花にそうつる梅をめてさくらにそめし人の心も

喜右衛門 長崎通好

あかす見て千代経む宿の行すへもかわらすかゝれ松の藤なみ

次左衛門 日高為一

咲かゝる花のよわひも松かへの常盤にならへやとの藤なみ

別府新五右衛門

はへあれやひと木の松に咲そひていくはる匂ふやとの藤なみ

仙洞崩御の時れんといふ女のよめる

及ひなき雲の上なるなけきをも(13オ)

天の下までぬるゝ袖かな

七歳になれる女の歌よみしとて、内裏に召され扇を賜ひ歌よめとありしに

よもちらしゑにかく山のさくら花たとへ扇の風はふくとも

祖父の墓にまいりて

おやのおや今はなら(し) くをいて給へこのこのたゝくかねのひゝきに

詠月十五首

諏訪兼利 奎衛門

八月十五夜

空はれて名さへ曇らす世の人の心にかけてしもち月のかけ(13ウ)

月前風

天津風しはしはゆるせ浮雲のかくすは月をおしむなるにや

月前露

露むすぶ軒のしのふに風吹けはみたれてかゝるこすの月かけ

山月

とくおそく出入月に雲か空ならぬ山の端さへそねたまれにける^{*1}

野月

宮城野や萩のにしきと月しろき尾花の浪のよるにほのめく

浦月(14オ)

*東大「雲カ」と傍記

浦の名のにしきおほ(ら)て海はらに波のあやある月の影かな

花洛月

咲ませし柳さくらのそれよりもみやこは月の夜半そまされる

故郷月

むかしおもふ律のやとにそかあれにける月のひかりは今もかわらて

山家月

山風とあらしな果そのかれきて月すませんとおもふいほりを

月前虫

雲払ふ風も尾花にまねかれて（14ウ）

*1 東大・都「に」の右傍に「そ^カ」とある。つまり「やとそあれにける」とするかの意。

月まつむしの声きほふなり

月前鐘

高砂や暁かけて照る月の霜にそ鐘は寒へまさりける

寄月恋

雨雲のよその空にも忘るなよちきる今宵の月のおもかけ

月前述べ懐

月見ても月そいからき袖の上の露もむかしのひかりならねは

月前神祇

月そすむ河瀬の魚も飛鳥も生るをはなつ数見ゆるまで（15才）

*1 「さへ」と訓むか。

御詠草見まくほしさに、便りある人して音信待しに、いともか

しこく給^サ嬉しさいふもさらなり、かれをひらき見るに御言葉の

つゞきいふにやさしく、いと目出たし、まことにほひ来る大

空の桂の花も、心のたねよりひらけたるとおもほえて、まきか

へし詠吟するに、長途のいたつきをわすれ、老をやしなふ事の

有かた（「さ」欠^カ）よと思ふにつけて、愚詠一首をなし御志

にむくふ事と南

墨染の衣の袖も匂ふかな（15ウ）

*1 都「嬉」

君かことはの花にふるれは

諏訪左右衛門父^{*1}

遊行六七世他阿

薩摩かた人の心の深からはせきおく水の哀ともしれ

薩摩かた沖津浪間に船とめて見ぬ唐土を月に問わはや

名に愛る世は冬なから桜嶋花にそまかふ雪のあけほの

吉川左京丁場の百姓狼藉したる咎（各）によつて、名主（も）

織部といふもの、江戸におゐて入牢しけるに、その妻子江府に

いたり水野対州公へ願ひ、ゆるしを得て牢内にて対面し（16才）

*1 都「殿」、東大「父^カ」

*2 都「舟」以下同様

*3 都「しま」

帰るとて娘十三に成けるかよみ侍し

露の身をつなぎとめたきくつかつらうらみは去年の秋にこそあれ

ひとりねの袖をかたしく妻や子のおきかへるこそわかれなりけり

二首の詠歌（立り） 上聞に達し織部か罪をゆるされ、妻子とも
に帰国しけるとそ、寛保三年三月也けるとそ

新納忠元武蔵守

さく花はさもあらはあれ朝みとり柳か枝のはるのあけほの

牧胤昌梅月堂京の門人となり、初て歌の会席に出しに、鄙人なりと（16ウ）

皆人おもひ悔り、水鳥の題をよめと聞へ^{*1}ければ

打とけておのか心を川しまの清きなかれにうかふおしかも

座中驚嘆して席をゆつりしとそ、後に中院家の門に入此歌を見
せ奉りしに、甚称嘆有りしとそ

惜花

伊達光宗^{*2}

かきりありてちらはちらなんちらぬ間に花をは風のさそわぬもかな

牧野河内守

河ちとり立はうれしく思へともなとかりかねの帰らぬはうし（17才）

*1 都「え」

*2 都、右傍に「本ノマヽ」と注記

紋きゝやう又かるかやちやあるまいかまきのかしわの事（子）をお
もへは

土岐丹後守

近衛信基卿中頃行輔卿と申す、文禄三年四月十五日、関白秀次

公の朱印にて、薩州坊津へ左迂あり。岡左兵衛と改られ、又可
因と称す、帰洛の後信尹卿と改む、慶長元年七月六日坊津を出
給ふ時、一乗院快忠法印法印^代御暇乞に出てよみける
及ひなき雲の上までのほる月のかけおしまれてぬるゝ袖かな
かへし

行輔卿（17ウ）

人目のみしけき浦わに黒染の袖にはおしき名残なりける

惺窩先生將軍家に侍講たりしに、講書の日、將軍家御羽織袴に
て出御な^{*1}か（欠）りしかはよめる

渡らしなせみの小川の清ければ老のかけそふ波もはつかし

又講書に出御のおそかりしかは、一首を詠し扇に書し是を献し
て去り、二たひ出さりしとそ

いかにせん我日のもとにあつければあおきても見よもろこしの風

島津彈（源）正久慶正保四年詠歌数首（18才）

*1 都による

合點ありて一首を添へて

中院通村

おくからにあさくそ見えんさま／＼に花をわきけり露のこゝろは

慶安四年八月十八日四十三歳にて卒すと^{*1}（を）て辞世

島津久慶源正右衛門

このほとのみなとはなれて空船帰らぬ浪にまかせつるかな

老て目しひけるに長月九日人の菊を送りけるに 阿多長右衛門

心あてにそれかとそおもふ菊の花むかしの秋もかくそにほへる

萩と切て帰るとて 日高為春曾右衛門 (18ウ)

*1 都による

*2 都「舟」

今日もまたまはきを折てかへらめや同じ若枝をつかね緒にして

綱貴公の御女亀姫君、近衛大納言家久卿に婚姻をゆるされ、宝

永二年五月十日東都を出て京師に趣き給ふ、島津大蔵久明老国猿

渡喜右衛門信安御用、川上長左衛門久恭龜姫君御用是に従ふ、同じく

末の七日京着し給ふ、駿河国宇津山*1を過ぎ給ふ時、鳶を植て持

越し給 (にふ)、其志の優にやさしきを感じて

近衛家熙卿公

植て来し情ならすは宇都の山にかゝる鳶葉やは見ん (19才)

*1 都「都」

同じ年の秋の頃亀姫君むなしくならせ給ひしに 家久卿

*1 今日さらにおもふもはかなおそくとくつひに行へき道ならすやは

又愛し給ひし鳶の色つきしを見給ひて

色つきぬ涙のみさへこの秋はかゝるつたはもむかししのへと

仲秋大原貞以の家にて

月見んと問ひこし宿のそれのみか門田のいなは庭のはきわら

歳旦

室直清新助

おもひ出のなきとはいわし今年より (19ウ)

*1 都「今」

まれのよわひの数にいる身を

待時鳥

京極高門兵部

待とても花にねぬ夜はなきものをいかにつれなき山ほとゝきす

野々宮中将定基参議昇進の時よみて遣しける 京極高門

めくみしるやとの梅かへ今年はと待しことはの花も匂はむ

かへし

匂ひなき身をそおもへさく梅の花は待にし春にあへとも

高門

釣の糸の長き夜明す船さして (20才)

誰水の上の浦島の月

朝陽法師弥*1より花を折てこしけるかへりことに

高門

さかりをも問へとはいわて桜花おりけん人の心さへうし

薩摩へ下るとて鈴鹿山にてよみ侍る

京極高主兵部之孫高門

山さくら花は卯月の半ともしらてや春の色を見すらん

庭の草花を手折て京極高主 (欠) 君におくりしかへりこと有け

るを又よみておくり侍る 名越恒篤左源太

おくるてふ秋の千種のそれよりも (20ウ)

*1 「許」の誤字か。

かへすそ詞の華そいろこき

夕立

通好長崎喜右衛門

こゝにふりかしこに晴て夕立の雲定まらぬ遠近の山

実次

櫓の葉に露を残して夕立のよそにふりゆくおとのすゝしき

景俣

旅人のさそな袂をしほるらんすそのゝ草の夕立のくも

深夜螢

中島盛香長左衛門

学ひなき窓にはあ（お）やなふくるまでもへてほたるのいさめかほなる（21才）

*1 右傍に「イぬらす」と注記

*2 都「え」

夏草露

景俣

夕立の過し夏のゝ草の葉にすゝしくむすふ露のしら玉

夏山木

上村清胤次左衛門

それ／＼のけちめもわかぬ夏木立お（む）なしみとりにしけるこの元

夕立

盛昌

一しきり振りて過行夕立の名残の風に袖のすゝしき

夕立

清貞

時の間に空かきくもり風あれて降る夕立の雨のすゝしき

雨後蟬

清貞（21ウ）

*1 右傍に「イおける」と注記

なくせみの声こそきかへふる雨の晴にしあとの木々のこすへに

夕立雲

通好

かきくらしふる夕立の雲の波こすやいくたひ末のまつ山

船納涼

実次

いつくより秋をやさそふゆく船の帆かけすゝしき八重の塩風

水無月薩摩国へ旅宿滞留の折から、飛鳥山のさくらを押花にして、歌そへておくり侍りし人の方へ

京極高主

おくるとて東の花のひとふさに（22才）

*1 東大「き」ほ、都「き」お

*2 都「ゑ」

そへしことは（ん）のいろもゑならず

故郷の花なりければ

一ふさの華に二たひ春もまた立かへるかと見えてうれしき

樺山早馬忠郷、杜若を愛し池にあまた植置き、朝な／＼立出て

見給ひしに、あるあした荅のみありければ

紐解て我には見せよかきつはたへたてん中の名にはあるとも

花一もと忽にひらきし時の至れるか又は奇特かとそ

和田某源右衛門、牧胤昌と和歌の友たり（22ウ）

胤昌故ありて歌よむ事をやめし、ある時胤昌和田氏を問ふ折節、歌の会也ければ、胤昌取あへず又歌か(の)とてすくに立帰らんとせしを、和田氏

空高くおもひのほりし反靄のさりとて和歌の浦なわすれそ

胤昌感に堪へず涙を流して是を謝(附)し是より又歌よみしとそ

大学詠歌

明朋徳

室直清新助

皆人のもと心は十寸かゝみみかゝはなとかくもりはつへき

新民(23才)

ふりにける奈良の都のならわしもあらたまりゆく君か誠に

止至善

よしと見るその一ふしを難波江のあしかるかたにうつさすも哉

格物

我宿の千種の花を留てこそ色なきはるの色もしらるれ

色なきとは無形の理を云へし

しら雲のいくへと見えて越くれはたゝひと筋の山路なりけり

是は一理貫通の心なるへし

至知(23ウ)

日を経つゝふみみるにこそ玉鉾の道のおくをも白川の関

至知は書を読むを先とすとあればかくよむなるへし

月花を馴て見るにそ増けりさりとてかわる色香ならねと

至知に馴致の心もあればかくよむなるへし

誠意

色見えぬ心の水はこもり江の草のはつかに露もわたすな

我心なへき物か^{*1} はゝ木々のありとは見えてあらんためしに(24才)

*1 都、右傍に「本ノマ、」と注記。

意の誠ならぬと云は、心のきさしの善をなさんとは見えなから、それとさたかならぬをいふとあれば、かくよむなるへし

烏羽玉の夜を照さすはからにしきひるもうらなき色と見ましや

下句は不善のおゝ^{*1}はもな事をいふなるへし

人しらぬ心にはちよはちてこそ終にはちなき身ともなるら(と)ん

此二首は慎独の心なるへし。慎独は誠意の法とあれば、ひとつ

にかよわしてよめるや^{*2}

正心(24ウ)

*1 都、右傍に「本ノマ、」と注記。

*2 都「に(や)」

三輪の山杉立門をたつね来てすくなる神のこゝろをそしる

露すかる萩の上葉によそへ見よかれはたわむ人のこゝろを

心の正しからぬといふは、七情の心にかゝりておもみとなるゆ

へなりとあれば、かくよむなるへし

終身

あさ夕にたもつなる身はから衣立居にうつせ道のすかたを
おもへたゝ身のあやまちを三笠山さして心のとかならずとも

正心の後身の終らぬといふは身の (25才)

*1 東大「萩」もカ

ふるゝ所にありて、必しも心より出るにもあらずとあれば、か
くよむなるへし

齊家

何までも共に汲井のそこ清みむすひもかわせもとのこゝろを
秋風をよそこにこそきけ家の内ひとことの葉のうらみなければ

治国

しるやいかに民のかまとに立けむりいくたくれのなかめなりとは
何事も見る目かひある国なれやこゝそ浮世にすみよしはき

平天下 (25ウ)

*1 都「すみよしのはま」

九重に衣の玉衣袖さむみおほふはかりによをおもふらん
春風の吹とはなしにおのつから長閑に見ゆる四方の海面

今年のはるおもわすも火災にあひ、年頃儲置し書籍携しも、不
残灰燼となりぬ、詩を賤し文を顕すも、故事熟語など引考るに
便もなければ、徒然のすさみに三綱八條を題とし、三十一文字
につらね侍る、古より釋教の歌は代々の集にも餘多載置れ侍れ
とも、儒教のうたは見え侍らず (26才)

近き頃世に取伝るもあれとも其意いひおふすとみゆるは歌のさ
またたくななり、歌の様おかしと見ゆる心叶ひかたし、本より
和歌の分は国の風俗とはいへと、日頃学はぬ道なれば、かく読
て六義のかたはしにも叶侍るへきや、おほつかなし、されは、
其道しる人にも見せて問はまほしく又同志の人にも取伝んとて
書つけるこそ

享保貳の年卯月初の三日、武城のにしのかた辺にて記置ぬ
(26ウ)

鳥のあとをしるるへに尋見んふりにし道はよしあしくとも
すゑの代に我とおもはぬ人あらはこの言の葉をあわれとも見よ

鳩巢老人

要文短冊目録

上野慈眼大師三十三回記於叡山日光所々有大会大会の中日、延

寶三卯十月二日二十八品之御歌奉納

未顕真実 新院御製

あふけたゝ四十あまりの秋くれて落葉そしるき山の端の月 (27才)

入於深山

梶井宮盛胤

山ふかく入し心をおもへたゝまことのみちは浅からめやは

諸法実相

近衛右大臣基着照

みな人のまよふや現見しや夢いつれまことのすかたならずや

等一大車

青蓮院宮尊澄

今そしる法の車よみな人のひとつ道にし出るおしゑを

現世安穩

中御門大納言資熙

おのつからこん世もしるし此世よりやすき心をえてしみのりに

心尚懷憂苦

柿原宰相資廉（27ウ）

なをそうき心いたらぬ人の身のおしへもまよふたねとなるより

従冥於入冥

あま雲のよそにやみつるくらきよりくらきこゝろに有明の月

不覺內衣裏

東園基賢

かけしその玉やうれしきおろかさの心をかへすのりのころもに

我願既満

平松中納言時量

浦船の乗えてしよりもろ人のねかひもみつの泊なるらし

皆在虚空

鳥丸中納言光雄

雲ならぬ身を大空にやとすかな（28オ）

おもひはからぬ神のちからに

在於閑処

野宮中納言定縁

うこきなき心はしらしちりの世をへたつる山のおくにすまは

寿命無数劫

中院前大納言通茂

かすしらすえてし教をつけさらは（也）この身ひとつの仏とや見む

如是展転教

日野弘資

おもふそよいそちの後も幾人の世々にかすそふ法のおしへを

我深敬汝等

難波三位宗量

あたにみしなへてみとりになひくのゝ草葉も花のさかすやはある

（28ウ）

不鼓自鳴

飛鳥井稚章

あま雲のよそにきこえて風の上にうたぬつゝみのころそ妙なる

便得離欲

園基福

白糸のたゝひとすちにたのますはそむるこゝろの色やましらん

善知識者

高辻宰相豊長

法の海ひろくきわめし人はみなうき波もなくちゑも深けれ

作礼而去

聖護院宮道寛

さま／＼のあかれもさそない歳ふる法のみやまの花をおりえて

父少而老

上野檀那院僧正胤海（29オ）

*1 都、右傍に「本ノマヽ」と注記。

行末も猶ひさしかれたらちねの老せぬ道を世々につたへて

寂莫無人声

静恵院僧正桑海

とふ人もあらてさひしき山かけにたえず音する峰のまつ風

唯独自明月

圓光院湛泰

人とわぬみ山のおくの室の戸に心の月そひとりすみゆく

浄仏国土

中川佐渡守久恒

いさきよくする仏の国民をなへておしへの道は広しな

龍女成仏

内藤左京（欠）亮義概

雲霧もたつのみやこを出しより（29ウ）

心のそらにはるゝ月かけ

我不愛身命

田中大隅守定房

なかゝらぬ此世とすれば法のためなにかいのちのおしくやはある

不久詣（諸）道場

中山備前守信治

おもひ入る道たとらすはほともなく御法の庭の花やみてまし

如渡得舩

中根平十郎正興

渡し船のりのおしへによをう（そ）みてさわく（るゝ）心の浪風もなし

無諸襄患 堀田五郎左衛門一輝（二字欠）

たのもしな守るちかひのまゝなからおひすしなすの法のくすりは

衆罪

日光門跡尊敬

前件経文和歌三十首之短冊者、僧正胤海因先御慈眼大師三十三

回之遠忌、自竹園撰録、至公卿僧徒及武臣等盡請詠之予使此旨

達 新院叡聞辱賜卷頭、御製惟唯至誠所見不堪感情、染禿筆而

為後證矣

延宝乙卯年十月二日

輪王寺一品法親王守證

薩摩八景

日聖正三位中納言輝貴

南林晚鐘

鐘の音も波にそひゝく暮ふかき此山てらはうみちかくして（30ウ）

州崎落雁

相国寺前龍山天啓伏長老

無限長州眼界寛、青松聳碧映波瀾

数声雁々落来處、恰做天書雲篆看

開闢暮雪

東園從三位中納言基長

山いくへかさなるうへにあらわれて夕へさやけき峯のしらゆき

南浦帰帆

相国寺觀溪願西堂前等持手蹟^{*1}

尔屋咸成南帆磯、日沈炯浪片諷飛^{*2}

漁翁亦是知其止、釣得遠山佳景帰

桜島秋月

樋口從三位康熙朝臣

秋ことにひかりを花と月やすむ島はさくらの名にたてれとも

大磯夕照 即宗院石（欠）鞆菖（葛）西堂前真如龍菖（31才）

*1 『三国名勝図会』「承願」

*2 『三国名勝図会』「（成）封」

*3 都「烟」

江山鐘愛大磯晡、映帯残紅勝画図

若夫蘇仙人蓉地、賞心順是換西湖

田浦夜雨

烏丸從五位下右少弁光榮

打よする磯辺の波も静にて夕へさひしき田の浦のあめ

多賀晴嵐

即宗院林之長老恵峰雲岩

雲散晴嵐明万波、日光相映海山阿

宮前満月好風景、不尽家珍雅興多

鹿兒島八景

南林晚鐘

松山や嵐につれてひゞくなり（31ウ）

ふもとの寺の入相のかね

大磯秋月

あら磯のよるのさゝ波静にてくまなき月の影のみそ見る

松原夜雨

降る雨に猶つれ／＼や増るらん村さも遠き小夜のまつはら

田家晴嵐

吹おろす嵐や四方にさえぬらん晴るゝ雲井の峰の神垣

須崎落雁

しら波のよする真砂の清ければ秋の夕へにおちる雁かね（32オ）

新橋夕照

堀江橋人の通路しければ夕日もともにうち渡りゆく

鶴丸山暮雪

たくれは四方の嵐も猶さえて高根の山の雪のしろたえ

田浦帰帆

波路へてみるめも遠き田の浦にこき帰り行く蜚のつり（る）ふね

（32ウ）

坊津八景

深浦夜雨

浮雲は猶重りて深るや入海くらき夜半のむら雨

中島晴嵐

雲拂ふ小松の嵐風そひて岩根に伝ふ中島の浪

松山晚鐘

松山のみとりの底に寺ありとつくるもさひしいりあひの鐘

亀浦帰帆

沖に出てけふそくれぬと亀か浦磯の波分かへるつりふね（33オ）

綱代夕照

つなて引綱代の波にうつろひて残る夕日の影たゆとふ^{*1}

御崎秋月

秋風の光もそひて沖津波よするみさきの月そことなる

田代落雁

行すゑの南の海の遠しとや田代にわたる雁のひとつら

鶴崎暮雪

白妙に猶埋てやつるかさき暮もわかぬ雪のさやけさ（33ウ）^{*2}

^{*1} 東大「影 たゆとふ」、都には右傍に「本ノマゝ」と注記

^{*2} 「暮るゝ」の誤字か。

座鋪八景

尾州の土福浪庄右衛門といふ人の娘、十四歳にしてよめる

塗桶暮雪

富士の山麓の里の夕ぐれに空さむからぬ峯のしらゆき

扇子晴嵐

吹からに絵かける雲も晴ぬらんあふきのうちにたゞむ山風

手拭掛帛帆

津奈気船風なき空にま帆かけて沖には出す帰るともなし

行燈夕照（34才）

山の端に入日のかけはほのくらくひかりをゆつるやとのともし火

時計晚鐘

明くれに時をも雁のかねの声猶さひしきは暁のころ

琴柱（桂）落雁

琴のいとや引とめぬらし雁かねのあまつ空よりつらて落ぬる

臺子夜雨

たきる湯の音にまきれて夜の雨のふるともしらし板間もるとも

鐘臺秋月

秋の夜の雲（*）まの月を見るまでに（34ウ）

*1 都「間」

うてなに残るかゝみさやけき（35才）

通昭録卷之（35ウ）

通昭録卷之三十二

石馬集卷之四

後京極撰政 兼実
次男

おほふへき袖こそなけれ世の中にまつしき民のさむきよな／＼

^{*1}石上といふ寺に詣て、日のくれにければ、夜明てまかり帰らん

とて留りて、此寺に遍昭侍りと聞て、ものいひこゝろみんとて

いひ侍りける（り）

小野小町

岩の上に旅寝をすれはいとさむし莓の衣を我にかさなん

といひやりければ返し

僧正遍昭

世をそむく莓の衣は只ひとへ（36才）

^{*}1 東大・都「イソノカミ」とルビ。

かさねはうとしいさふたりねん

為秀

あわれしる友こそかたき 世なりけれひとり雨きく秋の夜すから

今川了俊此歌を聞て即歌道の門人となりけるとそ

西行

なき跡を誰としらねと鳥部やまおの／＼すこきつかのたくれ

露の身のおき所こそなかりけれ野にも山にも秋風そふく

ある人さとりし身には色欲はなきやと問ひしに 一遍上人

（36ウ）

すてはてゝ身はなきものと思へともさむさ来ぬれば風そ身にしむ

西行

荒畠のそはのたつ木に居るはとの友よふ声やすこきたくれ

夫人の塚にまふてゝよめる

定家

まれにくる夜半も淋しき松風をつねにやこけの下にきくらん

猿さけふ深山の月の秋風にこの葉しくるゝおち椎の音

春のたかへすを見て

しつのおの鎌くわとる身の隙（御）なきに（37才）

なとものゝふの道にうときそ

薩州野田にて尊氏公のよめる（かめよ）といふ

さそなけに都の遠き山の端にくもらぬ月のひとり澄らん

露の身を風の山におきながらよにありかほに煙たつらん 為家卿

人^{*1}為わゝ見すとやいわん玉津島かすむ入江の春のあけほの

六玉川

山城

俊成卿

駒とめてなを水かはん山吹のはなの露そふ井手の玉川（37ウ）

^{*}1 都「人為」りて」

近江

俊成卿

明日もこん野路の玉川萩こえていろなる波に月やとりけり

摂津

松風の音たに秋もさひしきにくるもうつなる玉川の里

武蔵

玉川にさらす手つくりさら／＼にむかしの人の恋しきやなそ

陸奥

能因

夕されは塩風こえてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり

紀伊（38才）

忘れても汲やしつらん旅人の高野のおくの玉川のさと

和歌三神

住吉大明神

夜やさむき衣やうすきかたそきのほし合のまより霜やおくらん^{*1}

玉津島大明神

立帰り又もこの世にあとたれむ名をおもしろき和歌の浦風^{*2}

丸^{*3}人大明神

ほの／＼と明石の浦のあさきりに島かくれゆく船をしそおもふ

俊成卿（38ウ）

*1 都「行（合の）」

*2 都「（浦）波」

*3 都「人丸」

俤に花のすかたを先たてゝいくへ越きぬ峰のしら雲

布袋の絵によめる

定家

主はたれ見ぬ世の人をうつしおくふてのすさみにかよふおもかけ

家隆のもとへ読て遣しける

定家

昨日まで陰とたのみし桜はなひと夜の夢も春のやまかせ

かへし

家隆

かなしきのきのふの夢にくらふれはうつろふかけも今日の山風

慈鎮（39才）

山里の垣の紅葉に鴨鳴^{*1}て時雨もふりぬ風も寒けし

西行

あら畠^{*2}のそはの立木に居るはとの友よふ声やすこきたくれ

定家

まれに来る夜半淋^{*4}しき松風を常にやこけの下にきくらん

老後述懐

いくつねて春そと人に問ひし頃待遠なりし年そゆかしき

故郷石

故郷のこれや柱のあとのいし（39ウ）

*1 都「鳴」

*2 重出（37才参照）

*3 重出（同）、この二首、都になし

*4 前出では「夜半」も。

むなしき野辺に草かくれつゝ

煙十文字

大原や小塩の山のよこかすみ立^{*1}や柴屋の煙なりけり

雪中早苗

影^{富士うつす}うつる田子の入江^{かたゝ}の五月雨にゆきかきわけて早苗^{ちん}とるなり

朽木紅葉

蔦かゝる谷の埋木いく秋かおのか葉ならて紅葉しぬらん

南北衣打（歌題詠歌なし）（40才）

*1 県図・東大「（立）は」と傍注あり。都「（立）は」

野中橘

いたつらに野中に人はよもうへしむかしはたれかのきの（ぬミセケ
チ）たちはな

澄憲法印参内して、止観月隠重山拳扇壁之といふ事を説法し帰
るとて、扇を忘れけり、後にもたしめて遣さるとて

たとへつる扇は是にわすれけり月はと問はゝにいかゝこたへん
返しつかうまつるとて

秋風のたつや雲井の月を見て馴し扇をわすれはてけり（40ウ）

北条時頼佐野常世か家にてよめるとなん書けり

白妙の雪に心のなくさまでうき事まさる旅枕かな

法然上人のよめるといふ二首

極楽を心の奥にたつぬれは南無阿弥陀仏の口にありけり

うき事のかさなる世こそ嬉しけれ身をいはふへきたよりとおもへは
草朽て蛩となるといふ事をよめる

源兼昌

草むらに住むなつむしはこそその冬くちし草葉の成にやあるらん

（41才）

夏月は山の端に入らて空に残て明るよしを読むなり、玉葉に
かたふかて月の明行くみしか夜は入かたおしむ山のはもなし

治承三年宇治川の戦に渡辺播摩次郎省、主君兼綱の首を取て、
逃る敵を捕らへ、さし殺し首を取返し脇はさみ腹切て、川に飛
入るとて高声によめる

君ゆへに身をは省とせしかとも名を宇治川に流しぬるかな

被厭賤恋

西行 以下十五首同

うきなから数ならぬ身のつらさにもいと^{*1}はれてそおもい知りぬれ

夢（草）会恋（41ウ）

*1 都「を」

中々に夢にうれしきあふことはうつゝにものをおもふなりけり

寄花恋

花を見る心はよそにへたゝりて身につきたるは君かおもかけ

恋

打むかふそのあらましの面かけを誠になしてみるよしもかな
なけくとも知らはや人のおの（も）つからあわれとおもふ事もある
へき

天王寺にまいりけるに雨のふりければ、江口と申所に宿をかり
けるにかさゝりければ

(42才)

世の中をいとふまでこそかたからぬかりのやとりをおしむ君かな
かへし

家を出る人とし聞けはかりの宿に心とむなとおもふはかりそ
恋

あやめつゝ人しるとてもいかゝせんしのひはつへき袂ならねは
身をしれは人のとかとはおもはぬに恨かほにもぬるゝ袖かな

気色をはあやめて人のとかむともうちまかせてはいわしとおもふ
戒仙、山にのほりて(42ウ)

雲ならて木たかき峯にゐるものは浮世をそむく我身なりけり
のかるとも誰かきさらんぬれ衣あやめの下にし住んかき(き)りは
これたかのみこ

白雲のたえすたなひく峯にたにすめは住ぬる世にそ有けれ
僧正遍昭

はちす葉のにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく
昨日こそ早苗取しかいつの間にいなはそよきて秋風のふく

躬恒(43才)

かく計おしと思ふ夜をいたつらにねて明すらん人さへそうき

西行

うけかたき人の姿のうかひ出てこり(か)すや誰も又しつむへし
頼政

のほるへきたよりなければ木のもとにしいをひろふてひとりかもい
ん

むかしたれ人の心をしらいとのそむれはそまる色になしてぬ
高弁上人

あわれ我うき今までの友そなき(43ウ)

*1 都「あ」

菅家

人の情は世に有しほと

源致雄

命をはかるきになして武夫の道より重き道あらめやは

暮恋故人(歌題欠)

仁和寺入道

なき人をおもひ出たる夕くれはうらみし事そくやしかりける

障子の絵にあれたる宿に紅葉ちりたる所をよめる 俊頼朝臣

故郷はちる紅葉はにうつもれて軒のしのふに秋風そふく

千五百番の歌合に冬の歌

二條院讃岐(44才)

世にふるはくるしきものを楨の屋にやすく(ゝ)も過る初しくれか
な

雨後冬月といふ心を

良暹法師

今はとてねなましものをしくれぬる空ともみえずめる月かな

夜深聞雪といふ事を

刑部卿法範兼

明やらぬね覚の床に聞ゆなりまかきの竹の雪のしたおれ

山下燈

堀川院

柴の屋に誰かしこきを友として文にむかへる夜半のともし火

俊成卿（44ウ）

和歌の浦の道をはすてぬ神なればあわれをかけよすみよしの神

元亨元年仙洞御会

公明

よそまでも月にあわれをそふものとしらてや人の衣うつらん

平氏の討手に下りし源氏の人々も世になくなりしによめる

平惟盛入道

深山辺の月はむかしの月なからはるかにかわる人の世の中

行脚に出た老人に路を問ふ、こたへすしていぬるを見てよめる

西行（45才）

空蟬のもぬけのからにもの間へはあかさくらさもわからさりけり

老人顧すして過ぬ、又他の老人にあひ此事をかたる、老人こた

へて、何とてもぬけのからかといわさるといふ、西行心得て走

りつき、おしへのことくいひ^{*1}かれて、老人立帰り

おしへてもまことの道に行かはこそ我を見てさへまよふ心を

山家時雨

西行

宿かこふはゝその柴の色をさへしたひて染る初時雨かな

後醍醐帝仏法の一大事を問ひ給ふに（45ウ）

*1 都「は」

君よきけ仏ときし法はたゝ世を治めんのはかりことなり

遠く修行に出るとて前齋宮に参て

夢想国師

さりととも猶あふ事をたのむかな死出の山路を越ぬ別れは

或人念仏を申時、忘念の起るをは、いかゝして退治すへきと問

ひけるに

西行

あともなき雲にあらそふこゝろこそそ中々月のさわりなりけり

一休（46才）

行仙房

ときもせずいひしも多さりし所をは知らぬものそとしるぞ知るなり

病重く心よわく覚えしに母を見てよめる

小式部内侍

いかにせん行へきかたもおもはえすおやにさきたつ道をしらねは

懺悔に罪なしの心をよめる

前齋宮太輔

心よりむすひ置ける露なれはおもひとく目に残らさりけり

源順

草枕旅とは誰かいひ置しつゐ（か）の住家は野原なりけり（46ウ）

雨乞

小町

ことわりや日のもとなれはてりもしつさりとは又あめかしたそや

定家

頼こし関の藤川春来ても深き霞に下むすひつゝ

今日そへにさそしくれの音信て神無月とは人にしられめ

僧正遍昭

蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく

僧正遍昭

ちりぬ(欠) れは後はあくたになる花を(47才)

世を捨て山に入人山にても猶うき時はいつちゆくらん
大江拳周病おもく見えしに母の赤染右衛門住吉に詣てゝ身に替
らんと祈りて
かわらぬといのる命はおしからて消も別れんことそかなしき
其夜の夢に老翁此ぬさを取て打ほゝゑむと見て、ほとなく拳
周か病(為)いゑしとそ、
月を弓張といふは何の心そ其よし(48才)

おもひしらすもまとふてふ哉

後白河院式子内親王

詠つるけふはむかしに成りぬとも

軒端の梅は我をわするな

桐のはもふみ分かたく成にけり

かならず人をまつとなけれど

それなからむかしにもあらぬ秋風に

いとゝ(し) 詠をしつのおたまき

素性法師

そこひなき渕やはさわく山川の

あさき瀬にこそあた波はたて

兼慶法師

かたちそ深山かくれの朽木なれ(47ウ)

つか(欠) ふまつれと有りしに

躬恒

てる月を弓はりとしもいふことは山辺をさしていればなりけり

伊勢太神宮の御詠とて宸筆の額あり

月と日と光つれまの池の水のあらんかきりは我あるとしれ

経基

雲井なる人をはるかに思ふ身は我こゝろさへ空にこそなれ

満仲

いか計おもふらんとか(は) 思ふらん(48ウ)

老て別るゝ遠き別れを

頼光

中々にいひもはなたて信濃なる木曾路のはしのかけたるやなそ

秋の夜の月に心のひまそなき出るをまつと入るをおしむと

義家

吹風をなこそその関とおもへとも道もせにちる山さくらかな

義忠

住なるゝ人の心は知らねともやかてさひしき山のかけ哉

頼政 (49才)

近江路やまのゝ浜辺に駒とめて比良の高根の花を見るかな

稲荷山西にや月の成ぬらん杉の庵のまとのしらめる

伊豆守仲綱

山桜ちるを見てこそおもひしれたつねぬ人はこゝろありけり

右大将頼朝

雪消ぬ富士の烟と見えつるは霞にまかふさくらなりけり

右大臣実朝

いとはやくくれぬる春か我やとの池の藤なみうつろわぬまに (49ウ)

*₁
勾當内侍に遣しける

左中将義貞

我袖の涙にやとるかけとたにしらて雲井の月や澄らん

九月十三夜よめる

右兵衛佐直冬

梓弓我こそあらめ引つれて人にさへうき月を見せつる

玄恵法師に菓をやるとて

左兵衛督直義

なからへて問へとそおもふ君ならて今はともなふ人もなき世に

尊氏卿に贈官の時よめる

將軍義詮

帰るへき道しなければ位やまのほるにつけてぬるゝ袖かな

身まかりなんとてよめる (50才)

*₁ 果図「句」、都「勾」

藤原これもと

露をなとあた成るものとおもひけん我身も草におかぬはかりを

忍恋

家隆

人とわゝ袖をそ露といひつへし涙の^{*₂}いろを如何にこたへん

後朝恋

同

あかつきのわかれをしらてくやくしくもあわぬ^{*₃}つらさを恨みけるかな

初会恋

待ゑてもはかなかりける契かなたのめもはてぬ夏のみしか夜

青柳のかつらき山のよそなから (50ウ)

*₁ 都「は」

*₂ 都「なみた」

*₃ 都「は」

君を心にかけてぬ日はなし

むつこともまた月かけの山の端に残りおほかる (り) しのゝめのそ

ら

後朝恋

家隆

ましてはし夜ふかき鳥の声す也さてもつきせぬ名残なりとも

忍恋

家隆

忍ひねも声たてつへし枕よりあとより恋のせめてうきころ

なかむれは行ゑもしらぬ大空におもひあまりて人そ恋しき

今日はくれきのふはことの数ならていく年過ぬあは(わ)ぬ月日は

(51才)

浦風やこよひはまつにふけにけりたのめぬ波の音計して

思不言恋

俊成

我恋はなみこす磯の浜ひさきしつみはつれとしる人もなし

恋しともいはゝおろかに成ぬへし心をみする言(立)の葉もかな

おもひあまりそなたの空をなかむれは霞をわけてはる雨そふる

うら見てもこひしきかたやまさるらんつらさはよはるものにそ有り

ける

何となく落る涙にまかすれはそこも見えぬふてのあとかな(51ウ)

見れはまつそこはかとなく流来て涙落そふ筆のあ(お)とかな

夜とともに絶すもおつる涙^{*1}かな人はあわれもかけぬ袂^{*3}に

恋せすは人は心のなからまし物のあわれも是よりそしる

信明朝臣

有明の月の月かけに紅葉吹おろす

山下風の風

三十四字敷

家隆

かきりあればあけなんとするかねの音に猶なかき夜の月そのこれる

俊成卿(52才)

*1 都「泪」。以下同様。

*2 都「は」。以下同様。

*3 都「たもと」

こはも(を)^{*1}さてくれにきとおもへは春たつといふよりやかて物そ
かなしき

物合和歌

問在原業、答小野小町

春のあしたと秋の夕くれとはいつれ

天の原長閑にかすむあしたより風の身にしむ秋のゆふくれ

鶯の初音とね覚のほとゝきすとは

鶯の初音^{*2}より猶ほとゝきすね覚こととふ夜半の一声

風になひく柳と露にしほるゝ薄とは

おく露にしほるゝ野辺の薄より(52ウ)

*1 都、右傍に「本ノマ、」と注記。

*2 都、「はつね」

いとやさしきは青柳のいと

花の盛の嵐山と紅葉流るゝ大井川とは

大井川もみち流るゝ秋よりも嵐の山のはなのおもかけ

桜かりと野遊ひとは

桜かり心もまよふみやまより千種の色にまじる野あそひ

散^{*1}る花の名残と有明の別れとは

風にちるはなのわかれにくらふれはさすかつれなき有明の月

山吹と白菊とは

しらきくのうつろふ色のつらきをもなか／＼いわし山ふきの花（53才）

*1 都「散花」

撫子と女郎花とは

おみなへしその名にめてゝおもへとも色はゆかりのいもかなてしこ

葛のうら葉と忍ふ草とは

おもわすはしのふ心の色に出てうらみふかきは峯のくつのは

月の夜と雪の曙とは

わけかたや稀なる雪の暁とあかすのみ見る月の夜な／＼

朝^{*1}の空に残る月影と浦の波にしつむゆふ日とは

浦遠み浪間にしつむ夕日よりあけゆく空のうすき月かけ（53ウ）

*1 二本とも「都」と誤字。

*2 二本とも「ほ」と誤字。

荻の上風と松の嵐^{*1}とは

松の嵐萩^{*2}のうわ風いかにしておなし恨のつまとなるらむ^{*3}

田面の雁と霜夜の衡とは

風渡るたのものの雁の声よりも霜夜のちとり猶あわれなり

旅宿の時雨と山路の入相とは

みちの辺の晚鐘よりも草まくらなみたを添ふるしくれかなしき

枯野の霜と庭の落葉^{*4}とは

朝ことに散しく庭の木の葉^{*4}よりかれ野における草の初しも

板屋の霰と草の庵の雨とは（54才）

*1 都「あらし」

*2 都「上」。

*3 「成」。

*4 都「木葉」。

草の庵の雨よりも猶板ひさしもらぬあられや袖ぬらすらん

まれに聞く鹿の遠声と枕近きむしの音とは

稀にきく鹿の音よりもよもすからひとまつむしそあわれなりけり

あかつきの礎の音と夜ふね^{*1}こく音とは

こかれゆくふねの音より衣うつあかつきや猶さひしかるらん

逢はぬおもひとわすらるゝうらみとは

あはぬ間はたのみもあるにわすらるゝ（54ウ）

*1 都「船」

浮き身をたれになにとかたらん

なみたをつゝむおもひと行路をしのふこゝろとは

袖にても涙はつゝむかよひ路を忍ふこゝろそやるかたはなし

まつよひの鐘ときぬ／＼の鳥の音とは

きぬ／＼の鳥のね^{*1}よりもうきものはいつわりをきくまつよひのかね
朝夕なれて逢ふ事のなからむとまれに逢ふとは

まれにあふこひしさよりも後はたゝうちそひなからとけぬ下^{*2}ひほ
(55才)

*1 都「音」

*2 都「も」

おもふ中をはなれむとにくき人にそわむとは

なからへておもはぬ人にそわむよりこひしき人のあかぬわかれち

おもふ人の玉章とまよひたる道のしるへとは

ゆきまよふ道のしるへのうれしさもその玉つさを見るほとはなし

薫物の匂ふかたと琴の音聞ゆるかたとは

たきものもゆかしけれども琴のねの聞ゆるかたにひくこゝろかな

床敷を語るおもひとすくるむかしを^{*1} (55ウ)

*1 都「昔」

ゆめに見るとは

いにしへにかへる夢よりよそなからおもふあたりをかたることの葉

形見と移り香とは

これもこの人のかたみとおもへともなをなつかしき袖のうつり香

みめよくてしほなからぬと愛はありてみめわるからんとは

うすしほの人にはいかゝ添ひはてん愛たにあらはみめあしくとも

歌よみて物かゝぬともの書て歌よまぬとは (56才)

浜千鳥跡たにあらは和歌の浦まよわぬ人のこゝろしらめや

老て子なからんと若き時ひとりあらん^{*1}とは

老か身の子のなきよりも若きときひとりあらんそ悲しかるへき

あわてのみおもわむとある名のたゝんとは

おもふには忍ふる事もまけにけりあふにしかへはさもあらはあれ

契ありて宵にはなれんとちきりなくてかたりあかさんとは

ちきりありてよひにはいかゝ別れまし (56ウ)

*1 都「ぬ」

うき手まくらにかたりあかさん

行人のみねの庵と世をそむく谷のいわやとは

世をすつる心はおなし道なから峯の庵より谷のいわやと

梅の匂^{*1}ひと橘の香とは

おもひわかす花たちはなの袖の香もむかしわすれてむめの匂ふも

卯の花垣と萩の庭とは

布さらす卯の花垣をみるよりもにしきおりしく庭の萩原^{*2} (57才)

*1 都「匂」

*2 都「はら」

二十一代集撰者并巻頭歌

万葉集、大同年中橘諸兄承勅撰

歌四千三百十五首

岩たゝくたるひの上のさわらひのもえ出るはるに成にけるかな

古今集、延喜五年、友則、貫之、躬恒、忠峯撰て奉る千五百首
年の内に春は来にけり一年を去年とやいわんと今年とやいわむ

後撰集、天曆五年能宣、順、元輔、時文、望城承て撰す千二百
二十首

ふるゆきのみのしろ衣うちきつゝ春来にけりとおとろかれぬる（57
ウ）

拾遺集、永観二年の頃、花山院みつから撰し給ひし千三百五十

一首

忠岑

春立といふ計にやみよしのゝ山もかすみて今朝は見ゆらん

後拾遺集、応徳三年中納言通俊に仰て撰す千二百十八首

いかにねて明る朝にいふことそ昨日を去年と今日を今年と

尖君

金葉集、天治元年俊頼に仰て撰す六百四拾九首

うちなひき春は来にけり山川の岩ねの氷けふやとくらん

詞花集、天養元年頭輔撰て奉る（58才）

*1 都「仰」せ

四百九十首

氷居^{*1}し志賀の唐崎うちとけてさゝ波よ（な）する春風そふく

千載集、保元二年の頃俊成承て撰す千二百八十四首

春のくる朝のはらを見わたせはかすみもけふそ立そめにける

新古今集元久（欠）二年、後鳥羽院院宣にて、通具、定家、家
隆、有家、雅経選千九百七十八首

みよし野は山も霞てしらゆき^{*2}のふりにし里に春は来にけり

新勅撰集、貞永元年定家承て撰（58ウ）

*1 都「ゐ」

*2 都「雪」

千三百七十一首

あら玉の年もかわらてたつはるは霞む計そ空に知りける

続後撰集、健長三年後嵯峨院院宣にて為家撰千三百六十八首

年の内に春立ぬとやよし野山霞かゝれる峯のしらゆき

続古今集、文永二年後嵯峨院院宣にて、基家、為家、行家、光

俊等撰千九百七首

名に高き天のかく山けふしこそ雲井にかすめ春や来ぬらん

続拾遺集、建治二年龜山院院宣にて為氏撰千六百首（59才）

*1 都「は」

*2 都「々」以下同様。

あら玉の年もひと夜のへたてにてあくれは春と立つかすみかな

新後撰集、嘉元二年後宇多院院宣にて、為兼撰千九百七十首

佐保姫の霞の衣ふゆかけて雪けの空にはるは来にけり

玉葉集正和二年伏見院院宣にて大納言為兼撰二千八百三首

けふに明て昨日ににぬは皆人のこゝろにはるの立にけらしな

続千載集、元応元年後宇多院院宣にて、撰二千二百十首

出る日のおなし光に和多津海の（59ウ）

波にもけふやはるはたつらん

続後拾遺集、正中二年為定に仰て撰、千三百四十三首

今日よりや春は来ぬらんあら玉の年立かへりかすむ空かな^{*1}

風雅集、後村上帝御宇貞和二年、花園院、撰給ふ二千二百十首

足曳^{*2}の山のしらゆきけぬるうへにはるてふけふは霞たなひく

新千載集、延文四年為定承て撰^{*3}

春や立つ雪けの雲は卷向の檜はらに霞たなひ（欠）きにけり

新拾遺集、貞治三年、為明奉て撰（60才）

*1 都「そら」

*2 都「引」

*3 都「撰」す

明渡^{*1}る空に知られて久かたの岩戸の関を春やこゆらん^{*2}

新後拾遺集、至徳元年為重撰

天の戸を霞へたてて久かたの雲井はるかにはるや立らん^{*3}

新続古今集、永享十年、雅世に仰て撰

春来ぬといふより雪のふる年も空にへたてゝ立つ霞かな

身まかりける年の八月十五夜よめる

道元和尚

又見んとおもひし時の秋たにも今宵の月にねられやわせん^{*4}

鶯声和琴

（60ウ）

*1 都「明」わた。

*2 都「し（られ）」。

*3 都「（ら）む」。

*4 都「（や）は」。

松風にあらぬ初音も琴の緒のしらへにかよふ春のうくひす

依花侍月

かすむとも月をやまたんくれはてゝこぬ色おしき花の木のもと

舟中郭公

こきかへりしたいや聞かん船出せしみなどをすきてなくほとゝきす

松下納涼

松かけのしけき岩ねの苔蘚しくものもなき風の冷しさ

新秋風

ひとはたにまたさそはねといとはやも（61才）

目に見ぬ風や秋をつくらん

古寺月

ちりの世をしらていく秋ふる寺は月のひかりやわきて澄らん

鴻千鳥

此暮とたのめし妻や松浦潟月の出しほに千鳥なく声

古屋霰

音よわくみたれてそちる玉霰ふるき軒端は苔ふるくして

寄松恋

年経てもつらき心は山松の枝かわすへきちきりたになし (61ウ)

*1 都「よ」は。

遠村竹

そよくともしられぬ遠の里なからなひくすかたや風の呉竹

十三夜月陰

村雲は月に隔てゝかゝるともよしや今宵の名にはさわらし

庵

世に遠き山のふもとのひとつ庵さひしきたえて誰かすむらん

燕来

軒に来てつはめそ語るしつかすむ門田の雁は立帰るころ

白梅

(62才)

はるの夜のほしのひかりと見るは今しろたへにさく軒の梅かへ

籬菊

めかれせす是まで匂へ此庭のまかきのきくに霜はおくとも

里花

さくや此花小梅津の里の名はとわてもしるく匂ふ春風

河紅葉

谷川は錦の帯と見る計水ひとすちに紅葉なかれて

卯花

木かくれに残れる月の面かけを (62ウ)

*1 都「には(へ)」以下同様。

*2 「おも(かけ)」。

けさもまかきに見する卯の花

浅雪

このあさけあさちか庭にたゝひとへつもりそめぬる雪はめつらし

寄月恋

見る月のわつかに見てし面影をそらたのめにしたふあやなさ

述懷

なさけそよそのほとゝのよしあしをおもひわきてもまなひ得ぬ身

は

夏月

所からあつけもおしきなにわかたみしかきあしの浦の月かけ (63才)

*1 都「朝」。

逢恋

おしからぬいのちも今宵あひ見てむ又なかゝれといのりもそする

契恋

ちきりおくしるしもあれな世の中のかわるは人のならひなりけり

夕虫

あわれてふ秋の夕へになれも又心ありてやなくむしの声

墓所に詣てゝ

花とみし人はなゝめにさきたつかしのふやしるや苔の下にも

遠村雪

(63ウ)

*1 都「命」。

*2 都「み」。

*3 都「また」。以下同様。

*4 「(か)は」。

ふみ分し跡をは道のしるへにてとわ^{*1}や遠き雪の山もと
世に遠くすむかくれ家もしたおれの竹より上にゆきそあらわす
里遠きうさもさむきもいとわまし雪の中道うつみはてすは

落葉

山風にさそふとならは紅葉はに染し心のいろものこすな
残なくさそひ尽して山風のうらみも庭につもるもみちは
ふみ分て人こぬ庭の紅葉はは鹿鳴ぬ時もあはれとそ見る (64才)

*1 「問はゝや」の誤字か。

堀河院百首に

もろともにまちかきほとに住居していさ垣こしに (よ) ものかさり
せん

寄雨恋

やみまなくおもふも苦し夜もすからふるは甲斐なき庭のはるさめ

浮人にたまゝあふと見し夢(草)もさめてはかなき軒の玉水

ある人によみて遣しける

なけきをも問はぬつらきはつらけれとうれしき事はうれしとそ聞^{*1}

かへし

問ふよりもいわておもふはまさるとて (64ウ)

*1 都「きく」。

とわぬもいふもおとりやはせし

窓螢

我なからよその人目ことはつかしやまなはぬまとにほたる飛かふ

須磨花

須磨の(欠)浦や上野をかけて匂ふなりなへてさかりの花のはる風

中元の日魂祭しけるに晩鐘の聞えければ

この夕へなき玉まつる我なみたいつ此かすにいりあひのかね

中元配所にてよめる

中々になき身とならはふるさに (65才)

*1 都「とひ」

かへらむものをけふの夕くれ

雪中鷺

飛きゆる雲井の鷺のつはさより我色こほすゆきのあけほの
声なくはいかてそれとも知りなまし雪ふりつもるあしわらの鷺

雑

声たえずなけやうくひす一とせに二たひとたにくへき春かわ
なき身とは誰もしれとももろ共にいまわに及ふ事をしそおもふ
丸くとも一ツのかとはあるそよき (65ウ)

*1 都「いま」は

あまりまろきはころひ安きに

上見れば限もあらぬ世の中に我ほともなき人もこそあれ
うき事は世をふるほとのならひそとおもひもしらて何なけくらむ
ならひそとおもひなしてやなくさまん我身ひとつのうき世ならねは
すなおなる竹に心をならひつゝふしなたかへそ人の世の中
数ならぬ朽木なからも心してつとふかつらの文も見よかな
程もな(た)く咲んといへはいと猶さかりの折をしたわるゝかな
(66才)

*1 都「すな」ほ

*2 都「なを」

うこきなき岩ねの松を友と見て君かよわひは幾千代か経む
見てのみや人にかたらん山さくら手ことに折て家つとにせん
月をみて千里の外を思ふにも心そかよふしら川の関
津の国のなになにつけてよしあしと人のうへとてかたりはしすな
雪ふれば峯の真柳^{*1}うつもれて月に見かける淡路島^{*2}やま
もしほやく浦の煙とみしほとにやかてかすめる(か)須磨のあけほ

の

木幡山有明の月にこえゆけは (66ウ)

*1、*2 都、右傍に「本ノマ」と注記。

ふしみの里にころもうつなり^{*1}

見渡せは千本の松をむら消てみれば雨ふる(り)ゆけは花ちる
清見瀉かけもたえなる波の上に月のくまある浜千鳥かな
爐の内にたておく火はしつかこけてとりどころなきものとかはしる
うくひすの声なかりせはゆき消へぬ山里いかて春を知らまし
したひねて秋の名残をみる夢のさむるまくらに冬は来にけり
むすふ手はその人ことに匂ふらし花の下ゆく水の流れに (67才)

*1 都「也」

*2 都「消」ぬ

*3 都「した」

賤かやのまかきに咲る花の色にこゝろうかれて立もさられす
軒つたふしつくならすは夜をふかみ草の庵の雨やしらまし
年経ぬる宇治の橋守こととわんいく世に成りぬ水のみなかみ
ふりすてゝゑこそ帰らね花すゝきまねく野もせの鈴むしの声
まきれなく只花守^{*1}にあけくれてちりの世しらぬやとのしつけさ
残るとも見えぬ青葉のこすえより今はたえ／＼ちるさくらかな
友ならぬ人の問ひきて長居すは (67ウ)

*1 都「花」鳥

ひとりあるよりわひしかりけり

通昭録卷之(69才)

鳥の名の鴨立沢に月出て秋の夕へそものあはれなる

待多たりところからさへ更科の端山^{*1}にうつる望月のかけ

(69ウ) 遊紙半丁

もらさしとおもふあまりのなみたさへ今日はあまりて袖にこほるゝ

あわれなり夜半にすて子のなきやむは母にそひねの夢やみるらん

捨し親のさそすてかねてすてつらんすてられし子のあわれなく声

明日も又誰かなからぬも知らぬ世にともある今日の日こそおしけれ

(68才)

*1 都「やま」

心たに我まゝならぬ世の中に人のむくひはとかなら(し)はこそ

世の中はあるにまかせてあられけりあらんとすれはあられされけり

まなへ人ならさらめやはつなき猿のあらぬ道をも知れはしる世に

浮も猶むかしの友とおもわすはいかに此世をうらみはてまし

のかるとも誰かきさらんぬれころもあめの下にしすまん^{*1}かきりは

月の夜は松原計むらきえてふむにあとなき夏の夜の霜(68ウ)

*1 東大「すま」ぬ

古歌を集めたる一卷あり、石馬集の後に附す、此集の本旨にあらず、しはらく附録とするのみ、然とも集も亦爰に終るにあらず、自今見聞するものは又筆を起すへきものならし

通昭録卷之三十三
石馬集卷之五

釣の糸の餌をこふはし＊₁のよる魚の心も人のおなし世の中

正成の墓に詣てゝよめる

田浦檢校

身は草の露と消てもきへぬ名の残るを誰も忍はさらめや

須磨を通るとて

同人

かつきする身になりてたに須磨の浦の月の見るめをしらしからはや

羈中鹿

赤崎貞幹

妻乞をなれも忍ひて秋きりに立かくれつゝ男鹿鳴くらし

餞別三首

赤崎貞幹

あしへよりしとふはしるや友鶴の雲井はるかにかける翅を

今よりは雲路のかりにことゝわん人の玉章かけてこしやと（1才）

*1 「(はし) み^カ」

旅枕いくよの夢かふるさとの山路の花をわけまよはまし

新緑勝花

飛鳥井雅章

若みとりうす紅に匂わせて花も及はぬ風のいろいろな

清水宗川

行はるの花にやはみし夏山の青葉にふるゝ風のひかりを（1ウ）

古今伝御竟宴并雜集

明和四丁亥二月十四日

今上古今御伝受同并四日竟宴御会

寄道祝言 御製

たえせしなむへすなをなる教をも代々に伝ふる言の葉の道

近衛摂政内前

時し有て君か恵みを敷島の道のさかへそさらにかしこき

九條左大臣藤原尚実

皇の万代こめて伝へますその八重かきの道そかしこき

鷹司右大臣藤原輔平

神代より伝ふる路の弥ましにさかへしられて尽ぬ言のは＊₁

有栖川中務卿職仁親王

栄へゆく末そかしこきすへらきに伝へてあふく言のはのみち（2才）

*1 都「葉」、以下同様。

わか君か伝へし道の行末も千代に八千代といはふ言のは

京極式部卿家仁親王
関院大宰帥（卿）典仁親王

栄へ行道は尽せし八雲たつその神代より世々に伝へて

京極若宮上総太守公仁親王

伝へ来てまさきのかつら世に長く栄行道をあふく言のは

有栖川若宮兵部卿職仁親王

尽せしな遠き神代の古をあふくに高き（を）敷島の道

九條若殿内大臣藤原道前

皇の恵をよにも敷島ややまと言葉のみちそ栄行

葉室正二位藤原頼要

行末の栄もいく世神代よりたへすつたふる言のはの道^{*1}

広幡権大納言源輔忠（2ウ）

*1「と（ふる）」

あふくそよその神代よりいや尽し今もさかふる言のはの道

上冷泉民部卿藤原為村

ちはやふる神代をかけて浮橋のちきりたえせぬ言のはの道

鷲尾正二位藤原隆熙

わか君はつたへて猶も幾千年いやさかゆへき言のはの道

万里小路正三位藤原政房

君かへん千世をためしに此春は言葉の道もいや盛行

平松権中納言言平時行

尽せしな君か詞の路ひろくすくなる神代の光そふはる

清閑寺右衛門督藤原益房

す多遠く猶もあふかん神代よりつたへて絶ぬ言のはの道

日野権中納言藤原資枝

敷島の道は幾代と久かたの天のうきはしかけて絶せし（3才）

たへすなを神代のまゝの道直に伝ふる君かやまと言のは

綾小路桜^{*1}察使源有美

上冷泉右兵衛督藤原為泰

すなおなる道は神代をうけつきて君に栄も尽ぬことのほ

櫛笥左衛門督藤原隆督

幾千とせ神代のまゝの跡とめて君かうけつく敷島の道

石井從二位平行忠

幾千年うけて尽せし此春の君か詞の道の栄へは

風早正三位藤原公（欠）雄

言の葉のみち万代と諸臣もけふ九重の春にあふかけ

大原正三位源重慶

あふけなを君かひかりに千代かけて栄へさかふる敷島の道

久世正三位源栄通（3ウ）

*1 都「按」

此春のすなをさ見えて今も猶栄へをあふく言のはの道

下冷泉侍從藤原為栄

そのかみに今もへたてす栄へ行人雲のみちは君か万代

広幡藏人起頭左中弁藤原伊光

あふくそよたへぬ言葉の道すくに猶も栄ゆく君か代のはる

三室戸中務大輔藤原光村

あふけなを神代に栄ふる舗島の大和島ねの道の栄を^{*1}

上冷泉侍從藤原為章

かけふかくわかのうら松（と舩）幾千年栄へさかふる言のはの道

久世右近衛権少将源通親

我君かうけてかしこき敷島の道のさかへをあふく此とき

武者小路宮内権大輔藤原公陰

行末の久しき御代にさかふらし君かうけつゝ言^{*2}のはのみち^{*3}（4才）

*1 都「栄」へ」

*2 都「（こ）く」。

*3 都「道」

右古今御伝受者有栖川宮より
当今女帝様御受被遊（5才）

（半丁余白〈遊紙〉）

（5ウ）

中院近衛権少将源通古
あふけなを神代のまゝに末絶す言葉の道のさかへ行世を

藤谷弾正少弼藤原為敦

言のはのみちの栄えは和歌の浦の松をちきりに祝ふ万代

柳原藏人右中弁藤原光房

此春はわきて栄ゆく言のはの道いく千代とあふくかしこさ（き）

鳥丸藏人権右中弁藤原光祖

あふけ猶猶たへす栄て八雲たへその世のまゝの敷嶋の道

御製読師 撰政

御製講師 別當

読師 右大臣

下読師 左衛門督（4ウ）

講師 伊光朝臣

発声 按察使

題者 民部卿

奉行 政房

正親町家御当座 二月廿三日

朝霞 正親町頭中將 公明朝臣

朝日影にほふそなたの山まゆも霞の袖にたちか（め）くすらし

山桜 中山中納言殿若宮 忠尹朝臣

遠ち（行）よりはかすむとも見し山桜なを（き）奥ふかく咲つゝく

頃

郭公 正親町大納言殿 姫君御方

一こゑはさたかにもら（ゝ）せ時鳥待夜の月の影そ更ゆく

萩露 裏辻殿 公理朝臣

小男鹿もかよひなれてや浅茅生のをのゝ萩原露そみたるゝ

夜鹿 北御方

あきくさの露もこほるゝ小夜風に声たてそへて小鹿鳴らし^{*1}

時雨 愛親卿

はれくもるほともさためす木枯の森よりさそふ夕時雨かも（6才）

*1 都「添（て）」

忍恋

公明朝臣

しのふれはいつあらわれん我なはいりぬる磯の玉もならねど

久恋

美領

とし月をふかき軒端の草の名にしのひはてなむ（二字欠）中そわりなき

旅行

おなし

旅衣うらなくなれて花にそひ柳にたとる道のへの春^{*1}

祝言

愛親卿

諸ともに心くもらて万代も三笠の山の影をあふかむ

武者小路家御当座 四月七日

侍郭公

公陰朝臣

更ゆかはやみにたとらむほとゝきすこの夕月の一声もかな（6ウ）

*1 都「辺」

瀧夏月

景平

影更てうつるもはやき瀧津瀬のなかなる淀は夏の夜の月

夏草月

澄月

夏もまた朝な／＼に散る露のすゝしさならず野への叢

田家蛩

美世

秋ちかみ門田のいなはうちなひき露もみたれて蛩飛かけ

湖納涼

美領

風むかふこの夕浪にうち出の浜辺すゝしく浮ふ釣舟

寄雲恋

美世

いつまでかよそになひきて浮雲のへたつる中にももの思ふらん^{*1}

寄車恋

澄月

あひみはの心いそきも我中はしのひ車のくるゝをそまつ

寄獣恋

公陰朝臣（7才）

*1 都「（ふ）覧」

とはるへき夕へもすきぬ今宵また独臥すいの床や露けき

海村夕

景平

塩なら（ゝ）ぬゆふけのけふりたてそふもとまやつゝきに見えて淋敷

杜頭松

美領

玉垣のあけもみとりの松枝にいろはへみゆる住吉のうら

（以下六行余白）

美領（7ウ）

あきらかにやわらくみつかひとつに、あたれるとしのきさらき^{*1}
のはしめ、都ノ方^{*2}におもむきけるに、播磨の国しかまのかち路^{*1}
を行に、曾根の社に詣て

神垣はそこしられてほの／＼と梅か香つとふ松の春風

二月十六日西行上人の御影供岡崎風真軒興行

樵路早蕨 兼題

花ならぬわらひも春の家つとゝ手折そへつゝ帰る山路

山家如綿 同席探題

をしなへて咲そふ花のからにしきたちをくれたる山の端もなし

二月十四日主上 古今伝^{*3}御あらせ給ひ御竟宴として、同廿四日御会あるへしとて、武者小路公陰朝臣参内おはします。その日の御供つかうまつるへきむね仰こと（8才）

*1 都「(や)」は。

*2 都「の(方)」。

*3 都「御伝」。

ありしかは、誠に道のめうかになかなひ奉りなむめりとて御はかせ給りて、殿上の階下にかしこまり御披講のものゝ音はるかに拝聴し奉りて、おそれみなからおもひつゝけ侍りし

敷島の道のほとりの草葉までおよ（も）ふ恵の春やあふかん

同廿八日武者小路家御内会

野外遊絲 御兼題

小草さく野へのにしきのたてぬきにおりはへみゆる春の糸ゆふ^{*2}

浦千鳥 御当座

なのみ（こ）してかへす衣のうら千鳥月になく夜は夢もむすはす

三月十三日伏見山の桃見にまかりて豊臣のむかしをおもひ出て

（8ウ）

*1 都「(野) 辺」

*2 都「い(ふ)」

此御代に三千世の春をゆつり置いて咲くもゝとせの花の故郷

同十五日 公陰朝臣参 内の御供つかうまつり侍しに、折しも禁庭の桜さかりなりければ、おそれみなからおもひつゝけ侍し風ふかぬ世の春をしもあふくらん咲そふ花の雲の上人花も今ひかりをそへて咲つゝく玉のみはしの春そ世ににぬ

閑院の御所の花さかりに糸竹の御しらへはるかに聞え侍しかは御築地のほとりにたゝすみて

咲花も千代をこめつゝ糸竹の園生の春のしらへ妙なれ

あらし山の花今をさかりにて松の木の間を咲つゝくけしきえもいはす

咲つゝく色も匂ひも世にたくひ嵐の山の花のこのころ（9才）

入相の鐘きく頃小倉山の花を見て

桜さく山はさくらの名のみしてくるゝ色なき花の夕はへ

弥生なかの二日、迎称寺の糸さくらやゝさかりなるよし友人のほのめき聞へければ、かひつらねてけふなん見にまかりけるに、三とせ過にし春日やありけん、このさくら見にまかりしことなどおもひ出て

美領

さめてまた花にそなるゝぬるてふの夢なりけり年の三年も

くりかへし見るにそあかぬいとさくら幾春かけし色香なるらん

あるしの僧返し

入阿

幾春をかけし言葉の花かつらくりかへしてもあかす社^{*1}みめ

右迎称寺は京都東山岡崎のほとり 真如堂といへる所なり 時

宗なり、あるしの僧（9ウ）

*1 都「こそ」。

入阿は武者小路御門人にて京都地下の宗匠なり、武者家門人にて、風真軒澄月、梅月堂香川査景平、此入阿なとは尤宜分なり

未八月廿日

於冷泉家京極黃門御影供和歌

山霞

有栖川中務卿宮

あわ雪をおのれきえてやとはかりもいひし常盤の山かすむらん(也)

春月

中院中納言

いと敷むかしを思ふ春の夜はかすめる月もあはれとそ見る

見花

三条院宰相中将

いにしへの春をそあふく此宿にほころふ花を見るにつけても

郭公

飛鳥井右衛門督(10才)

折しもあれ小倉の山のほときすなれもむかしの跡をとふ声

納涼

藤谷民部少輔

夏の日の夕すしく立寄れば松の木陰に蟬ぞ鳴なる

萩露

有栖川 常陸太守

小倉山すその^{*1}萩の露ふかきはなもやふかし秋をこふらん

対月

冷泉中納言

あきらけき光をうつす宿の月こゝにむかふも万代のあき

紅葉

冷泉侍従為泰

ななめけむそのよはさそな朝な／＼そむる小倉の山の紅葉は

時雨

鳥丸中納言

影あふく宿はしくれのふりし世を忍ふこと葉もいろそ添ける

雪深

冷泉侍従

松の雪深きめくにとし／＼の(欠)たむけもつもの宿のことのは
(10ウ)

*1 都「野(ゝ)」

忍恋

飛鳥井大納言

末終に思ひの色やもれなましそてになみたはよしつゝむとも

逢恋

藤谷前宰相

あひみつる(か)心隔ぬむつをことに猶いやましの思ひこそそへ

別恋

武者小路少将

起出て別をいそく槇の戸に見る影したふ在明の月

古松

風早前宰相

をくら山のふむかしの跡ふりて軒端に残る松の木高さ

述懷(二字欠)

冷泉民部卿宗家

影あふく山のはつかの月も知(き)れおよはぬ身にもすてぬねかひ
を(11才)

海路詠草

寺山用央(四字欠)

旅におもむきけるとて九月廿九日の日故郷をたちいてけるとき
によめる

秋にさへわかれてそゆく旅衣たつふる里の名残のみかは

道すから山々の紅葉色ふかく見え侍りしに時雨の降ければ

紅葉々もけふをかきりの秋に猶染つくせとやうち時雨らん

久見崎にて神無月朔日の日時雨ふりければ

これこそは冬のはしめと聞ふりししくれも折にあへるそら哉^{*1}

雨のしつかに降ける夜

旅にして独さひしき夜はの雨音聞にさへ袖そしほるゝ

故郷を夢に見侍りて

覚て猶かなしき物か古郷を見れば思ひも深きよの夢（11ウ）

*1 都「空」

七日はかりのほと久見崎に侍りて、あすは船に乗そめ侍らぬと
しける夜によめる

あすよりは船路の旅のわかれとて又此里もなこりこそあれ

十月八日の朝船にのりそめ侍りて、その日やかて船をいたして

暮ほとに阿久根につき、其夜はこゝに船かゝりして終夜ねられ

されければ

つらき夜やきのふも旅は旅ながら猶浮船に浪まくらして

その夜曉かたより嵐吹出侍れば船々みな湊をいて侍る

真帆ひきてまた浪くらき曙に湊を出るふねの追風

八ツ時計に軍か浦につき侍る、十日の日もまた明はてぬほとに

湊を出て、朝嵐に三里計はしり侍れと、沖は北風つよくて又

（12才）

もとの軍か浦にはせもとし侍る

朝嵐沖の北には吹まけてかへる軍か浦のともふね

十一日つとめて船のかしらなるものあたりの高き山に登り、沖

の風浪を見て帰きて、沖の風もよくなり侍る、けふは灘をも渡

し侍らんといふほとに、船出の貝ふき侍れば、船子ともみなき

ほひて節なとり、すぐに真帆ひきて湊を出侍る。

湊いての船子の声もきほふ也けふや千里の波路渡らん

夜入てこうやき口の湊につき侍る

故郷はなを隔てきてよな／＼にかわる湊もうきとまり船

松島を通りけるに松のふかくしけりたる山陰に紅葉の一木見え

侍りければ

浪風のあらき磯辺も山陰の松の木のまに残るもみちは（12ウ）^{*2}

*1 都「みなと」

*2 都「紅葉は」

その夜おもたかの湊にて、浪のうへにうつりたる月の光殊にさ
やかにて、秋にもまされる心地し侍りければ

湊江の浪にうつれる影見れば冬こそ月は澄まさりけれ

夜なか計におもたかを出してこきゆき侍るに、俄に西風ふき出

て侍れば、からふして牛の首の湊江まできたりて、船かゝりし

てけふは暮ぬ。

やかて又待つへき西の風なれとけふの船路にむかふくるしさ

十五日の夜風つよく綱碇多く入て浪にゆられあかし侍る。

あらき風ふせくたよりも浪枕しつ心なく明すよはかな^{*1}

十六日にも風やます吹くらし、夜入て猶つよくなり侍る、このたひは一日もいそくへき旅路なるに、かくては(13才)

*1 都「夜半」

末もいかゝあらんなどおもひくるしみて

とまり船とまる心もなき物をいかで浪路にむかふ風ぞ

船かゝりしける所を九十九島^{*1}といふ、けにちいさき島々おほく侍る、すこしは人居も有といへは、野菜など作たるも有へし、かひきたれとて小船遣しければ、やかて帰りき(来)て此島^{*2}には小なもなしといふ。此ついでに船子とも野(かわ)かたに行て、むへといふもの取たりとてくひけるを見て

くふものはむへはかり(わ)にて九十九の島に野菜の一葉たになし

十九日あけほのたすけ湊を船を出し侍りて

けふよりは西の嵐に真帆引て浪のさわりも難渡りせん

其日七ッ前にもやあらん呼子の湊につき侍る。(13ウ)

*1 都「嶋」、以下同様。

*2 都「この」

その夜もいねかてなるに故郷の事なと思ひ出て

故郷の夢路を絶て浪枕ねぬ夜つもるもうき泊船

ふる郷は幾重の浪路隔つらんよ船^{*1}／＼つらき楫枕して

廿日の朝またくらきに磯辺の山にからすのあまた声鳴わたりけ

れは

泊船いふせき夜半も明ぬとや磯山からす鳴渡るらん

雁の声を聞て

秋ははいぬる雲路にいかなれはひとりおくれで雁^{*2}のきぬらん

廿一日前の夜九ツ頃より呼子湊をいたし西風にてはしる、ひめ島のはつれより雨降出てけん、かひ島のほとりにて夜明雨もやみ侍る、猶西風にてはしる

降る雨は浪路に晴て行船も真帆にかけたる今朝の追風

あいの島^{*4}近くなりて、やゝ風なきて船もおそくなり(14才)

*1 都「よな(／＼)」

*2 県図「おくれで」なきぬらん。

*3 都「出し」。以下同様。

*4 都「あ」ひ。

侍る、やかて北風さへ吹出侍れば、やう／＼して七ッ前の頃にやあいの島につき侍る、このあまものあみをおろして湊のほとりにて魚をとりて、暮かたまで小船をこきありくをみて世をわたる身のならわしのいとなみにあまのしわさもくるしとやせぬ^{*1}

廿二日朝旦にあいの島をいたし、地の島を通る頃より西風になり夜入薩摩泊に着侍る、いそく船路にけふおもひの外の風を得ていとうれしく侍りければ

いそくなる船に追手の風ふきて思ふ湊につくそうれしき

廿三日故郷にたより侍りければ

故郷に書やる文のもしの関さわらてはやも行かへりなん

さつまとまりといふ事をかくし題にて

うさつらさつまとまりてやなくさむる今宵は峰に鹿も(は)声せず

(14ウ)

*1 都(せ)ん

もしの関を折句に

ものおもひしらてはなかし野辺の虫せめてあはれときく人もかな

夜もすから雨降侍りて、苦より落る雫の音もさひしく聞こけれ

は

みなと江のとまふく船に雨聞て猶いねかてのよわそさひしき

雨風つよく綱碇多く入てつなき侍れと、浪高く船の内いとく

るしければ

とまり船たのむ湊も浪立てうきねくるしき夜半の雨風

夜明雨風おさまり磯辺の山も雲はれ侍りて、初雪のめつらしく

見え侍りければ

寒し夜の明れは見えて雨雲もはるゝ磯へんの山の初雪

明かたに磯辺の山寺に鐘の声の聞えければ

浪枕いねわひし夜も明かたの磯山寺に鐘ひゝくなり(15才)

廿九日昼過の頃より西風つよく吹出侍りて、湊のうちも浪高く

夜いりて猶雨風つよく侍りければ

しつかなる夜半たにうきを泊舟湊の浪のさわく雨風

十一月五日 暮かたより西風つよく吹出て、夜入猶つよく常に西あかりといふたくひにはあらず、けしからぬ大風にて終夜吹侍れは、船にみな綱碇多く入てつなき侍れと、猶あやうくていかゝあらんなど心つかひ侍る、夜明て猶やます昼の頃よりそ風もやわらき浪もすこしおさまりて、みなつゝかなし、是より外の湊々につなきたる船とものいかゝあらんと思ひ侍りて

おもふそよはや浪風もおさまりていつくの船もさわりなかれと六日の日も風吹くらし。その夜風しつまりて此湊に(15ウ)

いつくの船にか有けん、ふたり乗の小船のなきさ近くうちよせ、ひとりには船に身まかり、ひとりはみえず侍る、船をふせくとて力尽て死したるならん、ひとりは海に落入たるにてこそあらめ、身をのかれぬるにはやすかるへき物を、あまりにつよく働て力尽はてゝたおれたるならんと言を聞て

浪風のあらきを船にふせくとて我身をなとか思わさりけむ

七日には雪ふり出風いとさむく侍りければ

筈やかたひまもりくるも今朝は猶雪のふゝきにさむき汐風

八日の朝四方の山々に雪つもりけるを見て

夜もすからむへさえけら(り)し今朝見れば雪にうもれぬ山のはも

なし

九日の日も雪もよふにて風さむく侍りければ

けふも猶雪けにさえて磯山の松に嵐の音そはけしき(16才)

*1 都「いふ(を)」

十二日の日薩摩泊より大里のかたに船をまわして其夜あかつきに鐘の声を聞て

鐘の音よいかに聞てかおとろかんぬ夜は夢も浪の枕に

十六日大里を船出して田の尻まで下りて船かゝりし、その夜故郷の事などおもひ出侍りて

山路分浪路しのきてけふ幾日ふる郷遠くへたてきぬらん

おし船に（から）てもと山崎を過て夜入侍る、ひるの風もなき
てしつかなる海原に月さへわたりて櫓聞のあとさきに聞えければ

すみ渡る月にこく夜は友船のともころゑもきほふとそきく

上の関なきさ近き山陰に紅葉の一本残りて色ふかく見え侍りければ

冬ふかき嵐にもれて湊江の山陰なればのこるもみちは（16ウ）

宮嶋につき弁才天に参り侍る。かねて聞しにまさりて宮居のさ
ま言葉も尽しかたし、遠于潟に作つゝけたる廊下みな汐さし入
かたにかけ作して正面の浜一町計汐のひかたに鳥居たてり、海
のめくりの島々遠からす近からす所の風景いへはさらなり、お
ろかなる心ことは及ふへきにもあらず、されとたゝにやはとて
跡たるゝ神の宮居もいさきよくよするしら波かけつくりして
いつくしまをかくし題にて

今朝は猶花もいつくしまはきわらおく白露に色やそふらむ
しもつゐと言事を句のうちに置て

残るか（欠）と見えしもつゐにとゝまらず（ふつ）秋より後の山の
もみちは

また明はなれぬほとに船を出し侍る折しもつれ汐に（17才）

西あらしつよきほとに吹侍れば船いとはやし、

飛鳥のつはさもしかく汐につれ、風に追手に瀬戸くたる船

朝日出にむろの湊を船出し明石の浦近く走るもあかぬなめな
れは

真帆引て過ゆく船もあしかたあかぬみるめのなこりをそおもふ^{*1}

浦つたひに夕日の影のうつりければ

所から猶そあかねあしかた夕日にむかふ浦のみるめは

あかしの浦より夜に入侍りて須磨の浦のみるめもわかす侍る、^{*2}

けふはあかしすま（た）の詠をもし侍らんとかねておもひしも
かひなくくればてゝ何のみるめもわかす侍れば、ねんなき事に

おもひ侍りて

あらましの思ひも今はいたつらにくれゆくすま（た）のうらみこそ^{*3}
あれ

廿七日くれほとに大坂につく（17ウ）

*1 都「思（ふ）」。

*2 都「（入）り」

*3 都「須磨」

月日経し船路のうさもわすれなん今日はなに（か）はの湊入して^{*1}

壬十一月九日まで日数八日大坂に滞留し、今日川下りなんは島
にかゝる、きのふ加美の許より井手山吹を送るとてそへて侍り
し

移し植てやとに千年をくるはるのめくみにいての山吹の花
返し

恵みもておくれる人の心さしふかき色にや井手の山吹
いとさむき朝芦辺の水に氷のむすひけるをみて
かれ果る芦辺の水の氷あて朝風さむし難波江の冬

冬かれたる芦のむら／＼立てるをみて

冬ふかき浪華の芦のむら／＼に霜かれ立る色もさひしき
夢かとして春をしのひし面影ものこる難波の芦の冬かれ

十四日あけほのに難波津を船出し侍る、月猶残りて（18才）

*1 都「なに」わ

芦辺ほのかに影うつりてあかめなかめなれは

影うすき芦辺の月もあけほのゝ難波の船出なこり社あれ

けふ風も追手なれは、一ノ洲より真帆引てはしる

故郷に帰る船路の追風をいそく心にまかせてそゆく

須磨^{*1}の浦をとおるとて

めつらしとむかふ計そすまの浦のは（欠）詠におよ（もふ）心なら
ねは

すまの浦を過ける頃より、雨もよふになり風もあしくなり侍れ
は、あかしの川に入て、かゝる、十六日には空くもり時々雪ふ
り正一位柿本大明神の御社に参りて

しるへなき心はいとゝ敷島の道にまとふをあわれとはみよ
十七日あけほのにめさめ侍りて聞侍れは、けふも風あしく侍る
といふ。日にそひ故郷^{*2}も恋しくくるし（18ウ）

*1 都「うら」。

*2 都「ふる（郷）」以下同様。

ければ

ふる郷を思へはつらき泊船いく夜あかしのうらみそふらん

こよひも風立ていとさむく夜もすからねられさりければ

いつまでかかてうきめを湊船浪の枕にひとりかもねん

十九日船出せしに、西風つよく兵庫の湊にはせもととしてかゝ
り、廿日猶西風なりければ、昼のころ楠正成のしるしの塚に参
る、湊川を過て田の中に瓦ふきの堂の内に石塔有^{*1}。しはらく稽
首（欠）し侍るに、そゝろになみたもこほれていと物かなしく
孔明か軍を出していまたかたす身先死す。長く英雄をして涙襟
に満しむと杜子美か詠しけんも楠公のわりにひとしければ
したひきて跡とふ世々のものゝふの涙や塚の手向成らん（19才）

*1 都「有り」

高き名を世々にあ（め）ふくやはしめよく終よき身のしるし成らん

廿一日北風吹出真帆引てはしる、明石の浦にて夜明、あらしも
やみ侍れは、船に櫓たておし船にてゆく

朝嵐またもふかなんたゆむまの船の櫓声を真帆に移して

明石のなきさ近くこきゆき侍るもあかぬ詠めな（た）れは
吹たゆむ嵐もよしや明石潟こきゆく船のあかぬ^{*1}みるめに

あかしの川口を過ける頃より又北風吹出てはしる
跡先にふね／＼おほく見えければ（ん）

おそくとく浪路の帆かけ数見えてあかしの灘を渡る船々

廿四日暁弓削の湊を出し侍る。明暮の船路もふる郷のやゝ近き
になくさめ侍りて

日にそひて故郷近く成ゆけはかへる船路のうさも知られす^{*2}

廿五日今宵は風立て湊の内も浪の音さはかしく（19ウ）

*1 都「あかぬ」。

*2 都「し（ら）」。

夜もすからねられさりければ

おもひ出は浮もうからんとまり船浪の枕にひとりぬるよを

旅はうきならひなから名高き浦々のなかめせし事も 旅ならず

はとおもひかへす

よしや又うしともいはしめ（か）つらしき浦のみるめも旅なれば社

廿八日朝四ツ頃御手洗を出す。北風に引塩なれば船いとはやし

吹出る嵐も真帆に引塩の時ゑてはやく瀬戸の船々

夜入かむろにかゝる、けふ風よくして廿里余りの船路を渡きぬ

れは、故郷も日々に近く成事を思て

故郷や猶ちかゝらんわたりこしけふの船路もはるけかりけり（る）

十二月二日暁より北風吹出侍れば、上の関を船出しむろつみの

前にて夜明侍る、夜のうちにやはや五里（20才）

計来りぬれば、けふは遠くはせ行侍りぬとうれしく故郷の老た
る母もさそまつらん事なと思ひ出て

はやかれと船路いのりてたらちねのこの頃さそな我を待らん

時の間にくたまつ湊かまてはせゆき侍れはいとこゝろよく

て

追いかせや千里もあとに沖津ふね

くたまつを一里計過て雪ふり出西風になり侍れば、とりもとし

はしる。雪猶^{*2}かきくらし降侍りければ

つもらせてみる物にもかきくらしふれと跡なき浪の白ゆき

八ッ過笠戸の湊にかゝる五日下の関を通し、六日夜明の頃あい

の島を出し追風なれば日入過きたすけの湊につく（20ウ）

*1 都「風」

*2 都「なを」

はるかなるけふの浪路も追風のたすけにかゝる船やいく船

八日樺島につくひとひ二日には久見見崎にもつき侍りなん、ふ

るさとの近くなり侍るにつけて（欠）もなにくれとおもひ出

て、^{*1}今宵は猶もねられさりければ

たへてこそうきものはめ浪枕ねられすとても一夜ふたよを

夜明牛深を出し昼八ッ前川口に入、このたび帰りの船路も友な

ひし船共^{*2}皆はなれす乗侍りて川入にも跡先にはせ入れれば

和田の原千里の船路さわりなくかへるもおなしけふの友船

(四行余白) (21才)

* 1 都「出て」「こゝ」なし

* 2 都「ともみな」

雪朝遠樹

朝日さす空かきくもりみるかうちに雪にかくるゝをちの山松

枕時雨

逍遙院殿

いかにねて枕さためん小夜時雨月もさし入つゆもりけり

林葉漸江

烏丸宰相資慶

伊駒山花の林はきのふけふ木の葉色そふ雲そしくるゝ

同題

西郡備前守実信

うすくこく松の林の木の間よりやゝ見えそむる紅葉々のいろ

おせん女道の記

十年計つくしの方に下り侍りしか、老母身にいたはりやもふの

床にふし侍りしと聞^{*2}、御暇申都の方に帰るとて、其用意なしけ

る (21ウ)

* 1 都「いたわ」。

* 2 都「き」

十年計なれにしまゝ心やすき友たちなといとふわかれの悲し
く、はる／＼海山へたて又あふへきにあらされは

いかにせんおなし雲居に同し身の逢ことかたき今の別路

二月十二日に出て行なんとするに、朝四ツの頃、人のいさめ給へとも立出る心なくやう／＼涙ながら出にける、水上の辺茶屋にさゝなと持人々おくり給ひしか、今そ別れのかきりと心も心^{*1}にあらず雨(留)もいとふふりければ

とゝめても雨とふりしく我涙今を限のわかれと思へは

又名残ともいふへきにもあらぬ心^{*2}の名残有て

名残とも岩間の奥の岩つゝし心計にことのほもなし

其夜伊集院にとまり寝られさりければ (22才)

* 1、* 2 都「こゝろ」

十年迄心つくしの夢さめてまくらかたしく袖の春雨

十三日朝六ツ時に出て川内迄行に晴天なればきのふぬれし物と

もほしとゝなふなと下の男なとしければ

賤の男か衣ほすな(ふ)る春日山我袖計ほす隙そなき

世間も見るへくと駕籠のすたれをあけさしかと、又来る道にあ

らすいとゝかなしく人目はつかしくまたすたれをおろして通り

ける、その夜鹿兒島へ馬なと帰るといふに

あと遠く過行かたの恋しきにうら山しくも帰る駒人

十四日おなし所にとゝまり井上殿かたよりくわしなと取りあわ

せ給りければ、又此方よりもくわし茶などそへ遣しける、庭に

さくら咲き有けるを見てむかしの人の事おもひ出して (22ウ)

住なれしつくしの春はおしけれと我うはさくら散過ぬ間に

十五日今日は天気あしく八幡にも参らずして外通る人を詠めもし鹿児島の人に似たる人も見るも涙のたねと引込り臥ける所に、たより有よし聞文遣しける。十六日川舟にて本船に移り、川内川よりはるかに見侍りけるに天気能きに我日はくもりて見渡せば山も霞て袖ぬるゝ又此さとへきさらきの空(欠)

十七日船こしらへとて久見崎の辺にとゝまりける、御船改に御番所より御出遊され候、夕暮より人々かるたなと打てしはし時を移し、その後ふしけるにかなしき人を夢に見て

おもひ出てねさめにぬるゝ我たもと悲しき人を夢にのみ見て(23才)

十八日けふも船出ずして久見崎といふ所に居たり。

十九日ふなましにて上り湯に入、余り毎日おなし所に居てあとも先きへも行かず空打なめけるに、雁のわたりければあまつかり雲の上までいぬへくはこち風吹け^{*1}とことつてにせん

廿日に船出て樺島へ来着、けふは三十六里をはしり船心ありて心地あしく、夜に入て雨風するに、鹿児島の方も風ふくにやといとなつかしくふしける、廿一日同じ所にとゝまり、魚売りなと声さはかしくいふもいとめつらし、すこしまとろみけるに又かこしまの恋しき友を夢に見ければ

恋しさのおなし心になき人を夢に見し社我心から(23ウ)

*1 都「ふ(けと)」。

夕へ波風あらく有し所、如何にいふ所かと問ふ人々ちゝわな^{*1}た

とて、いつもあらし所と云

千々に物おもふ心か千々わなた身に余りてや波風もたつ

廿二日雨天にて同じ所に居たりしか、雨中淋敷とし酒事など有しか、夜入て雨風強く神なりすさましく家居の軒さへおそろしきに、波あらく風はけしく、光つよくかみなりすさましきにつけ、かこしまもかくやあらん、知鏡院のさこそ恐しく思召給わん、誰々は仙香たき物なとたき給ふらんと今見るこく有こそ、む^{*2}(四字程不明)かし、夜更て人ねいり給へと、我計夢もむすはすひとり香なとたき侍る(24才)

*1 都「(ち)」

2 東大・都「むかし」の右傍に「本ノマ」^{}と注記。

廿三日同じ所にかゝりかるた打申候、長き日ゆへくらしかね、くわしなともそこへ遣し物にいたし、又淋しきもはや少くてなり、

廿四日天気能、船出て又浪風強くして船酔いたし、屋形の内へ懸け浪して座などぬれしかと、物をなお(欠)すへき心地なく、やう／＼枕もたけて見るに二人の女中も皆酔^{*1}て湯一ツ呑むへくやうなく、七ッ過に肥前の平戸まで着く、此所は枕島より三十六里有と云、

廿五日雨天にて平戸にとゝまり居るに、向ふに松浦様の御城なと見ゆる山なと有て景気よく、左手はたすけとふ所也、夜入と篠原の上るりに有とひたんこの道行聞てむ(24ウ)

*1 都「みな」

かしをおもふなり、

廿六日けふも天気よきに、風あしく同し所に留り、湯などへ入ける、

廿七日雨天にて船出すやう／＼一日はしり、三四日ツ、居るこそころうけれ

廿九日雨にて同し所に居る、波風あしくなり、夜に入るほと波あらく、ねいる人もなく船人もケ様の事は近年に覚^{*1}へすといふ。夜中にうちへかけなみして

三月朔日きのふより浪風やまなく、きのふより男女皆食せず、よその船の人々も上宿なさと聞へければ、我も亦上宿する、やう／＼はしめて食する(25才)

*1 都「覚」え

二日九ツ前に風少しやみ、上より本船へもとり暮方に少し浪静まり、二月二日には祝ひなと賑々敷かりけるに、かわりたる事とおもふなり、

三日雨天にて日くれにかゝり節句をしられす折から桃の花向ふに見えければ

めつらしな波間にさける桃の花けふことふきの見ゆる物から

四日半天なれと船出て八里行く、たてくといふ所にかゝりける、十日計同所にかゝり七八里行くこそたえかたくおもふなり、五日半天に船出て七里行、よふこ島といふにかゝりしか、此み

なとあき人など多くくた物なと売来る、女郎町も有よし人々いひけり(25ウ)

六日同所にかゝり雨風つよくはけしきなり^{*1}

七日雨風つよく同署にかゝりほう／＼とふねにあきしなり。八日半天なれと下り風ゆへ船いてす、おなしところにかゝり居るなり。

九日晴天なれと風あしく同所にかゝり、余りのことに湯に行く、野原を通り永吉のことおもひいつるなり、

十日出船して十五り押船にていまつにかゝり、

十一日雨天にて同所に居ける、過しけふは別れをおしみ前後もおほえす有けるに夢のやうにありける

十三日出船して下の関まで来る、三十一日めに半分道来るこそものうけれ、此あいたは(26才)

*1 都「也」。

*2 都「ほ」ふ

けんかい島なり、あいのしまなとてあり。

十四日おなしところにかゝり居ける

十五日雨風はけしく大しけにて難儀しける、世間見るへきやうもなくくるしく有なり^{*1}

十六日晴天にて出船しければ、中途にて風あしく潮かゝりして夜はしりして

十七日八日三日めに上関へ来る、屋形へかけ浪して、人々大きにさわきにさわき、気相よろしからつ、万の島とありといへとも見るへきやうなくふし居てなくなり

十八日上関にて湯に入、町などほこうして気相をなおしける
十九日晴天にて船出て行に、中途にて風(26ウ)

*1 都「有」る。

*2 都「宜(しから)す」

*3 都「(島)／＼」。

向ふとて、七里計行て又本の上関へ帰る

廿日雨天にて同じ所に居ける

廿一日同所に居ける

廿二日晴天にて船出て十二里来て津波といふ所に布名物に(わ)て船にて売来る、細布十三よみにて入(欠)ほと布七すしに一たん取り船へはふと布三まし計ツ、に取なり、便あらは御国に遣したく(ゝ)おもふなり

廿三日同所に居けるに、茶たはこなくなり人のをもらひ又は少しツ、もとめ、あはれなる事也

廿四日雨天にておなしとところに居ける

廿五日雨天にておなしとところに居ける

わかれつはかくまで物はおもふまし夢に見て夜のね覚悲しき(27才)

色々あしきゆめ見るゆへに、御国の事みやこのこといかにとお

もふなり

廿六日晴天にて出船して十里計来て備後の白石といふところにかゝり、大きな(り)白石沖の中に有之、此所に弘法大師の御寺有なり、別てさひしきみとなり

廿七日晴天なれと風あしく同所にかゝり居り、余り気うつ／＼と皆心あしきとてけふは湯入にまいり、かの寺へまいる

廿八日雨天にておなしところにかゝる

廿九日晴天にて備前国牛窓まで来る(り)。十七里

晦日晴天にてゑしまま(欠)て来る十里余

四月朔日あかしなをこへ兵庫まできたる(27ウ)

*1 都「都(の)」

なたの内波風静に有しか、少し心地あしかりしに瀬戸に入て枕もたけ見る明石の浦すまの浦なと見ければ、誠に一の谷といひけるはすさまじき岡なり、むかし思ひ出てすさましく、あつもり公の墓なと有といへと、空くもりて見えす、此所までは物もしか／＼いわさる所とて、人々つゝしみ居ける、須磨寺遙に見えけるに、行平公爰にて歌をよみ給ひしもことわり、月はさそかしとおもひてられける

二日には大坂川口へ来る、空くもりてしか／＼ものも見えず、なか／＼の船中にていつか／＼とおもひしに來着しければ、夢

の様におもひて

はる／＼と八重の潮路の波枕けふ九重に夢はさめけり(28才)

*1 都「ゆめ(の)やう(に)」

今日は御国の名残とおもへは船も名残ありて

うかりける船に名残もつくしかたゆかりもけふをかきりと思へは
よしあしの難波のこともおりなへすまた袖ぬるゝ我心こ（か）そ

都よりかた／＼申候へく候

（以下三行余白）

おそん女は都にすめる浪人の娘なり、はしめの名はおもとゝい
ふ、十七の年つくしに下り、久峰君の御もとにみやつかへしけ
る、さいつ頃母のいたわりとて御いとま申し都にかへる、富永
勾当かもとにつかひし（28ウ）

*1 冒頭には「おせん」とあり。

女もおなしく都に帰るをとみなひ、はる／＼の道すから折にふ
れ興に乗してよみけん歌なと書つらねて、同じ宮仕への友たち
におくりけるを見侍しに、その詞すなおにして心さま人となり
おもひやられてゆかしくおほえける、つくしに有けるあいたは
歌よむ事はなかりしといへは、つゝしみふかくしてつゝみける
か、知る人なくてうちすきけるか、はしめてよめる歌にはあら
す。昭はもとより此道知れる身にはあらねと、詞の艶なるにめ
てゝうつしおくものならし、

久見崎にて秋の夜雨の音しつかに（わ）ていとさひしかりけれ
は

寺山用央（29才）

うき秋の旅の枕のひとりねに雨聞夜半を如何に忍はん（し）

雨ふり出てより庭に夜な／＼聞なれし虫の声もなく侍りければ

用央

聞きなれしみきりの虫も声絶て雨になる夜そいとゝさひしき
いつもうきたくひにはあらず秋の夜の更て雨聞旅の枕は

秋の夕によめる

用央

うき旅はいつもかなしき心もていかに堪まし秋の夕くれ

よな／＼ねられさりければ

用央

待人もうらむる人もなき物をなといねかての旅のよな／＼

雪のつもりける朝

用央

閨の戸のひまもる風も寒し夜の明れは庭につもるしら雪

水石契（勢）久

飛鳥井大納言雅章

うこきなさいはほやためし君か代によきたくひそとすめる池水（29
ウ）

竹風夜涼

白川中将雅喬

まと（こ）近くぬる夜は竹のそよ更に夏とはなしや風のすゝしさ
夏の夜はふけてかよ（上）へる秋風に軒端の竹のそよくすゝしさ

政徳院殿十三回追悼百首和歌

藤原久躬

樺山主計後久初

霞

ありし世そいや遠さかるか（い）そふれは十とせあ（欠）まりの春
の霞に

鶯

今よりはなれてかたらへ軒ちかみ今朝聞そむる春のうくひす

梅

咲ぬるか鉤簾^{*2}の内外も梅かゝのおもひもかけす匂ふ春風

柳

春に今やわらく風も打なひく柳か枝に見えてのとけき(30才)

*1 都「し」き。

*2 都「釣」カ。

蕨

きのふけふふる春雨にもへいてゝ焼野のわらひ折はめつらし

桜

物おもひなしとはいはし家桜見れはむかしの春そ恋しき

桃

咲もゝの物をしいはゝしのはるゝ昔の春ことかたらなん

梨

雨はるゝ名残の露に色そひてよそひことなる花のつまなし

雉

おもふその妻やこもれる春の野のかすみかくれにきゝす鳴也

鶺鴒

見るまゝに翅はきえて空高くあかる雲雀の声そかすまぬ

蛙(30ウ)

賤男か苗代いそく小山田の雨にきほひてかわつ鳴こゑ

菫

一夜ねてあすも摘はや菫さく春の野もせに日は暮ぬとも

荊

あかさりし花はあとなきまかきにも春を残して咲る山吹

躑

谷川のあさき岩まのなかれにもえならぬ色をうつす野つゝし

藤

夏かけてなを咲のこれくれて行春の余波の花の藤波

葵

あふ^{*1}ひ草かへる車の下すたれ同しみとりの色そすゝしき

繡

待れつるうらみは晴てほとゝきすつふりいてゝなく村雨の空(31才)

*1 都「あ」を。

橘

おりしもあ(お)れ有しむかしのしのはるゝ夜半のねさめ(か)に

匂ふ橘

鵲

月影はまた夜を残す楨の戸にいかて明よとたゝく水鶏そ

霖

心さへはるゝ品良^{*1}なくつれ／＼とふることしのふ五月雨(欠)の頃

扇

あつき日もさすか扇の風ふれて秋かとたとる袖のすすしき

蛩

何にかく沢辺のほたる刈こものみたれてもゆる思ひなるらん

蟬

涼しくもなく空蟬の声そひて秋ちかくなる木々の下風

蓮 (31ウ)

*1 「ひま (なく)」の誤写か。

袖の上にかけてそ思ふなき玉の終のやとりの蓮葉の露

泉

山陰のいはもる水のすゝしさにてる日もさらにしらてくらしつ

萩

秋といへはふく音すこき夕かせのわきて身にしむ庭の萩原

露

わかれにし昔の秋のけふにあひて猶ほしわひぬ袖のしら露

薄

しゐてなを誰をか招く花薄露ふきこほす風のまかきに

蘭

秋風にほころふ野辺の藤はかま誰きてみよと香に匂ふらん

雁

花の春いかにしと見しかほとなくもみちの秋に渡る雁金 (32オ)

*1 都「し」ひ

*2 東大・都、右傍に「本ノマゝ」と注記。

鹿

いねかての秋の枕になく鹿の声きゝあかすよはの淋しさ

虫

此ころの野辺いかならん庭の面の浅芽か露にしけき虫の音

霧

明ほのゝ山もとくらくたちこめて猶夜を残す秋の八重霧

月

身ひとつの秋にあらね (ぬ) とともすれは月見て袖をぬらす夜な

鶉

吹風も猶身にしめて夕日影おちかた野辺にうつゝ鳴らん

鳴 (鴨)

聞わひぬ晩寒きさわみつの月に数かく鳴 (鴨) のはねかき

菊 (32ウ)

*1 右傍に「覚」とあり。

おきまかふ露さへあかすさかりなる藩の菊の花の色々

薦

苔のむす軒はも秋は色はへてそむるもふかき薦の紅葉

蓼

こきうすき木々の紅葉は山姫の年にまかせたる錦なるらん

霰

秋の露またほしあへぬ袖の上に冬来にけりとふるしくれかな

霜

見し秋の千種もかれはてゝおく霜しらき野辺の朝明

氷

芦の葉におく霜見えて今朝は先う（も）すこほりゐる庭の池水^{*3}

雹

木の葉ふる音さへそひて風寒る夜半の雹^マやの雪氣成らん（33才）

*1 都「葉」ゝ」。

*2 都「右に同じ」。

*3 都「ぬ（る）」。

霰

幾度かゆめもくたけて楨の屋にあられたはしる音のはけしさ

雪

降つもる夜のまの雪に松竹のけちめもみえぬ朝の庭の朝あけ

鴨

うちはふく翅の霜も解てけさ日影にねむる池のあし^{*1}かも

鷹

鈴の音に行ゑとめてもふる雪にしらふの鷹はそれと分かれす

衾

いをやすく夢もむすはす寒通る^{*2}閨のふすまは猶かさねても

椎

霜雪に木々のこす多は冬かれの中につれなき峯の椎しは

暁（33ウ）

*1 東大・都「お（し）」。

*2 都「返^カ（る）」。

暁の鳥よりもけに我そなく有しむかしを忍ふねさめは

朝

このねぬるあしたの露も置そひぬ有し世しのふ袖のしほれに

昼

かはかすよ草木の露のひるまたす千々に物思ふ秋の袂は

夕

雲の色あらしの声もいかなれはあわれ身にしむ夕くれの空^{*1}

夜

親のいさめ身のつたなさを今更におとろく夜半のうたゝねの夢

星

法の道さとりとはなき我身にもあ（お）ふきて見は（え）やあかほ

しの影^{*2}

雲

おもへ世はたか身の上も中そらにうきてたゝよふ雲の一むら（34才）

*1 都「あ」は」。

*2 都「親」。

風

人の身にかけてを思へはきの露風を待間の此世なりけり

雨

ふりはへて問来る友そまたれける庵しつかなる雨のたそかれ

煙

なき人のわすれかたみと夕煙見るさへ空にやかてきえゆく

山

ちりひちのつもり／＼てしら雲のかゝる山とはいつ成にけん^{*1}

野

消かへりむかしの秋もしのはれて我そてしほるむさしのゝ露

関

なき影は心にとめておしめとも過る月日（か）に関守もなし

川（34ウ）

*1 都「白」

はかなくも一たひ消て三津瀬川^{*1}かへらぬ水のあはれをそおもふ

海

和田津海の千尋の底（庭）も何ならず親のめくみにかけて思へは

庵

起ぬつゝ袖こそしほれむかし思ふ草の庵は雨ならぬ夜も

窓

いかなれは身にはまなはてつたなさをくなくらんまとの明くれ

門

誰か門そうき世をよそにとち果てすめる心のおくそゆかしき

垣

年月は猶へたつれとあしかきのまち（い）かく忍ふ有し面影

橋

絶まなく忍ふ歎は今も猶かけてむかしのまゝのつき橋（35才）

*1 都「て」欠字。

竹

うへ置てなをき姿に習ふやと朝夕むかふ庭のくれ竹

蓬

稀にたに露うち払ふ人もなししけるまゝなる蓬生のやと（く）

苔

誰とへとあらしや払ふ松の戸の木かけちりなき苔のむしろは

蕨

たのむそのよるへやいつこさそひ行風のまゝなる波の浮草

薦

ともすれはみたれてそ思ふまこも草かりの此世とかつはしれとも

松

人の世そあまりあたなる友とせし松の千年の影にならして

杉（35ウ）

たれこゝに年経て住るしるしかも木高く見えて杉たてる門

榊

いつ世に誰か植置て神垣にかはらぬ色を見る真榊

桐

秋といへは袖のなみたの露よりはもろき（さ）は桐の一葉也けり

柏

露涙ふる柄小のゝもとかしわれしなけきをいつか忘ん

鶴

思ふそよ子を思ふてふ夜^{*1}の鶴の鳴音につけて深き恵を

鷺

夕からす声のみさはくねくらにもまた色暮ぬ森の白鷺

雞

月も漸影しらみゆくやまもとに鳥のねしきる里の遠近（36才）

*1 都「け（ふ）」。

鳩

雨になる空もしられて鳩の鳴く片山かけの暮ぞ淋しき

鶉

風あれて鶉のゐる岩ほこす波にぬれて翅をほしやかぬ覽^{*1}

虎

こゝろあれなうへたる虎も親のた（さ）めさらにおしまぬ身には恐^{*2}
て

馬

こゝかしこむれてそあさる草青き野飼の駒も今はなつきて

猿

あはれ也そこはかとなく暮ふかき山のこすへにましらなく声^{*3}

猪

消し世を今もふす猪のこととはにしたふ涙は露と乱て^{*4}

牛（36ウ）

*1 都「らん」

*2 東大「恐て」、都「恐れて」

*3 都「す」ゑ。

*4 都「（と）わ」。

めぐり来て今年の秋もなけきつむたくひとやみんうしの小車

鏡

しのふそよますみの鏡うつり行月日に添てませしその世を

衣

鳥羽玉のよるの衣をかへしつゝ見はや夢にもありし面影

枕

なき影の見えはたのまむ露たにはかなき夢の枕也とも^{*1}

蓆

はかなしな法の教を聞てたにさめぬ浮世の夢のさむしろ

箏

聞たひに音そなかれけるむかしおもふ宿の松風ならす爪琴

鐘

別にしむかしの夢はさめやらて日ことに聞ぬ入相のかね（37才）

*1 「に」も「欠字か」。

灯

いたつらにまとのともし火かゝけしに雪をあつめしためし思へは

舟

見るかうちに風にまかせて行舟のあとなき波のあわれ世の中

書

誰も今あふかさしめやかしくくもふみに残せる古のみち^{*1}

弓

大方の秋たにあるを梓弓かくす／＼もけふは悲しき

通昭録卷之(37ウ)

*1 都「(せ)し」。

通昭録卷之三十四
石馬集卷之六

伏見宮中務卿邦長親王の御姫、此宮と申は大樹家重公の夫人なり、東都隅田川にて詠し給ひける

物おもふ身にはあらねと隅田川名もなつかしき都鳥哉

月不撰所 東園中將基賢

すむ月^{*1}のみるめにかける宿もなしかくこそ秋の須磨も明石も
なみのうへ は(欠) のつきすまもあかしも秋はかくこそ

朝霞 已下九首能題^{*2} 二階堂省行

さし出る日影も春に三笠山霞む朝けの空そのとき

山家鶯(38才)

*1 「法皇御添削」(頭注) 左脇が添削の語句。

*2 都「能」は欠。東大、不明。

時わかぬ松の戸ほそも春きぬとけさおとろかす鶯の声

残雪(欠)

春は猶花にそまかふ朝霞にほへる山の雪のむら消

梅風(欠)

吹とてもちらさはつらし梅の花かをのみさそへ枝の春風

初逢恋

恋々てかさね初める小夜衣いまよりものうきにかへすな

別恋

又いつと契もあへず別路の涙にむせふ衣々のそら

幽径苔

とわれしの誰かかれ家そ一すちのみちもこけむすおくの山かけ

眺望

ほのみゆるもろこ（は）し舩も月のもとの浪たえぬよをしたひてや
よる（38ウ）

名所旅

旅衣ゆふこえ暮てすゝか山ふるさとおもふ袖そつゆけき

掛絵の賛

冷泉為村

苔のむすいはをも青き淇澳のみとりの竹の茂りあ（お）ふかけ

雪

二宮政勝 次下六首

都にははるゝ時雨の雲間よりしろきを見れば雪の大ひへ

寄枕恋

かわしつる名残ゆかしくかきなてゝまたのちきりを枕にそとふ

雁

秋来ぬとほたるやそらにつけつらんもへしあしへにおつる雁金

鶯

花の色もあけほのいそく梅枝に声しらみゆく春のうくひす^{*1}

時鳥（39才）

*1 都「鶯」

ふるすいつるたよりをちかみよそよりはやくもきその山ほとゝき
す

川月

よそよりはてりそふ月の桂川ひかりを花と波にてらして

川月

まちいてゝかけ見る水の音までも月にすみゆく秋の川つら

雁狩

とか／＼にもとめくらしてかり衣かたみに今日の多ものくらへん

寄川恋

年もへぬ人の心はあら川のあしきいらへにおもひしつみて

春川

二宮政勝 以下二首

みなかみにあらしふくら（欠）し大井川いせきにかゝる花のしら波

里梅

名（多）もしる（ろ）く咲や梅津の里つゝきかつらをかけて匂ふ春

風（39ウ）

*1 都「行」

神無月廿日余り、小倉山二尊院に詣て、定家卿の山荘時雨亭の
跡を尋て山に登りしに、峰の紅葉色付き詠めもあかぬにつれな
くあらす山風に、降くる時雨はけしく侍しかは、此山荘の下に
雨を凌侍る、軒の雫も見捨かたく侍れとも、其道に至らされは
歌よむ事もなく、むかしの事共思ひ出てゝ麓に下り侍りし門前
の紅葉色つきて見えしに、案内の者昨日までかく赤くは侍らさ
りしといふによめる

平瀬 権八

昨日まで色薄かりし紅葉はのけふは千しほに染出にけり

日もすてに西山にかたふくにより、かへる道すから時雨のなら

ひ晴つくもりつ定なきに（40才）

*1 都「あま（り）」

*2 都「事」とも

梅津の里に來り侍しに雨いとふ降り風強く侍りしかは、暫賤の家に
雨を凌て

さなきたに夕の時雨淋しきに片山里の柴の戸さしは

水辺（鳥）螢

赤崎貞幹 四首同

月はいま（戸）出てもうとき山水に猶かけとめて螢（鶯）飛かふ

暁時鳥

時鳥なれて（欠）も名残や有明のかけしらみゆく空に鳴（侍）らん

鵜川

夕月入ぬる後や松浦川七瀬の淀にうくふねとゝめて

旅泊

波枕うきをさこ（欠）そといひよりて今宵かたらふ友船（松）もかな

澗底

二階堂省行

月かけはいたらぬ谷の下水におのれてらして螢飛かふ（40ウ）

*1 東大「なれても」の「て」ミセケチ。

十五夜月 下 首同人

寺山用央

高き名を思ふ心を光にて月も今宵は澄増るらん

十五夜月雨雲にへたてゝ光もわかす侍りければ

今宵月晴ぬなけきの恨までかさねてふかき空の雨雲

なへて代の恨なるらし今宵とてめてなむ月の雨になる空

九月十三夜

愛そめし御代のむかしもかはかりや月はさやけき光也けん

さやけ（て）さもむへ後の名の光そと誰も今宵の月やみるらん

十三夜の月も雨雲にへたてければ

雲はれぬ恨もふるし後の名の今宵待多し月を隔て

雲の絶間よりほのかに月の見え侍りければ

立おほふ雲の絶まにほのみるもあらぬ今宵の長月の空

月前星（41才）

*1 都「間」

それかとはほのみえなからすむ月に光けたるゝ星の数々

月前萩

さらてたゝ月を見るたに淋しきをなとあやにくの萩の上風

寄月変恋

人そうき又と契てみし月の影はその夜にかわるともなし

月前風

吹はらしちりもくもらす今宵しも心有ける月のさよ風

十五夜月

*2 喜界島にてよめる

見ればみし面影なれや今宵月千里の外も光かわらて

山家月

世離れてすめは今宵の月たにももる影うとし山の下庵

月前鐘

名残なく誰にねよとて月影もまた更ぬ夜に鐘ひゝくらん (41ウ)

*1 都「けたるゝ」の右傍に「本ノマゝ」と注記。

*2 都「嶋」。

夏月

久峯 查

夏の夜のすゝしくすめる月影を詠み尽さてあくる東雲

浦月

堀興貞

なをめてゝ月の光も清見潟海ふく風にちりも残して

久方君のめくみにあひぬるを謝せんと来りけるに、帷子を給ひ

ければ

村田 平四郎

うれしさの身にあまりぬる唐衣かさねゝのふかき恵みに

樺山久智君東におもむ(ひ)き給ひける前の夜、伺公してよめ

る

寺山用央

のとか成る春日の旅は旅ならてあかて越なん道の海山

行路雪

村田

ふる雪に袖打はらひのる駒の足も休めす行く旅路かな

東風暖入簾

一宮政勝 以下四十首 (42才)

あさ日さすみすのあみめをもりくるも袖さむからぬ春の初風

初春待花

昨日けふ木のめもはるのはつかせに俤にほふ花そまたるゝ

霞添春色

けさ見れは色とりそへてきのふより匂ひもふかくかすむ山まゆ

梅花盛久

うつろはてはなのさかりも日数ふる梅や千年の春おしむらん

故郷梅花

住すてし軒端をとへは梅の花あるしかほにも匂ふ故さと^{*1}

梅近聞鶯

梅かほる窓の鶯はる告て花になく音やおのかことのは

春風解氷

氷のしみきはのとかにふきかゑてなみの花みる池の春風 (42ウ)

*1 都「郷」。

毎年待花

しゐて(かく)まつ心はいつの春よりかいそかぬ花のうへにそひけ

ん

花下送日

咲しよりあかぬ色香に明くれてけふやいくかの花の下臥

花下忘帰

日にそひてまさる色香にふるさとのほるをわするゝ花の下陰

里紅葉

とはゝやれたかすむ庵そ一むらの紅葉色こき岡の辺の里

寒夜月

置まよふ霜に光をさしそへてこほる真砂の月のさむけさ^{*1}

松雪

埋れし梢をわたる朝風に雪ふきたてゝくもる松はら

暮村雪 (43才)

*1 都「さむけ」き」。

ふみわくる人も見へけり山里の雪に友まつたをやとふ

早梅

鶯も来なけ垣ねの梅はとく咲てはるまつ花のかたへに

歳暮

けふそきぬ明日はといひて何事もたゝあら(欠) ましに年そ(は)
暮ぬる

聞恋

何とまたとひやきくへきいひさすも心にかゝる人のおもかけ

寄鳥恋

恋わひてひとりぬる夜の鳥かねをいつかは浮になしてきかまし

寄鏡恋

思ふそよ手になれてしも益鏡人の心のうつりやすさを

寄延恋

偽をいく夜かさねてちりならぬうらみもつもる閨のさむしろ(43ウ)

*1 都「見」え」。

*2 都「春」。

*3 都「筵」。

名所恋

たのめ(かふ)てもとわねはいかに住吉のきしなる草やねさしそめ
けん

旅行

ふるさとにかわる野山を見るにこそ道ゆく旅のうさもまきるれ

庭鶴

千世もけにへぬへき鳥か庭広み真砂にたてる鶴の姿は

月前鹿

二階堂省行 下三首同

夜よしとて月ゆへむかふ峯に又声もさやかにおしかなく也

神冬時雨

いとはやも冬立空のしるしとや雲の一むらけさ時雨らん

忍恋

忍れは只かり初の世かたりも心おかるゝ中そくるしき

八月十五夜

有馬純暉 下四首同(44才)

*1 果図、東大は「ふるさと」とする。

*2 都「鳴なり」

名に高き秋の一夜の月澄てくらぬ御代に仰く嬉しさ

また雨降けるに

雨雲の立隔ても高き名はよにもくらぬ望月のかけ

九月九日にも雨ふりければ

雨雲の恵みにいとけふは猶あかす栄ふるきくの色々

九月十三夜にも宵のくもり更てはれければ

宵のまのうき雲晴れてたくひなや更て名にあふ長月の影
治まれる御代のしるしに長月のなにおふ影の更て澄らし

大信公の恵にて世を過しければよみて奉る

御佛の恵みなりけり朝夕のけむり(る)もたえす立る光りは

頭挿花

一階堂宣行 以下同

昨日けふ盛しられて桜花行かふ人のかさゝぬもなし（44ウ）

庭上落花

さそへとも庭の春風長閑にて花も匂ひも木かけにそちる

幽栖春月

花あれと人にしられぬよもきふも月は入きてかけそかすめる

春草

霜かれのこそ垣ねもわすれ草また春浅き緑なからも

首夏

散行をおしみし花の春暮て若葉すゝしき夏はきにけり

遠山新樹

春にみし遠山眉もわかはけふ木々の緑におもかはりして

月前郭公

さやかにも鳴て行也時鳥月は雲間に有明のこゑ

麓納涼

夕すゝみ麓の木かけ問よれば秋かと袖に山風そふく（45オ）

初秋月

末とをき光を空に見を初て雲間ほのめく秋の三日月

薄似袖

岡辺行遠万人のまねくかと見しはおはなか袖の秋風

月出山

見るかうちにほのめくかけもあらわれて山のはのほる月はさやけき

閑山見月

ましらのみ稀に声してすむかけも空ゆく山の月そさひしき

湖上月

松ならぬ月のかつらの一もとも又たくひなき志賀のからさき

月照古橋

すみわたる月に問はやかけしよりいく世の秋かふるの高はし

鶉追善（45ウ）

露消し野辺にうつらの床しめて鳴も三年の跡したふらし

寢覚鳴

秋遠き沢辺の庵のねさめには猶うき物か鳴（鴨）の羽かき

菊満庭

匂わすは庭に満ぬる（り）霜と見てさらにや菊の花をはすれん

閑庭菊

此ころは色香多ならず咲菊の花にやつれぬあさちふの庭

菊の盛なるとて一枝手に取らせければよめる 盲人 相良寿貞
手にふれて見れば見し世の忍はれて心に菊の色そわかるゝ

三十三回忌によめる

よみ人しらす

おもひきや三十三年をなからへて今日なき人の手向せんとは
ある人いものなく也しによめる（46オ）

*1 東大「す」と並記。都「す」

き多ぬとてたえぬなけきもことわり（る）やまたなき草のはらからの露

餞別

赤崎貞幹

あしへよるしとふはしるや友鶴の雲井はるかにかける翅を
今よりは雲路の雁にことゝはん人の玉章かけてこしやと
旅枕いくよの夢かふるさとの山路の花をわけまよはまし

逍遙院殿

釣の糸の餌をこふはしみよる魚の心も人のおなし世の中
よし露の身をしやとさはわら（ゝ）むしろ竹のすかきもさもあらは
あれ

正成の墓に詣てゝ

田浦検校

身はこけの露と消てもきへぬ名の残る（か）を誰も忍はさらめや
須磨浦にて

かつきする身になりてたにすまの浦の月のみるめをしはしからめや

（46ウ）

*1 都「花」に。

一條殿

相生の松のみとりもけふ更にいく千代ふへき色を見すらん

近衛殿

君も臣も心あはせておさむてうよのこゑしるす庭の松かせ

菊亭殿

秋津すの外まてなつく国の風松にうつして聞をはらし

徳大寺殿

ふかみとり千代に八千代の色そゑてけふまちゑたる庭の玉松

尾張信雄

亀のうへの山也けりな庭ひろみ池の島ての松の木高き

君も人もけふを待ゑていかふ也かねて千年を松の木の間に

右飛鳥井殿

四辻殿（47才）

*1 都「て」ふ。

*2 都「松」風。

*3 都「そ」へ。

やくましる君かよはひもさゝれ石のいはほの松の千世の行すゑ

西園寺殿

かきりなき君か八千代やこもるらん立そふ庭の松のみとりに

勸修寺殿

世々をへん君かめくみのふかき色を松のみとりにかけて見す也

大炊御門殿

ことさらのしらへにけふは松風もこたへにけりな万世いのこゑ

中山殿

けふよりはうてなのたけのよゝかけてきみたちなれん夏の松枝

烏丸殿

うこきなきよゝのためしを引かふるいはね（ぬ）の松の色はかはらし

日野殿

天地もうこきなきよにあひおひの松にお松のしけりそふらん（47ウ）

* 1 「松にお松」ママ

久我殿

天地のめくみもそひて君か代の（に）常盤の色を松やみすらん

鷹司殿

けふよりもしきりの松のかけにしもかそへん^{*1}君か千世の行すへ

家康公駿河内大臣殿

みとりたつ松のはことに此君の千年の数をちきりてそ見る

大和大納言殿 秀長

かけてけふ御幸を松の藤（葉波）のゆかりうれしき花の色かな

慈明院

ふかみとり立そふかけは雲井まで千年さかへん庭の松枝

^{*2}庭田殿

植しより君か千年を契てや松にかわらぬ色を見すらむ^{*3}（48才）

* 1 都「かそゑ」。

* 2 都「庭田殿」棒線にて抹消。

* 3 都「らん」。

正親町殿

末遠く君か見るへきときは今千年ふかむる庭の松かゑ^{*1}

廣橋殿

庭にまつ二葉の松をうへ^{*2}置て君か千年の行ゑかそへん

北（小）条式部

君かへん千世のねさしとかねてより植しみとりの松の木高さ^{*3}

豊臣秀次

おさまれる御代そ（は）とよわら松風にたみの草葉も（そ）猶なひく也

菊亭殿

けふよりの君か千年にひかれてや松もみさほのかけをならへん

花山院殿

かきりなき君かよわひにひかれなはみきはの松もときはなるへし^{*4}

三条正親町殿（48ウ）

* 1 都「千」歳」。

* 2 都「植（置）」。

* 3 都「（高）き」。

* 4 都「齡（に）」。

時にあひてさくふる松のちとせをは君か為にも契おかまし

吉田左衛門

よるひるの神のまもりに庭の松ときはかきはのかきはの梢なりけり

院御所誹諧歌 享保八年秋

乃

院御製

老乃身乃腰乃乃ひさる杖つき乃乃字乃なり乃形乃みして^{*1}

は

通躬

はは宮はしはは里はたすきはははは字はなりははきにはこして

の

実陰

丸きののの字のなりに世の中の人心の丸きのそよき

ノ

風早実隆種

かたかなノノ字ノなりににたりノは笹ノはノ絵ノ墨ノ一筆

葉月の末つかた某の君山荘に物し給ふ（49才）

*1 都「字乃」棒線で抹消。

をんともつかふまつりけるに、歌よめと仰ことありければ

赤崎貞幹

ふかゝらぬ山里ながら軒近き松の風の音そ世に似ぬ

初五文字制のことは也とそ

おのつから砌にをふる秋萩の花もてかこふ山の下庵

其わたりこゝかしこ見めぐらして

住や誰れ一むら竹の奥の庵うきふししけきよをしらすして

入日さす遠山もとに里見えてゆふけの煙なひくさひしき

豊なる秋を待^{*1}てわさ田かる賤か心もさそなうれしき

帰るさの道すからおもひつゝけけらし

夕からすねくらたつねてさはく也かた山はやく陰くるゝ日に

千種さく花のゝ露の色くれて月まつ虫や声しきるらん（49ウ）

*1 都「へ（こ）」。

兼利自記

按に、諏訪兼利は、寛文七年国老に任し同十一年致仕す、泰清

廟の薨は寛文十三年なり且兼利 泰清廟を哭する歌数十首あり

其序に東の御いたわりせちにまし／＼十にひとつおこたり給

ふまふ聞^{*1}へければ云々^{*2}

吾妻かた花は嵐のおとつれに心つくしの袖の春雨

又云東より、けふそ御からの此国にいまそかると聞てよろほひ
まして、道の辺に畏るなといへは、此巻を兼利自記といへるは
非也、然とも往々にいふを以て二宮政勝に問ふ、政勝云、予も
往年衆人とは是を論して非とす、疑らくは兼利の子仲右衛門兼郷
の自記なるへし、通昭其説に左袒す。（50才）

*1 東大「まし（ふ）」。

*2 都「え（け）」。

飛鳥川の渕瀬、つねならぬ世のならひ、朝に生れ夕に死し、十
と二のわたりをめぐるとかやしらす、いつくよりか来りいつへ
かさる、おほふの外なき天地の中に生者必滅の理のみを、とふ
ときもいやしきものかれかたき、されは前の侍徒の君はいまた
わか世をたにしろしめさゝりしかと、あまねきいつくしみは薩
隅日三くにの外にしるゝ広き、御めくみは日に向ふ高知穂の陰
よりもしけくおわしまして、世のかゝみとも成給ふへかりしか
とも、寛文十二師は世月の末より何となくあつくし給へは、御
くすり御すはうたゆみなく、人々天にあふき地に伏て、いとは
やくおこたり給わんことをねか（こ）ふといへとも、日にそひ
御まみ（50ウ）

たゆく成ゆき給ひ、医のはかせけんさの大とこそそのしるしを得

す、終にあくる居待の月にさそわれて雲かくれ給へは、四十二とせの御齡も夢かとはかりたとらる

一世たにてらしもはてすあちきなく雲かくれ行月をしそ思ふ

かくてなき御からを守りいれとも叶わね世の習なれば、おなし末の二日ほのくらき夜のほとに、大園寺のかたわらにゐて奉りむなしき煙となんなし奉る

おもひきや聞てもくゆる鳥部野の煙を君かうへに見んとは

さて有へきにもあらねは見捨奉りて、かへさのみちあはれともいはむかたなし、やう／＼夜半も過らんと思ほとさし出る月いと、朧^{*1}けなり

朧^{*1}にも月は照せと雨と降る涙に行もやられす(51才)

*1 三本とも異同はないが、一首として字足らず。

春もやゝふかく成まゝに、なへて世は花の盛と聞て

思ひあれは春ものふ(に)かくたれ籠し身にはこそ成花盛哉

御寺の庭に一本の花盛なるをみて時を感じては、花にも涙をそゝくとは、かゝる折にやとお(松)ほえて

見し人のあとに残りて桜花幾代涙の種子とならまし

同じ所にて鶯の声頻なれば、別を恨ては鳥に心をうこかすと云古事をおもひ出て

鶯もつゐの別を恨てや君かあたりをさら(し)て鳴らん^{*1}

又その所にて花のちるを見て^{*2}

散花はあらし待間も有物を何そはもろき人の世の中けにもひろき人の世成かし、此御表かけても思ひよらをさりし

頃あひ、伴ひ人ふたりみたりいひ見して、夕雲雀待山花など云^{*3}
題にて和歌の(51ウ)

*1 都「鳴」覽。以下同様。

*2 都「散(る)」。

*3 「交(して)」の誤写か。

浦のмокつを書、難波津のよしあしをわかたはやなんといひし事も世いたつらと也^{*1}しかは、思ひつゝけて申遣ける

よしあしをわかむといひし言の葉を今は涙のたねと社なれ

かへし

福崎林貞

夕雲雀山の桜も此頃は泪くもりてことのはもなし

やう／＼弥生になりぬ御忌の日御寺にまうてゝ

二月のあはれ覚えてめぐりおふ三月のけふもぬるゝ袖哉

御寺に詣てける道すからほとゝきすを聞て

ほとゝきすしはしかたらへおもひやる死出の山路の行ゑ問まし

春の行ゑもしらぬまに弥生も末になれは

なき人を忍ふなかに暮て行春の名残も猶^{*2}そかなしき

更衣のあした(52才)

*1 都「なり」

*2 「悲(し)」

花衣ひるよしもなく春暮てぬきかふる袖を又やしほらん

日数ふるまゝにけふは卯月の八日、七々日にもなりぬ、日もこ

そおほかるに仏誕の日にめぐりあひて経仏のわさおこなわる
も、すく世いみじうましませししなりかし、御寺にまう
てゝ

たきものゝ煙にかへれ紫の雲にかくれし人の面影

弥陀の名号を冠に置いて

なきたまの道しるへせよ三のよをあまねく照す法の灯

むかしより流うへせぬ法の水の蓮に浮へ露の玉の緒

あさからぬ四十又八の願あり法の誓に君はもれしな

みのよそに(う)みしは現か鳥部山おくれ先立つゐの煙を

誰か又嵐の末は(也)残るへき世はあたし野ゝ露の身なれは

ふたつなき法の船長しるへしてとく渡さなんみたの御国に(52ウ)

*1 都「くれ」カ

御遺骨は御国に納め奉る事なれば、卯月半、江府を立せ給わん
とのもよふしあれば、又此府に來らんもちこふはたよりなきこ
とをおもへは、此ほと和歌の師と頼し岡元宗好かかたへ申つか
わしける

かへりこ(欠)む程こそしらねわかの浦の綱手絶にしあまの小舟は
かへし

おもひやる心に絶し綱手縄わかの浦ふね漕わかるとも

又吉田貞春のかたへつかわしける

おなし世に有とし聞はわかか浦に帰らん波を哀とはしれ

かへし

へたつとも聞ほとあらし此うらに又帰るへき和歌の友鶴

卯月十八日兼て定る日なれば築紫のかたへ趣き給ふ護持の大と
こには大圓寺養昌寺供奉の御かためには島津(53才)

*1 都「(わ)た」

*2 都「赴(き)」。

の久嶋を始として、ませし世のことく前後を守護し奉らる昼の
まは物いまし給ふ事侍れは、亥の鐘を待へて、御寺を出させ給
ふ折しも月ほのかに出しかは

いさたまへ西のかたへとなきからをさそひ出るや武蔵のゝ月

道のへ田井に蛙いたふなきければ

あら小田にすたく蛙もなきたまのゆくゑしらはや侘てなくらん

行まゝに夜は五更になりぬ、螢の飛を見て

なきたまの行ゑをしらは飛螢雲の上まで道しるへせよ

二月の今宵こそ此世を立せ給ひしか、今日の今宵又築紫のかた
へおもむき給ふ事よ絶果させ給ひしも今の頃なんめりとおもひ
出しかは、しは鳴鳥の声なんとする、鐘の声も猶うらめしく覺
て

二月の(欠)暁の空をおもわすは嬉しかるへき鳥かねの声(53ウ)

*1 都「野辺」

*2 都「(ら)し」

*3 都「(事)も」。

*4 都「おも」は」。

明ぬれは十九日卯の刻計賀名川のすくにしはしやすらひ給ふ、
午刻ほとに、十塚につき給ひて御泊、廿日辰の刻はかり、十塚
を立せ給ふ、鴨立沢にて

かはかりに哀なりきやそのむかし鴨立沢の秋の夕へも

申の刻はかりに小田原に着給ひて御泊、廿一日卯の刻計に小田
原を立せ給ひて、雨のそふろふるに箱根をのほる。此山に住け
るものまかてゝ花を奉る、ましませし御世はかせきやうものを
こそ奉りしか、今一枝の手向はまの前の仏にこそと、たうとく
覺て

目の前の仏也とや心なきしつをも花を奉るらむ

此山はなき人のとをる所となんいひつたへしかは、君の行ゑも
なつかしく、さいの川原念仏声さなからかの国にいたかると覺
ゆ（54才）

箱根路や八重たつ雲のいつくにも君か行ゑを知人そなき^{*1}

其日酉の刻はかりに、沼津に着せ給ひて御泊、廿二日さわる事
あつておなし所にとゝまり給ふ

廿三日卯下刻沼津を立せ給ふ、明果ぬ夜のほとに、富士の雲計
空の上しも白妙なり

四方の山はまた夜を籠て富士の根の雲よりしらむ^{*4}暁の空
いつよりも富士の空晴ければ

白雲の上に晴たるふしのねの煙や雲のくまとなるらん

浮島か原にもなりぬませし御世には、年ことに此所にしはしや
すらひ給ひて、供奉の人／＼（し）に酒たまへ馬乗せなとして

御覽有しものを、去年の夏東へ下らせ給ふ時を御とちめとは今
社おもひしられぬ。

去年の夏君か分こ（て）し道芝のあらぬ露ちる浮島か原（54ウ）

*1 都「多」も。

*2 都「計（に）」。

*3 都「程（に）」。

*4 都「（ら）ぬ」。

*5 都「成（ぬ）」。

*6 都「御」代」。

ふしの川去年の洩瀬にかはりければ

常ならぬ世ならひてや昨日みし洩は瀬となる富士の川水

清見か関て

旅衣やつれ果とも清見潟猶しほれとやかゝるうらなみ

田籠のうらに潮くむあまを見て

田子の浦や潮くむ海人に身をかはかゝる涙に袖はしほらし

三穂の松原を見て

霞むへき頃ならなくに霞也涙曇りて三穂の松はら

申の刻江尻へつかせ給ひて御泊

廿四日辰の刻、江尻御立、宇都の山をこゆるに

思ひとけはうつ山の山辺の現とも夢ともわかぬ世そあちきなき

申の下刻金屋へつかせ給ひて御泊まり

廿五日辰の刻金屋御立諏方の原よりのほり（55才）

*1 都「諏訪」。

てふしをかへりみて^{*1}

いつかまたかへり来て見む白雲の上にうへなき雪のふしのね
菊川を渡りて

よそにこそかゝる衣を菊川のなみに我身をしほりぬる哉
佐夜の中山にて

草も木も哀とおもへなきたまはた二度こへぬ小夜の中山
浜松にて蟬のなくを聞て

聞もうし浜松かへに鳴蟬のからをはみせぬ葉かくれの声
申の刻浜松へ着給ひて御泊

廿六日辰の上刻浜松御立、今切を渡給ふ、浜名のはしの跡をた
つねて

東路やは浜名の橋は絶ぬれと渡すや法の御船成らむ
暮ほとに赤坂へつき給ひて御泊（55ウ）

*1 都「見（こ）」

廿七日の辰の刻赤坂を立せ給ひ、申の下刻ほとに鳴海へ着給ひ
て御泊

行すゑよいかななるみの浜つゝらくるしき世々に住渡りなは
廿八日辰の刻、鳴海御立、美濃路におもむき給ふ、清州とおこ
しの間道辺に六角堂あり、去年の夏、東へ下らせ給ふ時、此堂
にしはしやすこひ給ひし事を思ひ出て

今も君かやすらふかたの宿なれや六のちまたの道もまよわて

同しあたり時鳥いとふなきければ
なれたにも人のあわれを身にしめてこゝらなくらん山ほとゝきす^{*2}

申の刻ほとにおこしへ着給ひて御泊

廿九日先番の役にて朝またきよりおこしのすくを出て、おこし
の大川をわたり、所の者にあなひさせて此渡りの事とも尋しか
は、此川上五、六（56才）

*1 都「あ」は。

*2 都「し」み^カ。

町を経て古の道有り、おひつるいつおよ（も）ひの橋池田の宿
など云所とも侍れとも、古の道は遠しとてとなん、此道を通る
（り）と語りしこそ世にたゝゑていと侘し、されは白き糸のそ
まん事をかなしみ、道のちまたのわかれんことを歎きしもかゝ
るたくひかと覺て

下る世の人の心に遠くとも猶いにしへの道やたとらん
ほとなく濃州青野か原を通る、此所に長範か物見の松とて年経
たる松あり、去年の夏に下らせ給ふ時、此松陰にしはしやすら
ひ給ひし事を思ひ出て

白波の立よる松の常盤にも習わぬ君か身社はかなき

申の刻計開ヶ原へつき給ふ、此あたりは去ル慶長の頃家康公と
石田三成と合戦の辻なれば、里人にあなひさせてむかしの物語
とも聞侍し、中にも我君の（56ウ）

*1 東大「た」く

高祖義弘の朝臣石田方へ組して、虎口の難をのかれ天下に誉を
取給ひしとつたふるもいとめいほくあり

なひきふす野辺の草木の秋の霜消にし跡の風か身にしむ

五月朔日雨ふれと辰の刻はかり関か原御立、関藤川をわたる、
此川上に藤川と云村有り、むかし定家卿住給ひて結題百首の御
詠有りしと里人のかたりし

歌人の住こしかたの流れをも誰かはくまん関の藤川

道すから戸さゝぬ松不破の関なれといひしは此あたりとなん語^{*1}

しまゝ不破の関屋の板ひさしには昔日鴨^{*2}の長明たにも詞結ひか^{*3}

たしとてよますなりにき、況や下官ときは思ひも寄らすして
もうつ、ほとこのふ醒井^{*4}のすくに着せ給ひてしはしやすらひ給

ふ、醒井(の)水をむすひて

結ふ手の雫を清み醒井の水をは君に手向社^{*5}すれ(57才)

*1 都「(語)り」

*2 三本とも「鴨」。「鴨」に改める。

*3 都「給(ひ)」。

*4 都「醒か井」。

*5 都「こそ」。

やう／＼行まゝに摺針峠の茶屋にやすら(欠)ひ、去年の五月
半此所にしはしやすらひ給ひしに、五月雨晴つ曇りつ竹生島も
遠近に見へし^{*1}かは思ひ寄せて

見るかなかに遠さかるなり呉竹の生ふる島ねは雨にかすみて

とよみ侍りし事も今は御かたみのやうにおほえて
五月雨のふるにつけてもなき人の面影さそふ鳩の海山
老その森にて

君かふる四十余の二とせも老^{*2}その森のなにや懸まし

鏡のすくを通るに

あきらけき御代の鏡の山なれは向ふ程たに涙くもるな

野路の篠原にて

しほれこし袖の涙の露分て行もやられぬ野路の篠^{*3}わら(57ウ)

*1 都「え(し)」。

*2 都「(老)鮒」

*3 都「(篠)原」

野次の川を渡るに

かひなしとおもひ捨ても幾回か袂にかゝる野次の川水

守山のすくを通るに

たえず降涙の雨のもる山は袖よりつたふ木々の白露

同じ日の暮ほとに、ゑち川に着給ひて御泊、

二日の辰の刻越川を立せ給ひ、未の刻大津へつかせ給ひて御

泊、粟津^{*1}ヶ原を通るに

別にし君には終にあわつのゝ露分衣ほす隙そなき

三日辰の下刻大津御立、あふ坂やまをこゆるに

音羽山音に聞つる哀^{*2}まで今身の上にあふ坂のせき

巳の刻計伏見につかせ給ふ、かり殿へも入らせ給はすして直に

川舟に召され、其夜は京橋の辺に纜をかく

四日曙に難波の郷に下り給ひてすくに大船に（58才）

* 1 都「か（原）」

* 2 東大「衣」^カ。

うつらせ給ふ

五日同じ所におわします、玉の臺にませし世は菖蒲荇ふく御ことふきおもひ出るもいとかなし

菖蒲草^{*1}かりふくけふのことふきも今は難波のうらめしのよや

六日曙に難波の浦より御舟を出し、心つくしの浪路におもむかせ給ふ

難波かたいと心をつくせし船真帆引初て行濤路哉

長門のもつれにて月いと面白かりければ物の名に

影清き月の光になきたまもつれてや空に澄のほるらん

肥前の樺島にて五月雨うちしきりて日数ふれは

湊船かりふくとまをけふ幾日とらて程ふる五月雨の空

同じき廿九日申の刻計に我國の内、向田へ御船着て（かく）称

名寺と云御寺へ入給ふ

六月朔日日数ふるまゝにけふは百ヶ日にも成ぬ（58ウ）

* 1 三本共、「蒲菖草」。

供奉の人々とひくらし奉る

夢かとも現ともなく月日経てけふは百日に成そかなし^{*1}き

巳の刻はかり向田を立せ給ひて、申の下刻ほとに伊集院に着せ^{*2}

給ひ雪窓院に入せ給ふ

二日昼の間は物いまし給ふ事待るとて、酉の刻計に伊集院御立、いとくらし夜もすから道の辺にほたる幽に飛ければ、東を立せ給ふ夜の螢、筑紫のかたまてしたひやきぬらんとあやしくて

飛螢心つくしの果までも君か行ゑや慕ひきぬらん

その夜鳥もしはなく頃、寛府へ入せ給ふとも、玉の臺をよそにしてすくに福昌寺へ入せ給ふ、されは東のかたを夜半に出給ひて夜半に我國につかせ給ふも、常ならぬ世のためしとそ覚ゆ（59才）

* 1 都「悲（し）」

* 2 都「程（に）」

五日例の作法に納め奉るとて、天津日影の赤ねさす頃、又煙となんなし奉る、さりぬるは日々にうとしと杜^{*1}いひ伝ふれとも其時の心地して

難面なきも身は残りゐてむくらしき二度つゐ（の）の煙をそ見る^{*2}

同じ日より十二日まで中陰の御法取まかなひ、法華千部誦誦し

給へは、今は妙法の蓮臺にそまし／＼給ふらめ

立のほる煙の末も紫の雲とな引西の山のは

秋立ける日

夢なれや花の袂に別にしなけきの（欠）本ははや秋のかせ^{*3}

明れは延宝二年御一周忌にもなりにしかは、二月十六日より同

廿二日まで御弔の事取まかなひ給へは、又其時（59ウ）

* 1 都「こそ」

* 2 「むくしき」か。意味不明。

* 3 都「風」。

の心地して

めくりあふ月日もはかな二月や花に別しけふと思へは

卯月廿六日夜半打過る頃、福昌寺へ炎上おこりて時の間に灰燼となりけれども、御霊骨はつゝかもまします、河村氏右衛門出し奉りけるとそ

五月廿六日御霊骨御寺を出させ給ひ、高野山に趣^{*2}せ給ふ、其日^{*3}くれほとに向田の称名寺へ入せ給ふ、護持の大そこには一乗院西寿院供奉の御かためには、嶋津の久(名) 馮を始として数十輩前後に守護し奉る

同廿七日御船にめされ^{*4}廿九日船出し給へは、風波おいて文月廿七日、難波の津につかせ給ひて、大坂の御かり殿へ入せ給ふ

同十七日高野山へおもむき給ふ、寅の刻はかり大坂を立せ給ひ、河内国三日市と云宿にしはしやすらひ給ひて、十八日あけ

ほに東家を立せ給へは(60才)

* 1 都「民(右)」か。

* 2 都「赴」。

* 3 都「暮」。

* 4 都「召(さ)」。

紀州を渡る此川なん吉野川の流れと聞は

みよしのゝ花の雫の匂ひまで汲てしらるゝ紀伊の川水

やう／＼坂をのほりければ紙屋と云宿に、高野より大とこ達あ

(お) また出あひて、何くれともてなし給ふ、此所をも過てゆくまゝに四寸石といふ難所あり、身ひとつからふして通りければたわふれに

そはたてゝ身をする墨の四寸石

ほとなく不動坂八丁つゝら折なる道を打のほれば、身は炎のことなるまゝ汗は滝のことし、しはしやすらひてたわふれに

山風もあつきはらわぬ不動坂

坂の上に外の不動有り、それより五六町^{*3}を経て内の不動^{是より内に安}を過て、午の刻計に高野山蓮金院へ入せ給ふ、しはし有^{不入と下札有}て法師五六十人はかりつとひ(60ウ)

* 1 都「あい」。

* 2 「あつき」か。三本共、「き」。

* 3 都「丁」。

て御弔の作法はしまりぬ、下官宿願ありて十八夜の月を待出て雲霧を麓になして澄のほる影も高のゝ山^{*1}のはの月

十九日三時の御弔五十句にて行われしかは、いととふとかり^{*2}し

廿日大曼荼羅供おこなわる、此山に名高き大とこ達五十人つとひて蓮金院門外より二行に備へ読経し給ふ、其跡に御導師青岸寺^{*3}檢校法印ひわた色の衣を着しな^{*4}かへに駕して行道し給ふ、そ

のさま常ならすいとたうとかりし、此山に法師職は碩尊^{すゑも}七人の内より七十以上の一老を青岸寺殿と号して、大師の役を勤給ふ、此人ひとりのみそ山中乗輿をゆるしけるとなん、午の刻法(徒)終れば、御遺骨(61才)

*1 都「(高)野」。

*2 都「(し)也」。

*3 「桔校」または「槽梗」か。

*4 都「(な)が」。

*5 「学」か。

奥院へおさめ奉らんとて、大とこ達あまた前後に備へ供奉の人は左右を守護し奉る、例のさはく¹に納奉りて読経し給ふに子規ほのかに音信¹ければ

なきたまの行多や空にしと(こ)ふらん声も高野の山ほとゝきす

又二度此山にまふのほりて拝し奉るへうも覚^あへねは、立かへらん道をもわすれて

君を今高野の山に送捨てかへる袂よかはきたにすな

いかに浮き契なればや三度まで君には終の別しぬらん

爰に又石燈炉二台をいとなみて一台は島津久馮³、一台は伊藤祐信を始として供奉の人々たひまつり、名字をきさみ入て立られしかは、くちぬしるし成かし

身はよそに埋みはつとも朽ぬ名は君かあたりを立もはなれし(61ウ)

*1 「おとづれ」と訓む。(安永九『早引節用集』)。

*2 都「(覚)え」。

*3 この部分に、左の頭書あり。

県図「按二久馬ハ島津大久馮九時ニニタリ、伊東信ハ五右衛門共ニ用人タリ」、東大「昭按二久馮ハ島津甲斐□□□(三字不明)時ニ国老タリ、伊東祐信ハ五右衛門にて(カ)時ニ用人タリ」。都是未調査。

抑高野山妙法院金剛峰寺は嵯峨天皇の御宇に、大師此山を開給しより以来、密教の法院絶すして、末代不易の靈地也。諸宗共に此山に遺骨を納めて、たうとみけるもことはりにこそ、大塔を中央にして、四方に三千坊室いらかをならへ軒をあらそへる事は、

九重の臺¹にことなし、大塔より奥の院三十七町^{三十七尊を表すとなん} 大橋

より奥は上なり、下の石塔教をしらす、中の橋御廟橋^{板敷三十七枚裏に三十七字の梵字あり。二字不知きゐわたることならすとなん}

を越て、大師入定のはすへは苔埋れ、軒端は松杉の落葉に埋む、森々たる有様は末の世の驕をいましめ給ふとそ、左に骨堂有り、貴き賤き共に爰に納め、右に一切経蔵有り、是石田治部少輔三成建立し給ふとなん、前には万燈炉堂有て、常に光たへす鷲の御山もかくこそあらめと覺ていたうとし、山中の宗派三ツにわかれ学寮派聖派行人派中にも(62才)
*1 「ことならし」の誤写か。三本共、「ことなし」。

学寮派こ(か)そ大師の法派は伝はりけるとそ、学寮の宗徒は雨にも日にも朱からかささをさしければ

ふるも照もさすか学寮朱からかさ

廿一日巳の刻計に、人々高野を立て帰らる、凡見峠といふ所より見かへりて

君います高野の山を跡にして心つくしに帰らんもうし^{*1}

その日三日市に泊り、廿一日曙に三日市を出て帰る道すからなれば、浜こりを取り悲嘆の涙をそゝきて住吉にまふて、亡君の御そうの末葉さかへ給はんことを祈る

君か末葉千代にやちよも住吉の松にもかゝれ北の藤波

其日の暮ほとに大坂へ帰りぬ、かゝりし所に、中將の君例ならぬ御心地ましますよし薩摩より告れば皆(62ウ)

*1 都「ん」と。

人おとろき、しうそうときて同廿三日船に乘しかとも、天気よからねは、文月朔日まで難波江にとゝまりぬ

二日難波江のうらを船出して、兵庫の津に着ぬ、又風波おはねは三日纜を解あへす、其中に陸にあかり爰かしこ徘徊しける、此所は寿永建武の合戦の辻なれば、語りつとふる事おほかる中にも、楠正成勅命にしたかひ忠義に身をかへ給ひしかは、なき跡をたにとふらはやとて所のものにあなひさせまかりしかは、湊川の北にあたりて田の中に松桜の二木を植て、其陰に五尺に足らぬ石塔^{*1}あり、けに高き名の唐土迄も聞へ、わきて武士の家に生れては此人をしたはぬはなけれども、なき跡は草露に埋れけるこそはかなけれ、生茂る草など引のけて(63才)

*1 都「有」。

皇の御代にかはりて捨し身のあとしも苔のなと埋らむ

あふきても猶あふくそよ武士の道にかしこき人のみさをを

此所を過て福原の里を見る、都をうつして花やか成しあたりも、人すまぬ野と成けるこそ世の哀も思出られて

百敷や九重の内も荒果て松の風のみふくわらのさと

それよりすぐに須磨寺へまうつ、道すから爰はむかし何かし^{*1}の陣所かしこは何かしの組打せし所なんと云ひ伝ふるも数多ければしるさす、漸行くまゝに須磨の里に来て

曇なく月をみるらんもしほ焼く海人にはあらぬ須磨の里人

此里を過れば高き所に月見の松、月見の御所同し所也、塩焼あまの住家も遠ければ、月も一きは澄まさらめと(63ウ)

*1 都「何」某。

覚ゆ、一の谷の内裏といふも程近し、光源氏の配所もまかけれはいつれの代にも雲のうへ人さすらへ来て詠給ふらん昔の哀も忍はれて

詠つる人しなけれはいたつらに月独社須磨の浦まっ

かく口すさみける内にほとなく須磨寺にもなりぬ、木立物ふりて人すむとしもなき山松陰に一字の堂有り、今額をかけて福昌寺と号す、住持を呼出して敦盛の画像を見る、寔に^{*1}寿永の春の花匂ふ計の袖の香も、今見る心地して懐旧の涙せきあへす、是なん直実か筆と云伝し、播州明石に住け(な)る松浦治郎左衛門吉高箱を寄進して蓋の中に、朽ぬ名の世々に残りて、うつし

絵に忍はぬ人はあらしとそおもふとそ侍りき、予も亦思ひよせて（64才）

*1 都による。景図、東大「空」。

*2 都「また」。

写し絵も匂ふ計に忍ふそよむかしの春の花の袂を

敦盛の持給ひし二の笛を見る、一は尋常の笛、竹に枝三ツ有故に小枝とも云なん、此竹弘法大師渡天の時（明）、鷲峰山より杖にして持来り、此土におゐて笛につくりかへし給へは、三ツの枝に青葉生しけるにより青葉の竹笛とも云侍しと也、一の笛竹はこまの国より渡りければこまの笛と云伝しとなん、松平周防守なりける家の石川作左衛門昌弘匣を寄進して、蓋の中にふかねとも音に聞えて笛竹のよゝの昔を思ひこそやれと侍りき、

予もたゞにはやみかたくて

身にかへし音に社残れ笛竹の世々に稀なる人の哀は

須磨の若木桜は光源氏此浦に植置給ふとなん花の制札あり、弁慶か書けるとそ（64ウ）

*1 都「（云）伝」

*2 都「也」。

*3 都「成（人）」。

須磨寺桜

此花江南所無也一枝折盜輩者天永

紅葉任例伐一枝者可剪一指

寿永三年二月日

と侍りし、いと優なる制札成かし

光たに君か形見に匂ふなる若木の桜千代経てもさけ

源氏の配所を尋ければ此のやふの中也といへは

心なき袖もしほれめさすしふる身をこりすまの浦のあた波

須磨の関屋のあとを見て

須磨の関ともるとなれば淡路島通ふ衝に誰かね覚ん

爰を過て浜辺に出れば、行平松有り、此松は松風村雨はらから

植置けるとなん

ちりうせぬ言葉のたねの松をうへて名さへ朽せぬ草のはらから（65才）

*1 都「（や）ぶ」

*2 都「ら（ふ）」

*3 都「み（る）」か。

盗人松といふ一木有、白波のたへすかゝれはかく名付けると

そ、去ル万治の頃かれけると聞えしかは

治まれる御代の例か白波のかゝる名にあふ松もかれにき

忠度のしるしの松を見て

行かれて花をあるしにかりねせし人の形見は松に残りて

二葉の松と云まつ有、一木の中にて葉は二木の様なれば、是なん男女の相にして相生の二葉の松てはいひ伝しとや

相生の二葉朽せぬ名に立て幾世経ぬらし須磨の浦松

其あたり名にあふ所々に行やられて、よそめに過てたそかれのころ兵庫に帰りぬ

六日兵庫の津を船出して七日備前国の内下津井に着ぬ、けふしも秋のめぐり来て七夕のちきりもたか（65ウ）

わしと覚て

そよ寒き浦風そふく七夕の契りも秋もめぐりあふ夜は

此所を下津井ともいひ下つゆともいへは物の名に

浦風の吹たゆむまや草むらにむすひ初にし秋の霜露

風波おはねは日数経て同じ月末の三日に我國のうち向田へ着て、同じ夜の月と共に旅の宿りを出山をこへ来れは^{*1}

むらきゑの霜かと思へて木の間もる月まで越る秋の山道

やう／＼行まゝに串木野わたりにて夜明けければ

忘れしな道の行手に鳴虫の声のかきりに明ぬ此夜は

おなし廿四日のくれほとに覺府に着て福昌寺の御墓に参り、此ほとのないきのとちめにかへり申せしも、飛鳥川常ならぬ世の

習ならんかは（66才）

*1 都「（二）え」。

紙ははた余計なる内に、かきりなき事を書のへられし、上目をいへは五日あまり六七十計、国は三十に近からん境をめぐり、見る物聞物につけて亡君のわかれをしたはれし心は神明仏

陀の冥にかなひ、天地の外にはせ過現未をこへし感歎は黒山の

鬼も伏し、安養の扉も開九品の蓮臺まの前に拝む心地するも此忍ふ草をかれはなり、さるはかたみ翁か涙の露のやとり也とて

世にまさぬ君をしのふの立草やなみたの露のやとり成らん（四行余白）（66ウ）

御庭に逍遙して

二宮政勝

世の外といはゝ岩木もやり水の流れを見るも其俣にして

杜若を見て

池水のゑもいひしらぬ杜若花の様々色を深めて

右二首壬辰の春樺山家当座

久（名）智君の少女郭公を聞て初てうたよみ給ひし時

五月雨にはねぬらすらん時鳥しはしもいそけ今の晴間に

喜入君のもとにて

二宮政勝

つくりなすみきりにつゝく海山はあかぬ詠そ世に類ひなき

八月十五夜名越恒篤君をとふらひてよめる

私云（去）君時罷蟄居

二階堂省行

望月^{重出}の今宵はよしやくもるとも又こん秋の光こそ見め（67才）

返し

名越恒篤

問ひ寄し人の情をみつ月に心のくまもはれてうれしき

寺山用央

さえ／＼（らし）て見せも聞せも身にそしむ荻の枯葉の霜の朝風^{*1}

富士

二宮政勝

月はまた西に残りて（は）ほの／＼と雲よりあくるふしのしら山

賤か家にはこふとすれと夕立のなかははぬるゝ^{*2}

冬くれは軒の山かき紅のそめて残れる色もさひしき

慶長五年治部少輔三成等追討の時、細川二位入道玄旨丹後国田辺城を逆徒にかこまれてこもり侍しに、此度かきりなるへきよ

しいひ（67ウ）

*1 都「露」か。

*2 「ぬるゝ」以下欠落。

て書置ける、さうし共箱に（を）入て

玄旨法印

もしほ草かき集たる跡とめてむかしにかへせ和歌の浦波

かくいひおこせたりけるを其箱の封をたにとかてまちけるに、

ほとなく敵敗北しければ、開つれのよろこひいひて此箱を其俣

返し遣わすとして

烏丸光広

あけて見ぬかひも有けり玉手箱ふたゝびかへす浦島の波

玄旨法印

浦島やひかりを添て玉手箱あけてたに見すかへす波哉

自ら其画像に賛す

遊女

かきうつす我かけなから此里を出てゆく身そうら山れぬる

角田川にて

清水宗川

渡し守もくれては見えず月ひとり角田川原の夜のさひしさ（68才）

長崎通好 二首

朝な／＼池の汀に立出（か）てゝ蓮の花のひらくるを見る

露を見て（る）ひとりなくさむ心より^{*1} 庭の草もはらは（わ）

す

浄光明寺にて

赤塚一遂

十かへりの半はすきてまたさかぬ花をは松の峰の古寺

草庵夜雨

山田有貞

軒つたふ雪ならずは夜をふかみ草の庵の雨やしらし

月前落葉

伊勢小六 二首

山風のさそふ木の葉の時雨にも月の光ははれ曇る也

霜夜聞鐘

有明の月の行ゑに聞ゆ也霜夜のかねの寒まさる声

頼朝公の廟に詣てゝ

鴨長明

草も木もなひきし秋の霜消てむなしき苔を払ふ山風（68ウ）

*1 東大、頭注に「闕字或云さなから」とある。

中将姫

まれに來て問ふもさひしき松風を常にや苔の下にきくらん

石馬集卷之六

（以下、十行余白）（69才）

通昭録卷之三十五

石馬集卷之七

榎本氏令堂八十賀和歌^{*1}

松契遐年

岩下貞右衛門 平祐貞

行末は共にちきりて千代までもさかえ栄ん庭の松賀枝

春日詠八十賀

大重五郎左衛門 藤原兼喬

千代ふへきためしをけふの姫若菜八そちのゝちもなかやつまなむ

堀四郎次 藤原興知

ちきり置て千代もなれみんあひ生の松に八十の後のよわひを

上床伝左衛門 平國禎

老の坂八十も越てことしよりのほるよわひの末やはるけし

梁瀬彦左衛門 藤原実武

鶴亀に齡ひちきりて今よりのやそちの後や千年万世 (1才)

^{*1} 「七(十)」にミセケチして、都は「八(十)」。

肥後喜三次 平盛央

かさねきてやそちの後も千代いくよ猶なれあそへ鶴のけ衣

赤崎源助 平貞幹

やそちへしのちのよはひやとかへりにさくてふ(に)松のはなにち

きらむ

坂元喜左衛門 平正香

千代や経ぬ八十の後も此宿のいやさかえそふ松にならひて

相良寿貞

八十てふ今年を千代のはしめにてさかえむ老の春やいくはる^{*1}

藤原実信

すゝか川八十瀬にかゝる老のなみ猶もなかれのひさしからなむ

祝言三首

平貞幹

老の坂八十のけふをふもとにて千年もこえん人のゆくすへ

く(人)みそへて千年の春も此まゝ(し)にめくれは八十のけふの

盃 (1ウ)

^{*1} 都「えぬ」。

かきつむるけふのことはの花に先かねて千年のいろもみえけり

徳山五兵衛某の妾故有て公より吉原の遊女となし給ひ九重とい

ゑるかよめる

はてしなき遠き東の隅田川たえぬ流をいつまてか汲む

美代清相^{*1}

偽と思ひながらもかきくれて落る涙の主(み)やたゝなる^{*1}

名所雪北郷氏会

小森一山

誰も問へ今朝はあれたる色もなく志賀の都の雪の花ふる

樺山家の杜若を見て 弥寝清香後小松氏ト改

かこひなす庭の姿を見せはやな雲の上人いかゝいわなん

暮ゝ(し)花を見て即興

^{*2} 道厚 長崎仁右衛門敷

見るうちに暮るゝをおしむ杜若花の盛を問ふはかたきを

御齡くらへの松の折しに

細川幽齋 (2才)

^{*1} 「た」え」か。

^{*2} 東大、都「通敷」とあり。

御庭なる松は其まゝおれにけりおのかよわひを君にゆつりて

水戸光圀卿の息女或方に嫁し給ひける半途、夫の不幸と聞て髪を切り尼寺に行とて

百筋を千筋となてし黒髪を只一筋に思ひけるかな

通昭按に光圀卿の女尼となり鎌倉英勝寺の住持となりしあり、疑らくは此人ならん歟

京極兵部高主薩州に在ける時よみて送ける

京極高家甲斐守

しるらめや心つくしの海山になれぬ旅ねを思ひやるとは

須崎にてよめる

京極高主

にしの海とひ来てありぬ秋の月たくひも浪の影に移して

同時時

青山 七右 (左) 衛門

うなはらや魚のすかたもあからしさま (2ウ)

享保十五年九月駿州丸子薬師堂法楽

芥川氏の請によめる 千鳥

京極高為 兵部

夕しほの干潟にぬれて友千鳥幾度同じ浦伝ふらん

遠村煙

藤井雅章

里しめてあまやすむらん浜路かた煙立のほる沖津島かけ

時方

朝夕の煙もつく遠方のにきわふ里はよそにしられて

時鳥何方

智仁親王

時鳥いつちときかん白雲のかさ(た)なる遠の空(え)に鳴音は

為綱

一声はいつことも分す立まよふ雲のまきれに行時鳥

山月

高主

さしのほる月の鏡の山端はくもらぬ影に見えてはるけき (3才)

華洛月

親尹

え(ゑ)ならずよ秋の雲井にかけすみて花の都の月の夜深さ

京極高主歟

山かせのかよ(な)ふ麓の秋の色に心もなひく小田の民草

さま／＼に味をつくしの田面哉

名越恒篤歟

めくみありて詞の花もおのつからなひきあひたる小田の民草

春燈

義堯

長からぬはるの夜とてもおこたらてかゝけやそえ(た)んまとの

(事)燈火

春旅

高主

けふいくか分る野山は花鳥の色音にたひのうきを忘れて

春日

同人

それとのみたてる霞や朝みとり匂へる春の山もはるかに (3ウ)

*1 県図、一字空欄、東大・都より補入。

春獸

資三

のとけしな霞を分て爰にむれかしこにあさる牧の春駒

春鐘

遂良

入相のかねのひゝきのなかりせはかへるを家路(を)花に忘ん

春山

同人

雪白くみしも程なくかきたえてかすみに匂ふ春の山まゆ

春來水解

資三

春くれはみきはの水とけそめては(と)やうち出る池のさゝ波

高主

長閑なる風の心もさゝ波(時)にみせてや池の水とくらん

義堯^{*1}

行水のはやくもはる(今日)のなにけらし氷を出る波の初花

資三(4才)

*1 県図「堯義」。

春くれはみきはの水とけそめてはや打出る池のさゝ波

估綱

緒に(よ)し硯の水うすらひも春にけりと今朝そとけぬる

正尹

ふる年の氷もいつか春きぬととけてのとけき池のさゝ波

窓蛩

或田諏訪兼利詠^{*2}

我なからよその見るめも恥かしや学はぬ窓に蛩飛かふ

窓蛩

兼利門人 長崎賈人

終夜ほたるをまに吹入てまなはぬ我を風やいさめん

歳旦

室直清

思ひ出のなきとはいわ(た)しことしよりまれのよわひのかすにい
る身を

歳旦

伊藤仁斎

かくはかりひちを枕のかりねにも浮へる雲の世をはしたわ(は)し

(4ウ)

*1 この歌解説難。「緒」「春」は仮りの一案。

*2 東大「或」曰

歳暮

伊達光宗越前守

たらちねの老ゆくすへのおもわれて猶おしまるゝ年のくれ哉

中神氏のもとに萩の花見にまかてゝやまともろこしのこしおれ

なとつゝりけるにあるしの養母のよめる

おもしろくい(二字欠)ひし詞の花に猶萩も錦の色と見え(へ)け
る

徳の島へ遣されしに山川の津を漕き出てよめる 伊地知季

行船のかくるゝまてはかへり見る心つくしの富士の俤

除夜に雨の降ける元旦よめる

朝隈兼白

年越へて降行なんと見し雨もはれて陰なき新玉の春

五月雨

小倉知雄 (5才)

今朝見れは里のたなはし水こへて渡る人なき五月雨の頃

樺山久方

山の端にかゝれる雲も今日幾か晴るゝ間もなき五月雨の頃
山川に水かさまさるや石はしか音まで高き五月雨の頃

盛次^{*1}

浮雲のはれ間も見えずつれ／＼とふるもさひしき五月雨の空

侍講に出けるに着し給へる服の心に叶は(叮かは)さりければ
袖を払て去るとて 惺齋先生

渡らしなせみの小川の清ければ老のかけそふ波もはつかし

秋夕 烏丸資索^{*2}

秋といへは桐の一葉のそれよりもろき涙の露の夕くれ

住吉の神詠なりといふ

慈悲の目ににくしと思ふ人そなき罪のある身は猶不便にて (5ウ)

*1 「盛」以「か」。

*2 都「夕」暮。

南殿の庭に夜の間にすまう草を生ず

曠野の草なれは不吉の事也^{*1}とて人々に歌よませ給ひける時

六歳にてよめる 紫式部

けふ計負てもくれよすまふ草とる手(ね)も知らぬ六ツ子也けり

草忽に消滅しけるといふ

二三四といふことを(欠) 俊成

忍ひつゝ人めもつゝむ玉章のよまれぬ文字の二三四

家隆

夏山の青葉ましりの遅さくらあらわれて見ゆ二三四

定家

たなはしのみしかきほとそ知られけり駒のあしなみ二三四

立野弥兵衛妻を質に出して芦名盛隆に降りけるか幾ほとなく叛
ければ盛隆 (6才)

*1 以下、「給ひける時」まで、東大・都による。

怒て立野か妻を串刺にしける時女よめる

浅ましや身をは立野に捨られてねみたれ髪かくしのつらさよ

肥後熊本百首和哥 安永三年頃

立春

井上四郎兵衛秀庸^{*1}

こくふねも霞そわたる和田つ海の浪にもけさははるやたつらむ

初春霞

中西孫右衛門昌凭

遅かに向ふ日影を四方にまつ見せて霞めり春のはつしほ

雪中若菜

坂井作太夫包実

あすはなをつもりやするとしら雪のふりしく野辺に若菜つむ也

山本団之允勝武

めつらしな木かけは雪も消なくにをのか声のみはるのうくひす

(6ウ)

*1 都「立(ら)」。

門柳

宗仁太夫 正清

とひ見はやはるをみとりの色そひて誰かすむ門の青柳の陰

帰雁知春

今田源八 秋邦

契置し越路の春にをくれしとおもひたちてや雁帰るらむ

二月余寒

和久田猪九郎兼近

立なひきかすむたかねもしはしまたゆきを見せたるきさらきの空

故郷春月

村上三郎兵衛義連

月や猶いくよのかすみへたて来てあれし軒端に影とゝむらむ

夜春月

井上四郎兵衛母 詞風

しつけしな忍ふにあまる軒のつまにつたふしつくや夜半の春雨

春日遅

水仗町専誠

花鳥のいろ音（し立）をめてゝくらさはあくはかりなる春の日な

かさ

尋花

吉仲喜太夫定索（7才）

求のこす峯こそなけれけふ幾日はなに分いるみよしのゝ山

見花

宇師久右衛門慶久

とひよてみる宿からに色も香も心にしむかはなの下かけ

翫花

井上四郎兵衛妻（欠）艶子

このまゝに花しちらすは千代もなをあかぬ色香のかけにくらさむ

折花

和久田素助兼列

みぬ人のために手折し枝なれはとかむな花のあるしなからも

惜花

井上四郎兵衛娘秀子

山風にちるはなよりも身にかゑてしたふゝろそ空にみたるゝ

三月三日

橘津彦兵衛正脩

から人のつたへし桃の三千とせをうつしてめつる水のさかつき

款冬

清涼軒秀一

手折なはけなまし露の玉川のさとにみはやす山ふきのはな（7ウ）

*1 都「（幾）か」。

*2 都「都」にミセケチして「師」。

*3 都「娘」なし。

*4 都「（山）吹」。

松間藤

岡部嘉太夫 秀積

松のはの常盤のかけに色そえてかゝるもふかき峯の藤なみ

三月尽

秋永形太夫精氏

しはしまた空にとゝむる関もかな馴こしはるのけふのわかれ路

卯花似月

正脩

玉ほこのみちもさやかにてる月のかけかとみえて咲る卯のはな

待郭公

小沢忠兵衛清武

誰里にいそく初音そ夜もすからまつ身につらき山ほとゝきす

寢覚々々

専誠

夢路より鳴しやさむる手枕にこゑとをさかる山ほとゝきす

五月々々

市師 吟雪

時鳥聲は雲ゐにたちはなのはなちるさとの五月雨のころ

庵五月雨

原作左衛門久福（8才）

*1 都「（の）葉」。

*2 都「（誰）か」。

*3 都「（覚）郭公」。

*4 都「（月）郭公」。

*5 都「（作）右」。

軒はさへ雫にくちてけふいく日いほりさひしき五月雨のころ

夏草露

山田新左衛門 方安

涼しさは秋におとらぬ夏くさのいろもはへある 朝な夕つゆ^{*1}

里蛩

仲井角太夫貞昭

たをやめのかさしの玉か打むれて飛鳥の里にかよふはたるは

夜川篝火

盛光寺住 光阿

鶉かひふねわたる河瀬のうきしつみあはれ身にしむかゝり火の影

遠夕立

秀庸

くもるさへすゝしく見ゑて里とをき外山をすくる夕立のあめ

樹陰納涼

秀一

暮かゝる月のかつらの下すゝみそてにもりくる影そ夏なき

立秋風

精氏

夏衣きのふにも似ぬ涼しさをそてにしらるゝ秋の初風 (8ウ)

*1 東大「朝」の「か」。

七夕後朝

秀積

今朝はまた天の川なみ程遠きあふ瀬を星や猶たのむらむ

秋夕

正清

何ゆへとわかぬあはれを身ひとつにおもひそゝふる秋の夕くれ

夜萩

兼近

ねられすよ秋はあはれもふかき夜のまくらにちかき萩のうは風

朝萩

吟雪

露ふかき萩の花より朝風にみたれてなひく宮城のゝはら

夕薄

勝武

心なきものとも見すよゆふくれのみちの行手にまねくすゝきは

山初雁

定索

末とをくすかたはそれとみえわかぬやまのは渡る天津かりかね^{*1}

田家鹿(席)

兼利 (9才)

*1 都「(の)わ」。

ひたすらにあはれをそへて聞佗ぬかり庵ちかきさ(こ)をしかの声

野亭聞虫

久福

ねられすよ野守か庵の夜もすから露をとひよるむしの声々

嶺月

莊嚴寺住尊阿

うき雲もはれてあとなくてる月の峯もあらはに見へてさやけき

谷月

秀庸

峯たかき水の間もりきて谷の戸にさし入月のかけのさやけさ

海月

慶久

和田つ海や千さともはるゝ秋のなみよるともわかぬ月のさやけさ

湖月

義連

鳴てるや鏡の山も波の上にかけすむ夜半の月そくまなき

関月

秋邦

鳥かねはよしはかるともかけとめて月にゆるすな逢坂のせき (9ウ)

ウ

*1 都「(の)関」。

擣衣郷音風

貞昭

誰かさとの夜さむをしれと吹送るかせにまちかき衣うつこゑ

紅葉増雨

光阿

うすくこく染るもみちもふるあめに猶やにしきの色まさるらむ^{*1}

紅葉映日

三上次郎太夫久武

夕つく日うつれは木々の紅葉々はやしほの外に色そそめます

慕秋露

昌凭

菊に結びもみちにそめて行秋のなこりそふかき庭のしら露

惜九月尽

清武

したへともとまらぬ秋の哀さを思ふゆふへの鐘の音もうし

初冬時雨

義連

山かせにあきを送りてふりくるもをりえていそく時雨なるらし^{*2}

風前落葉

昌凭 (10才)

*1 都「(る)紅葉」。

*2 都「(り)へ」。

明ぬ間はまと打あめときくも今朝風に落葉の錦吹まく

庭霜

慶久

みる色もなをさむけしな置まよふ朝霜しろき庭の真砂地

冬月

包実

寒けしなねやは氷を敷たえの枕にすめる窓の月かけ

古屋(宝)霰

専誠

幾度か風のあられの音冴てあれし板やのひまそもりくる

暁千鳥

正脩

夜もすから友よふ千鳥しは(か)／＼も安おとろかす明かたのこゑ^{*1}

池氷

定索

散つもる落葉も池にたくひなみよるとは見えずこほりそめけむ

常盤木雪

秀一

としさむきすかたも今朝はしろたへの雪にうもるゝ峯の松かへ

*1 都「(も)ゆめ」。

(10ウ)

深雪

尊何^{*1}

夜の程のふみかふ道も朝戸出にそこともわかすつもるしらゆき^{*2}

歳暮雪

秀積

おしむその涕とめて月も日もふりつむ雪とともにくれゆく^{*3}

寄雲恋

秋邦

見てもしれあらぬつらさにたちまよふ身のたくひなる空の浮雲^{*4}

々風恋(々)

秀積

うき申は身にしむ風の音信も絶てよそにやこゝろひくらむ^{*5}

々雨々

昌凭

契置てとはぬ身をしる雨の夜はかたしくそでのぬれそふもうし^{*7}

々月々

貞昭

待よひの山のはいつる月影のかけしゝむまで人そつれなき

々煙々

方安 (11才)

*1 都「(尊)阿」。

*2 都「(しら)雪」。

*3 都「(に)暮」

*4 都「寄」。

*5 「事」の誤写か。

*6 都「引」。

*7 都「(く)袖」。

消やられていつまでむねにあこかるゝおもひのけふりたえぬ日そなき

々山々

包実

うき事のは山しけ山いつかまた心(思)さはらて尋いるへき

々杜々

秋邦

色に出てみたれそめなはいかにせぬまたきけしきのもりの下露

々関々

定索

憂事^{*1}はたれ関守ていつかまた世にあふ坂のなをやとゝめむ

々海々^{*2}

尊阿

人よしれふかきおもひはわたつ(す)うみのよるへもなみに恋しつ^{*3}

む身を

々橋々^{*4}

慶久

我事はふみかよふへき道たにもたゑてはかなき木曾のかけ橋

々埋木々

光阿

花さかぬ身をもいとはし埋木もつらねし枝の春を思へは(11ウ)

*1 都「憂事³は」とあり。

*2 都「寄(海)恋」。

*3 都「(も)浪」。

*4 都「(橋)恋」。

々塩木々

久福

かくはかりからき塩木を身にしれとうきにこりくむ契はかなき

々宿木々^{*1}

兼列

我事のよそにその名は高くともいつやとり木の身とはなるへき

々杣木々^{*2}

義連

ひくかたもしらてくちなむうき事のたくひはか(め)なき谷の杣木は

々朽木々

精氏

年月もつれなき中につもる身はたにのくち木とうし(ら)やくちな

む

々初草々

勝武^{*3}

契つゝけふ初草のうらわかみつみはやしても末そあやなき

々忍草々

正脩

人めのみ軒端に生ふるしのふ草しのふにたへぬ身こそわりなき

々思草々

兼列(12才)

*1 都「(木)恋」。

*2 都「寄(仙木)恋」。

*3 都「(勝)氏」。

露のみはむすふ習もよにつらき心にしける我思ひくさ(き)

々下草々^{*1}

勝武

人よしれ我はあたる色に出てしけるはなのゝ露の下草

々忘草々

專誠

草の名のわすれすも猶たのむへきすへかはらしときゝし言のは

暁眠易覺

尊阿

定なき枕のゆめのつれなくもさめてものうきあかつきの空

窓燈

慶久

文まなふ心そしるきあかつきのまにほのめくともし火の影

名所松

精氏

散うせぬ色をふめて世に榮ふこと葉のたねよ和哥の浦まつ

名所浦

久武

たちかへり見るめもよそに又たくひなきてかすめる和哥の浦浪

(12ウ)

*1 都「寄(下)」。

*2 都「(き) 暁」。

*3 都「ふめて」と傍点あり。

名所鶴

包実

よせ帰るなみにまかはて和哥の浦の芦へをとをみたてるしらつる

野風

光阿

夕されは野路のくさむら置露のやとりさためぬ秋風そふく

橋雨

久福

ふりしきる雨にはいとゝ危さの渡りくるしき浜のかけはし

渡舩

秀積

行かよふ人のためとてこれも世をわたりのふねのよるひるとなき

旅行

精氏

帰るへき都ならずはこえてしもいかてかゆかし逢坂のやま

旅宿

兼列

あすもまたとまり尋てやつれなん独たひねのかり枕して

旅泊

秋邦 (13才)

都おもふ夢やはみつのとまりふねおなしうきねの浪の枕に

家路

定索

誰有て人をはやまの山かつもかよはぬおくの庵の下みち

山家鳥

昌凭

淋しさ(に) もなをそたゝ(し) ある山住は鳥(色)の声たに(な)

稀(橋)に聞えて

田家煙

久福

打なひく田面の末に一筋のけふりまかはぬ山もとのさと

独述懷

專誠

文も見すおろかなる身はかくとたにえやは人にもいはぬくやしき

老後懷旧

勝武

来しかたの我そゆかしき老ぬれはいまゆくすへのほともしられて

往事如夢

光阿

けふも過ぎのふも立しおもかけはたれかとゝめむ夢の世の中 (13ウ)

*1 都「同じ」

*2 都「(の) 里」。

神祇

正脩

神垣や幾萬代の露霜にみとりかはらぬ神葉のかけ

釈教

義連

まよはすもたつねいらなむ法の門道はあまたの教ありとも^{*1}

祝言

尊阿

うこきなきいわほに菊のあとゝふて幾代つきせぬ小かへらの山^{*2}

綱貴公五十御賀松契年

相良作平次頼賛

めくみあり君に契りて相生の松（お）も千年の色やそふらん

小森八左衛門政方

君か経む千歳（年）の春を契る哉松のみとりの常盤かきはに^{*4}

平瀬治右衛門武明（14才）

*1 都（教あ）る。

*2 この一首、都になし。

*3 「小かくらの山」か。

*4 都（経）ぬ。

君か経む齢も久しみとりそふ常盤の松の千歳かそへて

牧仲之丞胤富

さかへ行松に契りて恵ある君か千歳の末そ久しき

日高曾右衛門為春

千代ませと君をそ仰く松のはの常盤の陰にすめるもろ人^{*1}

河野三太夫通都

常盤なる松も五十の春にあひてみとりさかふるすへは幾千代^{*2} 得能造酒丞通行

うつしうへて猶さかふへし姫小松君そかそへん千代の行すゑ^{*3} 境田通郎^{*4}

君か代にちきれと誰もあふくそよ千歳の松の千枝のさかへを

母の墓に詣てゝ帰るさ鐘を聞て

二階堂省行（14ウ）

*1 東大「松」にミセケチして「陰」。

*2 都「末（は）」

*3 東大「ぬ」の上から「ん」を重ねて書く。都「ぬ」。

*4 都（通）節。

聞は猶身をこそしほれなきからをおさめし山の入相の鐘

十四に成けるとし歳暮の恋といふ事を人のよませければ

梶女<sup>京祇園
茶汲</sup>

恋／＼てまた一年もくれにけり涙の氷明日やとけなん

月前忍昔恋といふ心を

もろともに見し世もあるを袖の上に哀問ひくるねやの月影

人のもとへつたふへき文をうしなひて侍りければ、文の主のも

とへよみてつかはしける

ふみまよ身こそつられけ日をへてもそこ知られぬ水くきの跡

東よりのほりたる人の下るとて、わすれしな神のみそのゝ秋の

月我はあつまのはてにすむとも、と有し返し

よひ／＼はおもかけなから待いてむあつまのはての山のはの月

(15才)

扇のもやうに柳のもとに女の(女の)^{*1} 琴を弾(弥) してゐるを
見侍りて

いはてかく思ひみたるゝ青柳のいとあひかたきしらへ成らん

夜の鹿といふ事を

身にしれはよそにはきかぬ小夜ころも妻こふ鹿の鳴明す声

山中を通けるに桜のいと面白く咲ければ、みつから樹をけつり
て書付けるとそ

寺山用央

山さくら^{*2}のおのか盛を人とわてあわれいく世の春か経ぬらん

作れる詩を人の称美しければ

赤崎貞翰

玉ならぬ石さへ君にみかゝれてあらぬ光をそふかうれしさ(き)

富士を見てよめる

大原貞以 (15ウ)

*1 東大、都なし。

*2 都「(山) 桜」。

かたりつきいひつくふしの煙さへ今日こそ見つれ浮島か原

或曰、大原氏一代の秀逸也

烏丸光栄

此ころの山はなへてのうすみとり花の白雲あとも残らず

乙未歳旦

二階堂省行

あら玉の年をむかふる家の風神代の春にかへすうれしさ

東都組の士の妻不義の聞へ有りとて夫の去りければよめる

かりそめのことはくさに風そひて露の我身^{*1}のおき所なし

夫此歌(前)に感して復むかへとりけるとそ

岡薄

海遠き岡辺の尾花ふくらかにあらぬ波立つ秋の夕風

野遊

武者小路三位実丘 (16才)

*1 県図、東大「浮敷」、都「本、我、浮敷」と注記。

おもふとち花にたわれて遊ぶ野ゝこてふも同じ春の日くらし

夜霰

実丘

雪ならは木々にとゝめて明日も見む夜^マるのあらればふるかひもなし

川合太仲流人^{*1}

雪ならは松にとゝめて見るへきを夜のあられば音計して

雪ならはこすへにとめて明日も見む夜の霰の音計して

大玄廟の逝去によめる

境田通節

かく計析るかひなき神無月世はうき時と時雨ふるなり

名所鶴といふ事をよめる

中馬諸香

ふけ(そ)て猶子をおもふつるや住吉の浦悲しくも耳に鳴くなり

暮春

中馬諸香

ちりうかふ花も流れてよしの川行水はやく春そくれぬる (16ウ)

*1 「添(人)」か。

近衛殿より扇に書して給ひける（り）

旅衣日も夕ぐれになかむれは雲井はるかに雁もゆくなり

尾畔花

よのつねの色香とや見る桜花うへけん君かむかしおもへは
とく遅く梢をわけてふもとよりおのへにつく花の白雲

春

赤崎貞幹集

【歳中立春】すさましと名にたつ月の桂さへ光を花の春は来にけり^{*2}

【立春】けふよりは花鶯にくらせとて色香長閑き春は来にけり

【山霞】朝附日春の光をさしそへてかすむ三笠の山そ長閑き

花に又いつ（欠）かへてみんけさは先霞をいろの春の山のは

【雪中鶯】くる春をいかにしりてか雪はまたふるすなからも鶯の鳴

【曉更鶯】鶯の声そ明行月は猶かすみて残る竹のはやまに（17才）

*1 東大、都「尋て」をミセケチして「おもへは」とする。

*2 都「立（月）」

【沢若菜】日にぬるむ水のけふりをするへにてもゆる野沢の若な尋
ん

【梅風】玉すたれかゝくる袖もさむからぬ梅か香誘ふ軒の春かせ
誘ひ来て花なき里の垣ねにも匂ひ隔ぬ梅の春風

【水辺柳】河岸や水の煙の末とをくかすむ柳の色そ長閑き

【初花】またれつる心しりてや家桜よそよりはやく咲はしむらん

【山花】桜花咲そめしよりかたはらのその深山木も春や知らん^{*2}

生駒山高ねの（欠）桜咲にけり立まふ雲の色と見るまで^{*3}

【雨中花】ふる雨はもるともよしや咲花の木の下陰に笠やとりせん

【河落花】よしの川水の春さへとまらて岩浪はやく花そ流るゝ

ちりうかふ花の波間にさす棹の雫もかほる春の山川

【帰雁】あた物と思ひすてゝやさくら花咲をもまたす帰る雁かね

【池藤】かけうつす岸ねの松の枝ながら池の玉藻にかゝる藤波

【款冬】物思ふ誰かならはしに山吹のいはぬ色しも露けかるらん

（17ウ）

*1 都「末」遠。

*2 都「咲」はじめ（より）。

*3 都「高」根。

*4 都「ま」よ（ふ）。

【暮春】よしの山花にまかひし峯の雲そをたに残れ春の形見に

【三月尽】花鳥にいたく馴すはか計にうからし物を春の別ち

夏

【更衣】ぬきかへて花の名残も夏衣さくら麻てふ名にはたてとも

【新樹】はなにきて馴しかけさへいつれとかわかほかさな（み）る

山の木深さ

見し春の花は胡蝶の夢のまに（の）青葉そしける庭の夏山

【聞郭公】時鳥又もことゝへ一声は夢かとたとる夜半の枕に^{*1}

【浦時鳥】ほとゝきすいつち過けんすまの浦や浪こしもとに声を残

して(む)

【旅時鳥】さらてもねられぬ物を時鳥たひの枕に心してなけ

【夜橋】橋の露吹はらふみすの外に月もみたれてにほふ小夜風

【雨後橋】村雨の名残すゝしく風ふれて雫もかほる軒の立はな

【池菖蒲】風渡るみきはのあやめ露^{*2}ちりてさゝ波かほる池の涼しさ

【五月雨】ふしわひぬむくらの宿の五月雨に袖の雫をひしき物にて

(18才)

*1 都「(こ)と」。

*2 都「(みき)わ」。

【曉鷗川】夏箕山あけてもくらき山陰はまたよふかしとう船さすらし

【水辺蛭】岩つたふ山水の末みえて蛭なかるゝかけそすゝしき

【窓蛭】くれ竹の葉分の風のそよさらに蛭乱るゝ(欠)窓の涼しさ

【山夕立】吹のほる谷風あれて初瀬山松原かすゑにきほふ夕立

【河夏月】みるまゝにう舟のかゝり影さえ(は)て月に成行夏の川つら

【水辺河月】夏深き山水にかけ落て月を岩こす浪のすゝしさ

【夕納涼】わか竹の露打ちりてうたゝねの枕涼しき窓のゆふ風

【水辺納涼】あつき日のかけも流れて行水のおはしま涼し波の夕風

秋

【立秋】草も木もいさまたしらぬ秋の露誰か袂より置はしむらん

【新秋雨】うひゝねの枕涼しくそ(た)ゝく也秋くる宵の軒のむら

雨

【七夕川】七夕のこゝろやくたく天河妻(書)まつ夜半の浪風の音

【夜萩(義)】更に又身をしほれと(は)や小夜更て萩のは風の音をそふらん (18ウ)

【野萩】春日野やふりし御幸の跡留て今はた萩の錦をやしく

【萩花蔵水】ちりつもる花にせかれて秋萩の下行水や音むせふらん

【山鹿】うき秋をなくさめかねて棹鹿も娘棄山の月に鳴(侍)らし

今宵又つれなき妻や待乳山かたふく月に小鹿鳴声

【鹿声幽】山の名の嵐のつてに聞ゆ也立処はるけき棹鹿の声

なれも又妻(書)やへたてゝ山鳥の尾上はるかに小鹿鳴らし

【庭虫】露さむき笹の月の影更て虫のねすめる浅茅生の庭

【江月】所からわきて光やみくらん玉江の浪のよる／＼の月

【橋月】かつらきや夕ある雲の中たえて月すみわたる久米の岩橋

【湖上月】にほの海や比良のねおろし音更てさゝ波遠く澄る月かけ

【浦月】うきわさも月に忘れて浦波のよるも汐くむすまの蜃人

【社頭月】五十鈴川わたらぬ浪に影留て神代のまゝの月や澄らん

【山家月】山深み軒の松風音たえてひとり更行月のしつけさ (19才)

*1 都「(も)り」。

【曉霧】横雲のわかれし後も立こめてまたよを残す峯の秋霧

【閑居秋風】なへてよのうきたくひかは八重葎しけれ宿の秋風の

声

【擣衣】小笹吹嵐をさむみ小夜衣しのに打也あきのやまり^{*1}^{*2}

宮城野の野守か庵も秋萩の花り（る）衣今や打らん

【浦擣衣】さやけしな月になるみの浦風にさそふ礎の小夜深きこゑ^{*3}

【水辺菊】くむや誰菊のした露落そひて匂ひことなる（か）山川の

水

【松間紅葉】枝かはすもみちを染て露時雨つれなき松の秋もみすら^{*4}
し

【暮秋】みし花もうつろひはてゝ行秋の末のゝ草の色そ淋しき^{*5}
身ひとつの秋こそ残れ長月の有明の月も詠尽（す）して

冬

【落葉】梢には誘ひつくして山かけの落はに^{*6}残る風そさひしき
詠こし心もいろにさそはれて空にみたるゝ風の紅葉は

【寒中】こと草は垣ねあらはに冬枯て^{*7}残る尾花の色も淋しき（19
ウ）

*1 都「秋（の）」

*2 都「山（里）」

*3 都「下（露）」

*4 都「（か）わ」

*5 都「（末）野」

*6 都「（落）葉」

*7 都「（ら）わ」

【冬月】木枯の誘ふとはなき久堅の月の桂も冬そさひしき

秋の色を誘ひ尽せし山の端の嵐にはるゝ月のさひしき

【千鳥】明石かたえしまをかけてかよふらし浪に衝の遠さかる声

【浦千鳥】夜千鳥なれも心や有明の月にうかれて浦つたふこゑ

【海辺雪】海こしの山も間近くみえ初て雪よりしらむ浪のあけほの

【竹雪】下おれの声にそしるき呉竹のよの間につもる雪の深さは

【歳暮】たらちねの身につもらすはかく計暮行年をおしまさまし

恋

【初恋】ならはねはいかに分入物としもいさまたしらぬ恋の山路

【忍恋】敷妙の枕もしらしひとりぬる夜半さへつゝむ袖の泪は

【顕恋】うは玉の夢にもつゝむ我思ひいつあらはれて浮名立らん

【不逢恋】したふそよ人のつらさを幾度か浮身のとかに思ひかへし

て

【待恋】待わひて涙かたしく衣手に契らぬ月の影そこととふ（20
オ）

【逢恋】かさねても夢かと思ふ小夜衣かへし馴める心まとひに^{*1}

【後朝恋】きぬ／＼に残るうらみを書やるもまたつくしえぬけさの
玉つさ

【寄川恋】思ひ川人のうき瀬になからへて猶いつまでか袖ぬらさま
し

雑

【名所松】あふくにそいよ／＼高しことの葉の種となるてふ住吉の

松

【遠村煙】入日さす遠山もとに里みえて夕けの煙なひく淋しさ

【孤村竹】住や誰竹一むらの奥の庵うきふししけよを知らずして

【山家】ふかゝらぬ山里ながら軒近き松の嵐の音そ世に似ぬ

かくれ家は心にふかくもとめなんかならず山のおくならずとも

逃てもあやなみしよの忍はれてうきはまきれぬ山陰の庵

【別】今よりは空とふ雁にことゝはん君か玉章かけてこしやと

末いそく艀出なからもつなて縄猶引とめてしたふとをし^{*3}

【旅】か計に身をはしほらし故郷に聞しをまゝの嵐なりせは (20

ウ)

*1 都「ま」よ。

*2 都「や」只「か」。

*3 「し」れ「か」。

いかにして都につけんうつ山の薦の下道けふはこえぬと
詠てもなくさみぬへき故郷の空さへけふは雨にくもりて

海山に心をとめてたとらすはなにゝか旅のうさもまきれん

【春旅】末いそく旅路ならすは駒留て花にくらさんはるの山みち

【夕旅】里とをみ宿とひかねし山かけに夕けの煙みえてうれしき

【旅行友】故郷に馴こし計むつましくうきをかたらふたひの道つれ

【旅宿】今宵又いかにあかさ草枕秋風すこき野^{*2}へのかりふし

よるの雨はかゝらぬ(ね)旅の袖にてもふしうかるへき笹のかり庵

かり枕まとろむうちもうき旅のうきより外の夢をやはみる

たひ枕ねられぬ床のなくさめに巻かへしみる古^{*3}(故)郷の文

かり枕しはしまとろむ夢路にも遠き野山をたとるくるしさ

【寄月旅】諸ともに詠しよ半や忍ふらん月を形見の故郷の空

都よりとものふ月のかけ見てもなくさめかたきおは捨の山 (21才)

*1 都「詠」め。

*2 都「野」辺。

*3 都「見」る。

草枕かりねの床の露けさも今宵かたらふ月に忘^{*1}て

かり枕ねられぬ月におき出て夜深くわくるいな^{*1}のさゝ原

【海路】しほりそふ袖いかならん遠さかる浪の枕のひと夜^{*}に

海にます神かけて先祈るそよ遠き波路のさはりなかれと

【述懐】たらちねの親につかふる道も今身のいたつきにおこたるそ

うき

ゆへある時おもひつゝけ侍し

末終に直き梢やあらはれんまかれる枝はさしおほふ共^{*2}

いつの日か天津はる風吹出て身の浮雲をはらひ尽さん

菊月の末つかた公のつとめにてかこしまへ(欠)移侍るとて

住捨し後いかならん秋の露今たにかゝ宿のよもきふ

おなし頃人のもとへ申送り侍りし

ことゝへよ同しうらはの友千鳥浪のいつこに立わかるとも

哀傷 (21ウ)

*1 都「忘」れ。

*2 都「とも」。

父のなけきにもり侍し頃思ひつゝけ侍る

うらめしやいかなる世より親と子のさらぬ別をなけき初けん
行通ふ道たにあらは死出の山此世の外も尋てを^{*1}みん

つまにおくれていたく歎きける人に申送り侍し

かさねけんふるきふすまにうつりかの残るやあたの形見ならまし

月洲山郷^{*2}君かくれ給ひし頃思ひつゝけ侍し

いか計したふとかしる照月の雲かくれにし空のなこりを
今よりは誰をしるへに草分て五の常の道をたとらん

父の一回忌にあたり侍る時手つからうへ置せ給し砌の松に吹風

も常よりはいと身にしむこゝちし侍りて

けふは猶植しむかしを忍へとや松^{*3}ふく風も音をそふらん

賀
(22才)

*1 都「も(みんな)」か。

*2 都「(山)田」か。

*3 都「(松)吹」。

祝言

さゝれ石のいはほとならん行末の千年の後も君そかそへん
よつの民同し心にあふけいま身のほとくの恵ある世を

布引瀧三首
よみ人しらす

山中にかくし置ては何かせん人目にさらせ布引のたき
津の國の難波の里に住む人はおりなからそ見る布引のたき

この程はおもひおりにし布引を今日立そめて今そきてみる^{*1}

掛繪賛
柏原幽静

よひの間はほのかに君を三か月のさし入るかけのあとそ恋しき

*1 都「見(る)」。

(22ウ)

愛宕(岩) 山にのほりて
山崎闇斎

ふしおかむやしろの中は神なれや心のすめる水にうつらは

妻におくる文の中に
前原伊助^{*1}

ふりつもる雪に見ぬ世の恋しきは筆墨のあとおもひそめぬる

仇を報ひ泉岳寺に詣てゝ
小野寺秀和

神垣を更にわすれてこへやせん梅の色香のこゝろまとひに

中村正辰

梅にのむ茶やもあるへし死出のたひ

亡君の御墓にあたひとの首を祭りて

星野包秀 (23才)

*1 都「介」。

*2 都「(茶)屋」。

^{*1}このにほひ雪の浅ちの野梅かな

末期よみて瑞光院に送る
大石良雄

おもひ入る身は武蔵のゝ夕露ののこる心は朝のしたくさ

夜とともに曇らて月の恨しや入る山のはに影を残して

誰待て御津の浜松かすむら（と）む我日のもとの春ならぬ世に

唐崎の松枯んとしける時

逍遙院実隆

花の咲ためしもあるに此松の再^{*2}ひすきとりともかな（23ウ）

*1 都「そ（の）」。

*2 都、傍注に「本ノマゝ」とあり。

一 幼少より至今日得御意候事七生迄の

御縁かと存候

黄門君御供仕候而切腹仕申候被思召出候ハ

浮草の下二而かたみく

虚白了無居士

月 日

愛甲次右衛門

生年廿八

久保平内左衛門様

入相の鐘もかきりありときけは

猶世にこそとおもわさりけり

辛崎の松古来より伝われるは大風にて

倒れけるを松広東至雅齋直寿（秀）と云人（24オ）

天正十九年外の松を植つき埒（地）をゆひ置けるをある人よめる

おのつから千年経ぬへし唐崎の松にひかるゝみそきなりせは
今に残れるは此木也とそ尊朝親王の松の記有り

辞世

武田信玄

天底還他肌骨好不塗紅粉自風流

上杉謙信

四十九年夢中醉一生榮華一盃酒^{*1}^{*2}

伊達正宗

熙一眼向珪王曰我是奥州守（24ウ）

*1 東大、都「（一）斯、生イ」とある。

*2 東大、都「耀イ」とある。

曇なき心の月をさきたてゝ

浮世のやみをてらしてそゆく

弟子丸宗之越中守

七十をおくるは宵のいなつまか

消れは残るひかりもそなき

藤原これもと 古今（聲^カ）

露をなとあたなるものとおもひけん

我身も草におかぬ計を

五月二日大和口へ打出るとて障子に書付ける

後藤基次又兵衛

主命の親子も捨るものゝふの

道辞ひとつそ命もろとも

*1 都「蔵」助。

大石良雄内蔵介¹ (25才)

あら楽やおもひははるゝ身は死ぬる
うき世の月にかゝる雲なし

中宮進朝長

今は世を見果ぬるかなみのおわり
名をも埋るあふはかの関
仏を^{*1}はよそにあるよと思ひける
今は我身そ南無阿弥陀仏

大内義隆

大寧寺にて自害するとて
うつ人もうたるゝ人も是やこの
如露 如電応作如是観

冷泉民部

おなし所にて自害
見よや立つ煙も雲も中空に^{*2}
さそひし風のすゑものこらし (25ウ)

*1 都「仏」お。

*2 都「立」煙。

竹迫城にて戦死大(太) 永元年森迫三十郎 年十七

いのちより名こそおしけれ武士の
道^{*1}をはたれもかくやおもわん

元禄十年七月十五夜松虫を聞て

中馬重時源右衛門

武蔵野や草の枕のいねかてに
聞もさひしき松虫のこゑ

本田親与兵衛

哀なる草の枕^{*2}のねさめには
鳴まつむしを友とやはせん
旅枕ね覚さひしきにあかつきに
あわれをそふるまつむし^{*3}の声

中馬重時

さらてたに長き夜うらむ旅の床の (26才)

*1 都「お」は。

*2 都「草」野。

*3 都「まつ」虫。以下同様。

まぐらの下に松むしそなく

高岡香積寺の梅を見て

一夢

咲匂ふ此一もとの梅の花さなから雪の山かとそ見る
一もとの梢も広き庭のせに所せくまで匂ふ梅かえ

苗代川にて昔高麗国をせめさせ給ふ時、四代前の大君取て歸ら
せ給ふ、こま人のむまこ共住里なれは

みるたひにいさみ有けりこま人を取て歸りし君かむかしを
世の中のさためなきこそたのみなれ
またうき事のかわりもやせむ
世の中はとてもかくてもはてぬへし
宮もわらやもはてしなけれは

我こゝろかゝ見にうつるものならは
さこそすかたの見にくからまし (26ウ)

うへ見れは思ひ出もなき身なれとも
我よりしたの人もありけり
へたつともよしや心はかわるなよ
逢ふにもまさる文のおとつれ
ふらはふれつもらはつもれそのまゝに
雪のそめたる松のはもなし^{*2}
ふると見はつもらはさきに打はらへ
風ふく松に雪おれはなし^{*3}
人は城人は石垣人はほり
なさはみかたあたはてきなり
見ても又またも見まくのほしければ
なるゝを人はいとふへらなり

- *1 都「下(の)」。
- *2 都「葉(も)」。
- *3 都「(風)吹」。

(見ても又またも見まくのほしかりし^{*1}
花のさかりは過やしぬらん)

高光少将 (27才)

(中納言定頼^{*2})

ひるはせみよるはほたるに身をなして
鳴きくらしてはもえあかすかな

飛鳥川ふちは瀬となる世なりとも
おもひそめてや(ん)人はわすれし
君かすむやとのこすへをゆく／＼に
かくるゝまてはかへり見しかな
我為につらき人をはおきながら
何のつみなき世をやうら見ん
きのふこそ年はくれしか春かすみ^{*3}
春日の山に早たちにつけり^{*4}
夕されは暮よりけにもゆれとも^{*5}
ひかり見ねはや人のつれなき (27ウ)

- *1 都、この歌、県図本になし。東大・都より補入。
- *2 この作者、県図本になし。東大・都による。
- *3 都「(旦)野」。
- *4 この歌に「次は□□」(二字不明)の傍注あり。都にはなし。
- *5 県図・東大「暮」に「ホタル」のルビあり。都は「螢」。

よるへなみ身をこそとかく隔つれ
こゝろは君かかけとなりనికి
我のみや世をうくひすとなきわひん
ひとの心の花とありなは^{*1}
かく計あふひのまれになる人を^{*2}

いかゝつらしとおもわさるへき

白波のあとなきかたに行舟も

風そたよりのしるへなりける

風ふけは嶺（嵐）にわかるゝ白雲の

たえてつれなき君か心か

身をつみて人のいたさそ知られける

いのちはおしきものと知らすや

奥山に心をいれて尋ねすは（28才）

*1 都「花と」ちりなん。

*2 都「お（ふ）」。

ふかきもみちの色を見ましや

中々に人さとちかくなりにつけり

あまりに山の奥をたつねて

おとりはね庭にほひらふ小すゝめは

驚のこゝろをいかてし（よ）るへき

何事も成らぬといふはなきものを

ならねといふはなさぬ（ね）なりけり

上見れはかきりもあらぬ世の中に

我ほともなき人もこそあしれ

（うき事は世をふるほとのならひそと）

おもひもしらて何なけくらん

空海

ならひそとおもひなしてやなくさまん（28ウ）

*1 東大・都「し」なし。「あれ」。

*2 この一行（上句）は県図になし。東大・都により補入。

我身ひとつの浮世ならねは

源義家

吹く風をなこそその関とおもへとも

道もせにちる山さくらかな

笠乃原にてよめる

一夢

むさし野をこゝにうつすか笠乃原さしもに遠き境しられす

百草の今は花咲笠乃原さすかに野へは錦とそ見る

枇榔島へ渡る時渚のかた須磨明石に似たるとて

きて見れは又爰もとも須磨明石さなからそれとまかふ浦波

みな人もみるめに浮ふ海原やすまも明石も明石もかゝる浦なみ

一 和歌に六義あり風賦比興雅頌なり、たとへを風、義を布を賦、

類をとるを比、物を感じるを興、政事を雅、成功を頌と心得へし

とそ（29才）

*1 都「吹く」かせ」。

*2 都「笠」野」。以下も同様。

*3 都「笠」の」。

*4 都「島」え」。

*5 この一首、都にはなし。

*6 東大「明石」の重複をミセケチ。

是細川玄旨法印の説なり、又ある書に

風は光なし草木にあたりて其品見ゆる物なればそへうたといへり
難波津の歌を風といへり、賦は心を偏にとゝめすして偏執なきを
いへり、されはかそへ歌とそいふなる

有常か歌に

ちれはこそいとゝ桜はやさしけれ

何か浮世に久しかるへし

比は物にたくらふるものなればなそらへ歌といふなり、一には兩

頭比

あひ見んと祈りし事のかなわすは

わすれたにせよ神のちかひに

二には言義比

(29ウ)

梓弓をして春雨けふふりに

あすさへふらはわかなつみてん

三には義牀比

筏おろす清瀧川に澄む月は

棹にさわらぬ氷なりけり

興は譬と興をかねたればたとへ歌といふなれ

大海を硯の水につくしても

言や残さん我かおもひをは

雅はおもふこと少しもかたよらす、一筋に始より終までいひくた
すなれば、たゝことうたといふことなり

春たつといふ計にやみよしのゝ (30オ)

山もかすみて今朝は見ゆらん

頌は讃て神明に告る心あればいはす歌といへり^{*1}

此殿はむへもとみけりさき草の

三ツは四ツはに殿つくりせり

一、古今集の序にそへうたかそへうたなすらへうたたとへうたたゝ
こと歌いはひうたの六くさありと書けり、一ツに、そえうたおほ^{*2}

さゝきの御門をそへ奉れるうた

なにわつにさくや此花冬こもり

今は春へとさく(へ)やこのはな

二ツに、かそへうた

さく花におもひつく身のあちきなき (30ウ)

*1 「す」ママ。「ひ」の誤写か。

*2 都「そへ」。

身にいたつきのいるもしらすに(ん)

三ツに、なそらへうた

君にけさあ(お)したの霜のおきていなは

恋しきことにきえやわたらん

四ツに、たとへうた

我恋はよむともつきしありそ海の

浜の真砂はよみつくすとも

五ツに、たゝことうた

いつわりのなき世なりせはいか計
人のことのはうれしからまし

六ツに、いわぬうた

このとはむへもと見けりさきくさの

三ツは四ツはにとの作りせり (31才)

一、和歌に八品といふ事あり、詠物、贈物、述志、恨人、惜別、謝過、題歌、和歌なり

詠物はまつ始に名声をあらわさずして
対を設けよ、春山を詠する時は先冬の山
をあらわすへし

冬過ておもひはる山如斯いふへし

贈物はもはら其物を貴はすして色を

色^{*1}をあらわす事髣髴なれ、すへて人に

おくるもの豈皆美物ならんや

ものと見ん数にはあらねと如斯いふへし

述志は後代に軌模とせしむ心にまかせて

頼略する事なかれ、再三議して是をのへよ

浅香山かけさへ見ゆる山の井の如斯いふへし (31ウ)

*1 都「色を」の重複なし。

恨人は終に其心をやふらすしつかに思ひて
心を掇てやうやく心をのへよ

伊勢の海にもしほやくなれ思して如斯いふへし
惜別は悦喜悲嘆心中にまてしつかに心を
のへよ

ゆく水にけふわかれなは如期いふへし

謝過は毎句に義を失わすして翁浩謝過^{*1}

いまは我がひとひふつかのあやまちか如此

いふへし

題歌は忽に題を得て早速に善悪をかゑりみすわつかに病を去を可
好

和歌はその人の歌の中に章句を取て水火に相たかへよ

一、短歌は字足らす五七五七とつらねたる歌 (32才)

*1 「翰」か。

といへり

一、漩頭歌は六句によめる

初瀬川古河のへに二本ある杉年を経て

又も逢見ん二本有杉

一、混本歌は下句七字なし四句にて成就

するなり

朝かほの夕かけまたす散やすき花のよそ

かし

一、回文歌^{*1}はうちかへしてよめはもとの歌也

むらくさにくさのなはもしそなわらは

なそしも花のさくにさくらむ

一、慇懃尾籠の事本より数ならぬ身にて数ならぬ身なと卑下はよからぬ心得なり（32ウ）

*1 都「文」の「」。

一、歌は病を能く弁へてよまざるへし、一に同詞の病一首の内に同し詞の余多ありて耳に立つ也（こと）

二に同字の病、一首の内に同字の指合て聞にくき也

三に乱思の病、歌の心も聞へす理もなき歌也

四に風傍病、むねとよむへき事をそはになし、異事にかゝる歌也

五に片題病、ふたつ題にかた／＼を嘗てかた／＼をそしる也

六に首尾上の始の句と下の句の終とかけあわぬをいふ

一、本歌取やうの事四のやうあり

一に詞をひとつにして心をかへ、二に心をひとつにして詞をかへ、

三に本歌の上下の句を打かへしてとる四に本歌の大意を取り此外

歌をとる躰あまた無名抄に見えたり（33才）

此集は近世の歌をなん集め侍るに、前の六葉はふるき歌と和歌のよみかたなど記せるは本意のたかひたるわきなれとも、此巻修飾するの目見出せるまゝ（し）適閑^{*2}ち入たるものなり（33ウ）

*1 都「本意」た「の」なし。

*2 県図、東大「閑」、都「閑」。

鹿兒島県史料集刊行一覽

集	史料名	執筆者	集	史料名	執筆者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫	28	要用集(上)	芳 即正
2	丁丑日誌(上)	村野守次	29	要用集(下)	芳 即正
3	薩摩国新田神社文書	芳 即正	30	桂久武書翰	村野守次
4	一向宗禁制関係資料	五味克夫	31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)	桐野利彦
5	薩摩国山田文書	桃園恵真	32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)	宮下満郎
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	五味克夫・郡山良光	33	江夏十郎関係文書	山田尚二
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	桃園恵真	34	示現流関係史料	宮下満郎
8	御登御道中日帳御下向・列朝制度	五味克夫・郡山良光	35	樺山玄佐自記並雜談・樺山紹劍自記	晋 哲哉
9	明治元年戊辰戦役関係資料	原口虎雄	36	島津世禄記	山田尚二
10	伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並に解説	村野守次	37	島津世家	畠中 彬
11	管窺愚考・雲遊雜記傳	増村 宏	38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
12	川上忠塞一流家譜	五味克夫	39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
13	本藩人物誌	五味克夫・桑波田興	40	薩藩学事一・鹿兒島師範学校史料	宮下満郎
14	薩陽過去帳	桃園恵真	41	薩藩学事二・薩藩学事三	畠中 彬
15	備忘抄・家久公御養子御願一見	宮下満郎	42	薩藩名勝志(その一)	吉元正幸
16	鹿兒島縣地誌(上)	五味克夫	43	薩藩名勝志(その二)	吉元正幸
17	鹿兒島縣地誌(下)	桐野利彦	44	薩藩名勝志(その三)	吉元正幸・塩満郁夫
18	薩藩舊土文章	桐野利彦	45	鹿兒島県布達(上)	宮下満郎
19	薩藩先公貴翰(乾)	五味克夫・桑波田興	46	鹿兒島県布達(下)	宮下満郎
20	薩藩先公貴翰(坤)	五味克夫・桑波田興	47	伊地知権左衛門日記・先君掖官遺抄	堂満幸子・林 匡
21	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事	芳 即正	48	加治木古老物語・薩藩雜事録・雜事奇談集・舊薩藩奇譚日記集 上・下	安藤 保・徳永和喜
22	小松帯刀日記	芳 即正	49	西藩烈士干城録(一)	徳永和喜
23	新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)	芳 即正	50	西藩烈士干城録(二)	徳永和喜
24	新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)	原口虎雄	51	西藩烈士干城録(三)	徳永和喜
25	三州御治世要覧	原口虎雄	52	通昭録(一)	安藤 保・清水 勝
26	桂久武日記	宮下満郎・桑波田興	53	通昭録(二)	塩満郁夫・尾口義男
27	明赫記	村野守次	54	通昭録(三)	丹羽謙治
		宮下満郎	55	通昭録(四)	中山右尚

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十首順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 前始良市歴史民俗資料館長

金井 静香 鹿児島大学教授

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

塩満 郁夫 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

堂満 幸子 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 西郷南洲顕彰館長

中野 翠 元指宿高等学校長

中山 右尚 鹿児島大学名誉教授

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

日隈 正守 鹿児島大学教授

三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授

宮下 満郎 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

「通昭録」(四)

(鹿児島県史料集 第五十五集)

平成二十八年三月

発行

鹿児島市城山町七―一
鹿児島県立図書館

電話 〇九九―二二四―九五―一
FAX 〇九九―二二四―五八二四

印刷

鹿児島市中央町二七―一六
かわち印刷有限公司
電話 〇九九―二五四―五〇五四